

文部科学省 WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業

2024 年度

〈2022年度指定 第3年次〉

研究開発実施報告書

～ニューノーマル時代の地域創生を加速する高校生グレーター・ナゴヤ・プロジェクト～



2025年3月

名古屋商科大学系列校

名古屋国際 中学校
高等学校

NUCB INTERNATIONAL JUNIOR & SENIOR HIGH SCHOOL

ご挨拶

《事業拠点校》

本校は、文部科学省「WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業」事業拠点校として採択され、3年目を迎えることとなり、高校生へ高度な学びを提供する「ConnectEd（アドバンスト・ラーニング・ネットワーク）」を発足させる運びとなりました。

「ConnectEd」には、次に述べる3つの特徴及び7つの取り組みがあります。

○3つの特徴

- 1 単独の学校では実現できない企画の実施
- 2 教育の質を高める多様な視点の融合
- 3 連携による教育の相乗効果

○7つの取り組み

- 1 グローバルなネットワークの構築
- 2 イノベーションと起業家精神の推進
- 3 SDGsと社会的責任に対する取り組み
- 4 多文化共生と異文化理解の深化
- 5 最先端技術と教育の融合
- 6 グローバルリーダーシップの育成
- 7 地域社会との連携

このように本校は、次世代の国際教育をリードする包括的なネットワークを令和7年度以降、形成していくことになります。

さて、今年度の高校生国際会議は、日本最大のスタートアップ中核支援拠点であるSTATION Aiにて、テーマ「New Borderless Education」を掲げて行いました。この会議内では、世界中で求められるスキルを身につけ、社会的責任を意識したリーダーとしての資質を育むことを目標として、「WWL（Win Win Learning）」が提言されました。

さらに本校では、テーマとして「共創拠点～共創から始まる、未来を生き抜くための学びの在り方～」を掲げ、WWLコンソーシアム構築支援事業成果報告会（ConnectEd 2025）を開催し、3年間の集大成を行うことができました。本校は、建学の精神「Frontier Spirit（開拓者精神）」の教育理念のもと教育活動をしており、今後さらなるイノベティブなグローバル人材の育成に取り組むことが使命であると強く確信しています。

最後になりましたが、本研究開発実施報告書に記載の通り、各関係機関の皆様方から厚意的なご支援・ご協力を賜り、本校の「WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業」の内容が着実に深化し、指定3年目を無事に終えることができましたことを心から感謝をし、厚く御礼申し上げます。

令和7年3月
学校法人栗本学園
名古屋国際中学校・高等学校
校長 小林 格

ご挨拶

《管理機関》

管理機関・学校法人栗本学園（名古屋商科大学）より一言ご挨拶を申し上げます。この度、名古屋国際中学校高等学校が採択された「ニューノーマル時代の地域創生を加速する高校生グレーター・ナゴヤ・プロジェクト」の名称で文部科学省「WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業」（2022-2024年度）が3年間の取り組みを無事に終了させる運びになっていることをお喜び申し上げます。

この事業は愛知県だけでなく我が国全体の将来を担う人材を育てる、大いなる挑戦です。①イノベティブな人材の育成②グローバルな人材の養成、そして③アドバンスト・ラーニング・ネットワーク（ALネットワーク）の構築という3つの諸特徴が、次々と実績として花開きました。昨年度はALネットワークの実質化に向け、Meta-Schoolにおける高校生国際会議ConnetEd 2024を実施し、今年度はグローバル人材育成に焦点化しConnectEd 2025を通じて、学びに関わった生徒の皆様をはじめ、多くの関係者と共に、永続的に繋がるワールドワイドなビジネス教育の学びのプラットフォームの形成が進行していることを実感しました。また、高大連携でも本学が積極的に推進するケースメソッド教育と、商学部が中心に進めるフィールドメソッド教育も含め、正課内外の両面で有機的な連携の輪が広がりました。

本事業の推進体制は、以前に2019-2021年度に「持続可能なランドスケープの設計～天白川水系から世界を俯瞰する～」の取り組み（文部科学省「地域との協働による高等学校教育改革推進事業」グローバル型に採択）の時からご指導頂いてきた北村友人先生（東京大学・教授）および伊藤博先生（名古屋商科大学・教授）に継続して運営指導委員会のご指導を頂きつつ、カリキュラムについては木本健太郎先生がアドバイザーとなり、さらには検証委員として鶴飼宏成先生（名古屋市立大学・学長補佐）光永悠彦先生（名古屋大学・准教授）、そして小野裕二先生（名古屋商科大学・教授）の3名のご指導を賜りながら、グローバル・ローカルの両面で飛躍する素地がしっかり固まりました。既に長きに渡り培われている国際バカロレア認定校としての名古屋国際高校の歴史や資源とも相俟って、生成系AI(Artificial Intelligence：人工知能)のさらなる複雑な諸相も取り込みつつ、地域社会や産業界の期待に応えられるような次代の人材育成がますます加速していくことを心から願っています。ここにご挨拶の言葉に代えさせて戴きます。

令和7年3月

学校法人栗本学園
名古屋商科大学 商学部
教授 亀倉正彦

目 次

【1】	本校の概要	1
【2】	研究開発概要	2
【3】	概念図	4
【4】	事業実施計画	5
【5】	令和6年度活動計画	1 2
【6】	国際理解研修	1 3
【7】	国際理解講演会	4 1
【8】	生徒の実践活動	4 3
	[A] 学校設定科目—WWL特論—	4 4
	[B] 全国高校生フォーラム	5 1
	[C] 事業連携校との取り組み	5 4
	[D] SDGs未来倶楽部Sus-Teen!実践報告	5 8
	[E] Business Design Club実践報告	6 4
	[F] 国際コンテストクラブ実践報告	6 7
	[G] 海外交流	7 0
【9】	WWL高校生国際会議	7 2
【10】	ConnectEd 2025	8 7
【11】	リングスキルを用いたWWL対象生徒の英語力効果測定	9 8
【12】	運営指導委員会（ALネットワーク運営委員会・検証委員会）	10 3
【13】	カリキュラム委員会（WWLカリキュラム開発会議）	11 3
【14】	講評	12 0
	○伊藤 博氏（運営指導委員）名古屋商科大学大学院マネジメント研究科 教授	
	○北村友人氏（運営指導委員）東京大学大学院教育学研究科 教授	
【15】	次年度に向けて	12 3
	○黒宮祥男 名古屋国際中学校・高等学校 国際教育推進主任	

【1】本校の概要

(1) 学校基本情報

学校名：学校法人栗本学園 名古屋国際中学校・高等学校

校長名：小林 格

所在地：愛知県名古屋市昭和区広路本町1-1-6

電話番号：052-858-2200・052-853-5151

FAX番号：052-853-5155

(2) 課程・学年・学級数及び教職員数

① 課程・学年・学級数（令和6年5月）

課程	学科	高校第1学年		高校第2学年		高校第3学年		計	
		生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
全 日 制	普通科（中高一貫）	59	2	58	2	51	2	168	6
	普通科（グローバル探究）	—	—	29	1	16	1	45	2
	普通科（国際バカロレア）	22	1	24	1	21	1	67	3
	国際教養科	66	2	36	1	36	1	138	4
計		147	5	147	5	124	5	418	15

② 教職員数（令和6年5月）

校長	教頭	教諭	養護教諭	常勤講師	非常勤講師	事務職員	委託事務職員	用務員	計
1	2	19	1	12	46	6	1	1	89

(3) 学校の特徴

① 建学の精神

「開拓者精神（フロンティア・スピリット）」

② 5つのグローバルアクション

(A) WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業指定校

(B) 国際バカロレア・ディプロマプログラム認定校

(C) 国際教養科の設置

(D) サステナブルスクール認定校

(E) 文部科学省教育課程特例校

③ 本校では、国際的に活躍できるグローバルリーダーに求められる国際的素養を、次の5つの能力の向上によって醸成されると考えている。

(A) 国際的な視野に立って思考する能力

(B) 外国語でコミュニケーションする能力

(C) 寛容な態度をもって問題を解決する能力

- (D) 物事を主体的に探究する能力
(E) 自らを省察して多面的に評価する能力

【2】研究開発概要

期間	ふりがな	がっこうほうじんくりもとがくえん	所在都道府県
令和4年度 ～ 令和6年度	管理機関	学校法人栗本学園	愛知県
	ふりがな	なごやこくさいちゅうがっこう・こうとうがっこう	
	事業拠点校	名古屋国際中学校・高等学校	

令和4年度WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム 構築支援事業構想計画書

1 構想目的・目標の設定

(1) イノベティブなグローバル人材像

名古屋国際中学校・高等学校が、開校以来掲げるグローバルリーダーの行動指針は、以下の5つの能力を身につけさせることとしている。

- ・ 国際的な視野に立って思考する能力
- ・ 外国語でコミュニケーションする能力
- ・ 寛容な態度をもって問題を解決する能力
- ・ 物事を主体的に探究する能力
- ・ 自らを省察して多面的に評価する能力

この行動指針の能力を獲得させるために、本校は令和元年度文部科学省指定の「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」（以下、地域協働推進校（グローバル型）とする）に取り組み、グローバル人材を育成してきた。この延長として本事業を通じて育成するイノベティブなグローバル人材像を下記の通りとする。

【目指すイノベティブなグローバル人材像】

「自らが出会う新しい時代の価値や課題を読み、新たな技術・スキルを身に付け、協働と革新を持続しながら新しい道を切り拓く人材」

本校が、卒業までに生徒に習得させる具体的な能力は、以下の5つである。

- ① コミュニケーション能力・・・イノベティブなグローバル人材には、自分の考えを相手に正確に伝えるための対話力が基盤となる。それには論理的に説明できる文章表現力及び基礎的な読解力が必要となる。さらに、表情や動作などの身体的表現を意図的に用いたり、相手の意図や感情を汲み取って共感的に理解できたりする力を身につけていく。
- ② 共生協働能力・・・個人や社会の多様性を尊重し、それぞれの強みを生かし、共に支え高め合える社会の実現を目指すための共生協働の精神を育み、社会的スキルを高めていく。
- ③ 自己管理能力・・・自分の目標や目的を達成させるための道のりで価値を見つけるために、自分をどれだけコントロールし、感性を磨くことができるかが、マネジメントを行う上で必要となる。そのために計画を立て、一つひとつをクリアし、探究活動をし、振り返りをし、着実に遂行する堅実さを身につけていく。
- ④ 情報活用能力・・・情報活用能力は、学習の基盤となる資質能力であり、情報の収集・整理・比較・発信・伝達・保存・共有から情報手段の基本的操作、プログラミングの思考、情報モラル、情報セキュリティ、統計まで幅広く身につけることは、課題解決学習に必要な能力となる。

⑤ 科学的思考能力・・・科学的思考能力とは、批判的な疑問・予想・条件制御・比較分類・モデル化・論理的な推論・総合的な判断の要素で成り立っており、イノベティブな新しいアイデアを生み出す原動力となる。

(2) ALネットワークの目的と役割

ALネットワークは、事業拠点校である本校の電子図書館から情報を発信し、また情報を集約し、アーカイブ機能を保持することとなる。そして様々な学校や団体で構成し、協力してイノベティブなグローバル人材を育成することを目的としたコンソーシアム体制を構築する。管理機関及び事業拠点校に加え、国内外の大学及び国内外の高校、国際機関、スタートアップ、企業、NPO等の団体を擁するネットワークとなる。ALネットワークの役割として、以下の7つがある。

- ① 高校生のアントレプレナーシップの形成
- ② ALネットワークコンソーシアムの構築
- ③ グローバル拠点都市と世界を繋ぐカリキュラム開発
- ④ 高校生国際会議の開催
- ⑤ 海外からのインバウンド強化をし、留学生とともに学ぶ学習組織づくり
- ⑥ 高校大学大学院と連携をした単位先取り認定学習の構築
- ⑦ 生徒への講演会、教員の研修やセミナーの開催

事業連携校は、この取り組みの構築や改善に関与しつつ、それぞれが持つ独自のプログラムをALネットワーク内で共有する。また、国際機関、スタートアップ、企業、NPO等の団体も同様に独自の資源を共有すると同時に生徒や教員の研修に参加し、学校へアドバイスするなどして学校で不足する部分を補うこととする。

(3) 短期的、中期的及び長期的な目標

本校は、本事業を通し、地域創生を加速させるためにアントレプレナーシップを醸成させ、グローバル拠点都市がスタートアップを起爆剤にイノベーション創出の土壌形成に関わり、世界と繋ぐことを下記の①～③の3つの目標とする。また、令和6年に名古屋市昭和区の鶴舞エリアでSTATION Aiが運用されるので本校の電子図書館と共用開始をする。①短期目標 令和4年～令和6年 Meta-School構築（対話セッション、国際会議開催）②中期目標 令和7年～令和9年 Meta-School強化（STATION Ai共用運用）③長期目標 令和10年～イノベーション創出土壌形成（スタートアップ人材の創出）

（Meta-Schoolとは、仮想空間ツールを利用して、スタートアップとコラボレーションし、高校生のアイデアを反映させ、世界と地域が抱える社会的課題の解決を目指す学習の場）

本校は、下記の3つのビジョンを策定しており、イノベティブな人材像やALネットワークの目的と役割を果たす元となっている。

Vision 1 世界基準の魅力ある国際教育を先駆的に取り組む私立学校

Vision 2 持続可能な国際社会に貢献できる高い志を持った国際生

Vision 3 世界と日本の未来を担うリーダーとして活躍する卒業生

この3つのビジョンを実現するために、12のAction Planを実行する。

【3】概念図

ニューノーマル時代の地域創生を加速する高校生グレーター・ナゴヤ・プロジェクト

～グローバル拠点都市と世界を繋ぐ～

名古屋商科大学
名古屋国際高等学校

- ▶ **未来の自分**
【育む人材】
- A 時代を読む・コミュニケーション能力
 - B 人と人を繋ぐ・共生協働能力
 - C 自分をコントロールする・自己管理能力
 - D 学びの基盤・情報活用能力
 - E アイディアを生み出す・科学的思考能力

- ▶ **事業連携校**
- 国内 -
 - 名古屋市立立南高等学校
 - 奈良県立国際高等学校
 - 高知県立高知国際高等学校
 - 国際高等学校 (2022年9月開校予定)
 - 海外 -
 - Immaculate Conception School of Baliuag (フィリピン)
 - / Juan Diego Catholic High School (アメリカ) / Lycée Georges Clemenceau (フランス)
 - ス / UCSI International School (マレーシア)

Meta-School



Meta-Schoolの構築とインフラ管理

【事業拠点校】名古屋国際中学校・高等学校

- 課 営 組 織
- ALネットワーク協議会・ALネットワーク運営委員会・国際教育推進委員会・事務局
 - ブ ラ ー マ
 - 教 育 課 程

2019年～2021年
地域との協働による高等学校教育改善推進事業
(グローバル型)

2015年～
SGHアソシエイト

(管理機関)

高校生グレーター・ナゴヤ・プロジェクト 学校法人聖本学園

▶ 中長期ビジョン

- 短期目標 2022年～2024年
Meta-School構築 (対話セッション、国際会議開催)
- 中期目標 2025年～2027年
Meta-School強化 (STATION AI活用運用)
- 長期目標 2028年～
イノベーション創出士養成 (スタートアップ人材の創出)

▶ 愛知県スタートアップ支援拠点 'STATION AI'

- ▶ 事業協働機関
- 大学・大学院 -
 - 名古屋商科大学 (NUCB)
 - 名古屋商科大学大学院/マクコリーリ大学
 - 国際機関・自治体・企業等・NPO -
 - 国際連合地域開発センター/愛知県経済産業局スタートアップ推進課/日進市生活支援局市民協働課/独立行政法人国際協力機構 (JICA) 中部センター/公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) / 特定非営利活動法人アイキャン/中部国際空港株式会社/公益財団法人名古屋国際センター/西日本電信電話株式会社/ドイトーモーターベンチャーサポート株式会社

【4】事業実施計画

(1) 事業の実施期間：(契約締結日)～令和7年3月31日

(2) 事業拠点校名：名古屋国際中学校・高等学校(学校長 小林 格)

(3) 構想名：ニューノーマル時代の地域創生を加速する高校生グレーター・ナゴヤ・プロジェクト

(4) 構想の概要：「高校生グレーター・ナゴヤ・プロジェクト」を構築し、ニューノーマル時代に生きるイノベティブなグローバル人材を育成する。「自らの地域課題の発見と解決に向けたアイデアの創出と実践」を事業連携校との共通の研究テーマとし、事業拠点校では地域との協働による高等学校教育改革推進事業(グローバル型)の研究課題を発展させる。生徒は、地域や国ごとの実践活動に対し、高度な専門的知識の習得や建設的な議論を行うために仮想空間「Meta-School」に参加し、多様な学びを体験できる場を得る。その過程において、事業協働機関や愛知県に拠点を置くスタートアップとの協働活動や留学生との交流により、イノベーション創出のための素養として必要なアントレプレナーシップを獲得する。高校生国際会議では、生徒・教員それぞれが議論する場を作り、WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)対話セッションでは、一般参加者との交流も踏まえ、本事業の趣旨を広く普及啓発していく。

(5) 令和5年度の構想計画(本事業における教育課程の特例の活用：無)

令和4年～令和6年は、短期目標としてMeta-School構築(WWL対話セッション、国際会議開催)を計画している。その指定2年目として、以下の項目を実施する。

①ALネットワークの構築

令和5年度は、地域協働推進校(グローバル型)で構築した事業連携校・事業協働機関に加え、愛知県経済産業局革新事業創造部スタートアップ推進課を基軸としたアントレプレナーシップを持つ人材による対話を増やし、より先進的な取り組みの実践を可能としたネットワークの構築を図る。また、事業拠点校が持つ以下のネットワークから得られた情報や交流の機会を事業連携校に共有を図ることでALネットワークに所属する生徒にとって有機的なネットワークを目指す。

(i) SGHネットワーク:文部科学省

(ii) #せかい部：文部科学省

(iii) ASPnet(ユネスコスクール・プロジェクト・ネットワーク)：ユネスコ(UNESCOパリ本部)公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)

(iv) 地方創生SDGs官民連携プラットフォーム：内閣府地方創生推進事務局

(v) 愛知県SDGs登録：愛知県政策企画局

(vi) 名古屋市SDGs推進プラットフォーム：名古屋市総務局

事業連携校・事業協働機関との交流においてはビデオ会議システム(Zoom)や

仮想空間（メタバース）であるMeta-Schoolで行う。Meta-Schoolでは、ビデオ会議システム（Zoom）や対面以外の新しい交流の中で生み出される表現の自由度や交流の流動性などを検証する。Meta-Schoolのインフラ開発は、事業拠点校ICT・DX担当が行う。

スタートアップによる特別講義は、STATION Ai関連のスタートアップ企業やデータサイエンス関連は名古屋商科大学を予定している。

事務局では、5月から事業連携校・事業協働機関との調整・連絡等の事務活動及び情報の共有や配信を実施し、Googleドライブによる情報集積のシステムの整備やInstagram/Facebook/Youtube等のソーシャルメディアの効果的な活用による情報やデジタルブックの配信を実施する。

ALネットワークの構築は以下の組織で実施する。

〔運営組織〕

管理機関：学校法人栗本学園 事業拠点校：名古屋国際中学校・高等学校
管理機関内にALネットワーク責任者を置き、次の協議会及び委員会を開始する。

◎ALネットワーク協議会（管理機関・事業拠点校・事業連携校・事業協働機関）

○ALネットワーク運営委員会（管理機関・事業拠点校）

・カリキュラム開発部：カリキュラムアドバイザーを中心としたカリキュラム管理

〔事業協働機関〕

名古屋商科大学（NUCB）・名古屋商科大学大学院（NUCB）・Macquarie University（オーストラリア）・国際連合地域開発センター（UNCRD）・愛知県経済産業局革新事業創造部スタートアップ推進課・日進市生活安全都市民協働課市民協働係・独立行政法人国際協力機構（JICA）中部センター・公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）・公益財団法人名古屋国際センター（NIC）・特定非営利活動法人アイキャン（ICAN）・中部国際空港株式会社・西日本電信電話株式会社・デロイトトーマツベンチャーサポート株式会社

〔事業連携校〕

名古屋市立名東高等学校・奈良県立国際高等学校・高知県立高知国際高等学校・国際高等学校・Immaculate Conception School of Baliuag（フィリピン）・Juan Diego Catholic High School（アメリカ）・Lycée Georges Clemenceau（フランス）・UCSI International School（マレーシア）

②先進的なカリキュラム研究開発・実施

（i）文理融合・スタートアップを踏まえた学際的なカリキュラム開発

〈新たな教科・科目の設定〉

（a）WWL特論：地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）で実践していたSIA特論の内容を継承してWWL特論として令和4年4月より開講している科目の充実を図る。社会文化的視点（多文化共生と減災）、経済的視点（経済活動と貧困）、環境的視点（社会生活と循環）をキーワードにスタートアップに関する実践活動とALネットワークの効果的な活用を目指す。マーケティングや数的処理などの情報活用能力を高め、事業協働機関やスタートアップと連携するPBLの学校設定科目「WWL特論Ⅰ・Ⅱ」を学校設定教科「サステナビリティ」内に新設する。

(b) グローカル探究(総合的な探究の時間を使用)[高校1～3年生 1単位]:「多文化共生と減災」「経済活動と貧困」「社会生活と循環」についてグローバルな視点、グローカルな視点の両方から学習する。高校1年次は、3分野の基礎学習とICTリテラシーや文書作成、プレゼンテーションソフトのスキルについても学習する。高校2年次以降に生徒は各自取り扱う分野を1つ選択し、当該分野に関わる理想のまちづくりについて調査し、課題研究を行う。

(c) アカデミックリテラシー [高校3年生 4単位]: 高校3年生を対象に、名古屋商科大学での授業を先取り履修する。単位数は、本校で4単位、大学で2単位としてそれぞれ単位認定する。

(d) English Skills I・II [高校1・2年生 2または3単位] / Project Skills [高校3年生 3単位]: ネイティブインストラクターが指導する科目。既存の学校設定科目であるが、英語での自己表現(ディスカッション、プレゼンテーション)、英語での情報収集(文献や海外ホームページ等)、英文による論文要旨の書き方等、実践活動に必要な英語スキル醸成に向けて指導内容を改編する。

(ii) カリキュラムにおける海外研修・国内研修の実施

[海外研修]

令和2年度・令和3年度地域協働推進事業(グローカル型)において実施したオンライン型国際理解研修(カンボジアとオーストラリア)及び令和4年度の国際理解研修の実績を活かし、課題解決型学習(PBL)の国際理解研修を高校2年次で行う。対象生徒は実際に現地に赴く「海外フィールドワーク」と事前のオンラインによる研修に参加する。

新たな実践として、国際教養科では、大韓民国への研修コースを新設する予定になっている。

[詳細]

カンボジア・ベトナム1週間コース(カンボジア・ベトナム): 令和5年8月16日～23日事業支援対象

[内容]

カンボジア・トンレサップ湖畔のコンポンブルック村においてフィールドワークを実施する。事前に、グループごとに国内にて探究テーマを設定し、オンラインにて現地とフィールドワークの計画を立てる。フィールドワークによる調査以外に植樹作業(“国際の森”: 令和2年から継続しているマングローブの植樹)や歴史学習、現地学生との交流を計画している。

[国際理解講演会]

毎年開催している国際理解講演会を新たにMeta-School内に配信し、情報を共有する。

令和5年6月17日 国際理解講演会の実施（名古屋国際中学校・高等学校アトリウム）

講演者：山口昌子（やまぐち しょうこ）氏：産経新聞で特報部、外信部次長、パリ支局長を歴任。

（スケジュール）（a）講演・パネルディスカッション

（代表生徒及びファシリテーター）

（b）インタビュー：代表生徒によるインタビュー

（iii）Meta-Schoolにおける高校生国際会議及びWWL対話セッションの実施

（名 称）WWL高校生国際会議

（場 所）事業拠点校及びオンライン（Meta-School）

（スケジュール）

5月 準備開始（組織編成の確定）、事業連携校への概要説明

11月下旬 開始要項の決定

12月27日（水）WWL高校生国際会議開催

（内 容）事業拠点校及び事業連携校における地域協働・国際性を軸とした課題解決に向けた実践活動の報告及びスタートアップによる講演と助言。仮想空間（メタバース）上で参加生徒が自由にコミュニケーションし、ビデオ会議システム（Zoom）では実現できなかった動きを交えた自己表現や一体感が生まれる活動を計画している。

・各学校での実践活動の共有

（名 称）ConnectEd 2024 WWLコンソーシアム構築支援事業成果報告会

（内 容）地域協働推進校（グローバル型）で実施した対話セッションの実施方法を継承しつつ、ALネットワークを活用した多様な活動の発表に関する対話セッションを行う。より柔軟で多様な意見の集積を行い、高校生国際会議に向けた諸活動のブラッシュアップを図る。

（場 所）事業拠点校及びオンライン（ビデオ会議システム（Zoom））

（スケジュール）令和6年2月3日（土）

（参加者）事業拠点校関係者・事業連携校・事業協働機関・一般参加者など

③国際バカロレアATLに基づく生徒自己評価とアンケート実施による評価手法の検証

国際バカロレアにおいて用いられる「コミュニケーションスキル」「社会性スキル」「自己管理スキル」「リサーチスキル」「思考スキル」を活用し、本取り組みにおいて、生徒自己評価、担当教員評価、連携機関による評価を踏まえた評価方法の開発を目指す。

令和4年度からは、地域協働推進事業（グローバル型）で課外活動として実施し

た生徒と企業が連携した活動の流れを学校設定科目に組み込むとともに、担当部門を立ち上げ、ATLに基づく評価方法で評価する仕組みを確立する。

(スケジュール)

5月下旬：アンケート部門の組織化及びアンケート内容の検討を開始

7月下旬・12月上旬・3月上旬：アンケートの実施及び検証

④カリキュラムを研究開発する人材の指定及び配置

カリキュラム開発部の設置及びカリキュラムアドバイザーを5月から配する。カリキュラム委員会月1回実施し、カリキュラムアドバイザーによる助言をもとにカリキュラムの改善等を行う。

〈カリキュラムアドバイザー〉

氏名：木本 健太郎 氏

東京大学大学院修了。中学高校理科、高校地理教員免許・専修免許を保持。「環境プランナー」の資格を持つ。東京大学大学院在学中には自ら5つの会社を立ち上げるなどスタートアップの経験・実績を持つ。

勤務体制：カリキュラム開発部所属。対面ミーティング（月1回程度）、テレワーク（週2日）。勤務開始予定6月～。カリキュラム委員会への助言や提案を行う。

⑤高大連携によるカリキュラム開発

- (i) アカデミックリテラシー：名古屋商科大学にて科目履修を4月開講（高校3年生）
- (ii) WWL特論「高大連携」：4月から開講（高校3年生）
- (iii) 上記（ii）の授業をMeta-School内のシステムに組み込み、令和5年度には事業連携校の生徒も受講できる体制を整える。

⑥カリキュラム開発における財政支援

- (i) ICT機器及び通信機器：

地域協働推進事業（グローバル型）実施にあたり、オンラインを使用した実践活動における通信環境の整備や教員が使用するICT機器（iPad・モバイルルーター・有線ケーブル等）の調達のために費用を負担した。

(ii) 国際理解研修（カンボジア・ベトナムコース）にかかる旅費、その他スタートアップに関わる新規プロジェクトや研究活動によって発生する交通費等を負担する。

(iii) 国際バカロレア・ミドル・イヤーズ・プログラム（MYP）の評価手法に関わる研修費用（IBOワークショップ）の負担する。

- (iv) WWL先進校への視察に係る交通費を負担する。

6 事業実施体制

課題項目	実施場所	事業担当責任者
[1] ALネットワークの構築	名古屋国際中学校・高等学校 名古屋商科大学 名古屋市立名東高等学校 奈良県立国際高等学校 高知県立高知国際高等学校	小林 格・黒宮祥男 石井博巳・鈴木麻衣子 久木田隆宏 中尾雪路 廣瀬法民
Meta-Schoolのインフラ開発	名古屋国際中学校・高等学校	奥村仁崇・後藤彩可 神山清光
[2] 先進的なカリキュラム研究開発・実施		
(1) 文理融合・スタートアップを踏まえた学際的なカリキュラム開発	名古屋国際中学校・高等学校 名古屋商科大学	(WWL特論) 内藤圭祐 ・伊藤 恵・河合航輝 (総合) 大西康介・近藤佑思 (留学) 鈴木 悟 (スタートアップ) 黒宮祥男・Ussama Tanveer
(2) カリキュラムにおける海外研修・国内研修の実施	名古屋国際中学校・高等学校	大西直子 伊藤亘央
[3] Meta-Schoolにおける高校生国際会議及びConnectEdの実施		黒宮祥男
[4] 国際バカロレアATLに基づく生徒自己評価とアンケート実施による評価手法の検証		
国際バカロレアATLに基づく生徒自己評価		渡邊えみ
アンケート実施・分析		伊藤 恵・深田歩未
[5] カリキュラムを研究開発する人材の配置	名古屋国際中学校・高等学校	木本 健太郎 氏 鈴木 悟
[6] 高大連携によるカリキュラム開発		片山寿弘・大西直子 近藤佑思

7 課題項目別実施期間

業務項目	実施期間（契約日～令和6年3月31日）											
[1] ALネットワークの構築	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
		協議会 ／ 協働事業計画 開始									協議会	
Meta-Schoolの インフラ開発	検討 開始	研修				仮運用			国際 会議			分析 検証
[2] 先進的なカリキュラム研究開発・実施												
（1）文理融合・スタートアップを踏まえた学際的なカリキュラム開発／研究発表	科目 開始	委員会	講演会 （全学年）・委員会	委員会		委員会 ／発表	委員会	委員会	委員会 ／高校生国際 会議	委員会 ／ WWLフォー ラム	委員会 ／対話 セッション	委員会 分析 検証
（2）カリキュラムにおける海外研修・国内研修の実施	説明会 2回		探究 学習 開始		カンボ ジア FW2 年		活動 発表		活動 発表			
[3] Meta-Schoolにおける高校生国際会議及びWWL対話セッションの実施		計画 開始							高校生 国際 会議		対話 セッション	
[4] 国際バカロレアATLに基づく生徒自己評価とアンケート実施による評価手法の検証				アンケ ート 実施					アンケ ート 実施			アンケ ート 実施／ 分析 検証
[5] カリキュラムを研究開発する人材の指定及び配置		MTG	MTG	MTG	MTG	MTG	MTG	MTG	MTG	MTG	MTG	分析 検証
[6] 高大連携によるカリキュラム開発	科目 開始 FW											分析 検証

（注）FW（フィールドワーク）MTG（ミーティング）

【5】令和6年度活動計画

令和6年度は、令和5年度で構築した事業連携校・事業協働機関に加え、海外連携校との交流や企業連携を増やすことで、より広い範囲でのアントレプレナーシップを持つ人材による対話を増やし、より先進的な取り組みの実践を可能としたネットワークの構築を図る。また、事業拠点校が持つ以下のネットワークから得られた情報や交流の機会を事業連携校に共有を図ることでALネットワークに所属する生徒にとって有機的なネットワークを目指す。また、STATION Aiが10月開始され、ALネットワーク内に組み込むことでより社会と繋がった交流環境の整備を目指す。令和2年度・令和3年度地域協働推進事業（グローバル型）において実施したオンライン型国際理解研修（カンボジアとオーストラリア）・令和4年国際理解研修（カンボジア・ベトナム、シンガポール・マレーシア、カナダ、オーストラリア）・令和5年国際理解研修（カンボジア・ベトナム、シンガポール・マレーシア、オーストラリア）・フランス研修の実績を活かし、課題解決型学習（PBL）の国際理解研修を高校2年次で行う。対象生徒は実際に現地に赴く「海外フィールドワーク」に参加する。カンボジア・ベトナムコースでは、日本へのライブ配信を実施したので、令和6年度は事業連携校に加えALネットワークに属する企業等に配信する計画である。以下、令和6年度の国際理解講演会、国際理解研修等の計画である。

〔国際理解講演会〕

6月15日 国際理解講演会の実施（名古屋国際中学校・高等学校アトリウム）

・講演者：松浦 晃一郎 氏

（外交官、ユネスコ第8代事務局長、駐フランス共和国特命全権大使）

・スケジュール：（1）講演・パネルディスカッション

（2）インタビュー：代表生徒によるインタビュー

〔国際理解研修〕

（a）カンボジア・ベトナムコース：8月18日～25日

（b）オーストラリア：7月20日～8月25日

（c）大韓民国：10月14日～10月17日

〔WWL高校生国際会議〕

（場 所）STATION Ai

（スケジュール）12月26日開催→12月23日変更

〔ConnectEd 2025 WWLコンソーシアム構築支援事業成果報告会〕

（場 所）事業拠点校及びオンライン（ビデオ会議システム：Zoom）

（スケジュール）令和7年2月1日（土）

【6】令和6年度国際理解研修

①研修の目的

国際社会の発展に向けて行動できる「国際人」の育成をアドミッション・ポリシーとして掲げる本校では、先進の国際教育を展開している。その能力とは以下の5つである。

- ・国際的な視野に立って物事を考える能力
- ・外国語でコミュニケーションする能力
- ・思いやりと優しさをもち、公平な態度をとる
- ・物事を主体的に探究し、問題を解決する
- ・ふりかえりの力をもち、物事を多面的に評価する

これらの能力を養うために、教科書や教職員の話が中心である受け身の学習ではなく、海外研修で自らが動き、感じ、気づく能動的な学習が必要である。

②対象生徒

高校2年

(普通科中高一貫クラス、普通科グローバル探究クラス、国際教養科)

③3つのコースについて

- ・オーストラリアコース
- ・カンボジア・ベトナムコース
- ・大韓民国コース

オーストラリアコースは、現地校での授業とホームステイを経験することで、英語力向上を第一にしたコースである。また、オーストラリアの多様な文化・歴史・自然環境に触れることによりグローバルな視野で物事を見ることができるようになる。

カンボジア・ベトナムコースは、日系企業訪問や歴史・文化遺産の学習、現地の学生や市民とのふれあい、プロジェクトの企画および実施など主体的な体験を主とした活動を行う。その結果、主体的な探究心や冒険心を育み、新たな課題発見の視野を持つことができる。

大韓民国コースは、国際教養科が参加する新しいコースであり、韓国の分野や産業について学ぶコースである。

全コース希望制であり、日程によっては複数のコースに参加することが可能である。海外のコースは、行きたい場所という短絡的な目的で決めがちな点があるので、生徒にとってどのようなスキルや能力を身に付けたいか、何を学びたいか、将来にどのように活用できるかで選択をさせるように指導をする。

④ 研修前の主なスケジュール

令和6年4月6日(土)：生徒・保護者説明会①

令和6年5月11日（土）：生徒・保護者説明会②

令和6年6月15日（土）：生徒・保護者説明会③

⑤WWL対象コースであるカンボジア・ベトナムコースについて

カンボジア・ベトナムコースは、地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）に指定されてから研修計画がスタートした。当初より「生徒主体」、「観光ではできない体験型」、「プロジェクト企画実践（PBL=Project Based Learning）」をテーマに掲げていた。しかし、世界的な感染症の拡大により、海外研修が中止となる。そこで本校では、オンラインによる研修の検討を行った。当時は、世間的にオンラインシステムによる会議や通話が始まったばかりであり、オンラインでの旅行というものもなく、その計画は試行錯誤であった。内容に関しては、オンラインで現地の様子を眺めるというものでなく、現地ガイドに生徒が指示を出し、動いてもらうという形式にした。

- ・日本の漁法でカンボジアのシェムリアップ湖で魚は獲れるか。
- ・現地の子供たちに虫取りをさせる。日本との虫取りの概念の違いを知る。
- ・わらしべ長者をやってみる。

以上のようなプロジェクトが遂行されたが、常に現地と通話をしながら、行動したことによりリアリティがあり、多くの情報と経験、興味を得ることができた。また、お土産を買うこともでき、空輸してもらった。2年間、オンライン研修を行い、3年目は現地に研修に行くこととなった。当時、学校の研修として海外に行くことは難しい状況である中、感染症対策と危機対応の準備をし、実行に至った。現地研修1年目は、オンラインで実践したPBLに加え、現地の小学校への訪問や日系企業訪問、世界遺産の修復体験などを盛り込み、実施された。2年目以降も常にブラッシュアップをしながら研修内容の充実を図った。特に、オンライン研修時に行なったオンラインのやり方を活用した現地からの生中継を日本に配信した。この配信は、保護者のみならず、連携校の生徒や先生方、外部の方々にも見て見ていただいた。このリアルな映像は、生徒のリアルな姿を見ることができたと好評であった。令和6年は、鶏をさばくシーンや民家に生徒が入り、ご家族と談話するシーンなども配信できた。このカンボジア・ベトナムコースに関しては、学校の修学旅行の概念を変え、より生徒の探究心や冒険心を向上させることを目指し、今後も新しい取り組みを計画し、進めていきたいと考えている。

〔1〕 オーストラリア コース

(令和6年8月3日(土)～8月25日(日) 3週間コース)

(1) 研修の目的

国際社会の発展に向けて行動できる「国際人」の育成をアドミッション・ポリシーとして掲げる本校では、先進の国際教育を展開している。その能力とは以下の5つである。

- ・ 国際的な視野に立って物事を考える能力
- ・ 外国語でコミュニケーションする能力
- ・ 思いやりと優しさをもち、公平な態度をとる
- ・ 物事を主体的に探究し、問題を解決する
- ・ ふりかえりの力をもち、物事を多面的に評価する

これらの能力を養うために、教科書や教職員の話を中心である受け身の学習ではなく、海外研修で自らが動き、感じ、気づく能動的な学習が必要である。南オーストラリア3週間コースでは、オーストラリアの生活習慣や物の考え方を自分の身体と知性と感性で触れることで「国際人」になるための能力を養うことを目指した。

(2) 対象生徒

高校2年(普通科中高一貫クラス、普通科グローバル探究クラス、国際教養科)

14名

引率教員：1名

(3) 活動内容について

参加生徒14名がそれぞれ4つの現地校(Heritage College, Geelong Baptist College, Trinity College, Covenant College)に分かれて、ホームステイ先から通った。ホームステイ先は1家庭1名にして、できる限り英語での交流ができるように行われた。また、毎週1度は現地のカウンセラーによる相談会を設けて、その週の悩みや進行状況を確認し、学校とホームステイ先での問題がないかを確認した。

(4) 生徒活動報告

How Studying Abroad Australia Affected Me

MURAKAMI Sota (高校2年普通科)

Studying abroad in Australia was an exciting adventure that greatly impacted me. I noticed many differences from Japan, such as new cultural habits, different food, and a fresh way of thinking. Before I left, I set goals to make at least 10 friends and become fluent in English. I threw myself into new experiences and worked hard on my English, which helped me connect with people from different backgrounds.

At first, I was nervous about living with strangers for a whole month, but I quickly adapted and became more independent. This experience helped me understand different viewpoints and grow more confident. The school was also quite different from Japan. The classes were more relaxed, and teachers encouraged us to share our thoughts and ask questions. Although this was a bit challenging at first, I eventually got used to speaking up and expressing myself. Making friends was one of the best parts of my time in Australia. Even though I was shy and worried about fitting in, everyone was friendly and welcoming. I joined group activities, talked with classmates, and soon made a great group of friends. We hung out, tried new foods, and explored the area together. As we spent more time together, we learned from each other. I picked up new slang, learned about their cultures, and shared some aspects of Japanese culture with them. On weekends, we visited Melbourne, which was a fantastic way to experience more of Australia's vibrant culture and landmarks. One of my favorite things was visiting The Lume, an art museum with amazing exhibitions. On the last day of school, I was really sad to say goodbye to my friends, as it was hard to part with the people who had become so important to me. The journey back was also stressful because transferring planes from Singapore to Japan was particularly hectic. When we arrived in Singapore, we found that the gate to our flight to Japan was already open, and with so little time left, we had to rush through the airport to make our connection. By the time we finally boarded the plane, we were all completely exhausted. I was so tired that even when the cabin crew tried to wake me up, I remained fast asleep, completely unable to stay awake despite their efforts. Overall, my time in Australia was a rewarding experience, full of personal growth, cultural exchange, and lasting friendships. Coming back home, I'm grateful for everything I learned and excited to use

those experiences in my life.

My Special Experience in Australia

JO Sachi (高校2年国際教養科)

Before I went to Australia, I set a goal to speak as much English as possible to experience and understand their culture. I would like to talk about my school life and the time with my host family in Australia. We had school from Monday to Friday, but on Fridays, we don't have classes at school. We went around the town with our coordinator and learned about the culture of the town. Before we went to the town, we would get together and talk about our experiences in English, such as what we did with the family and the fun activities we did in our school. When I first shared my experience in English, my presentation didn't go well because the words I wanted to say didn't come out right away. I learned that even if you can easily write sentences with the correct grammar and words, when you start speaking English, it can be difficult to express if you don't use a lot of time to practice. Outside of this time, we had a class called "Performing Arts" which made us practice speaking English. In this class, we made stories, did debates, and interviews. In every part, we had to think about the content on the spot and talk right away, so it was hard. But it was good practice. I received a lot of advice and talked with the teacher, so I gradually became able to speak English fluently. Also, compared to Japanese classes, they gave a lot of their opinions, and ideas. Because of this, I could hear various opinions and enrich my ideas. This is a big difference from Japanese schools. I also had a valuable experience with my host family. My host family is from India, and their English pronunciation was different from the English I usually listen to, so it was difficult to communicate with them. However, they treated me kindly, and if I had something that I didn't know, they explained it many times, so I gradually communicated better and got used to life in Australia. I also experienced parts of Indian culture that I've never engaged with, such as food culture and lifestyle. I especially enjoyed the Indian food culture. In my image, I thought they ate curry at every meal but it wasn't. In their meals, there were not only curry, but also steamed bread, Indian-style vegetable soup, and fish dishes. The Indian curry was different from what I imagined. It wasn't thick as Japanese curry, it was smoother. Also, they put various spices in the curry so the flavor was unique. It

was the first time I ate these dishes, so I was impressed. On the weekend, I usually went to my host family's friend's house to have parties, and played tennis with them. We chatted together and shared our cultures with each other. I had a wonderful time with them. Through this program, what I improved the most was my ability to express things. When you go abroad, you may have something that you are not good at or don't understand. I learned that it is important to communicate with people and tell them your real feelings because they can't understand you unless you convey your intentions. I tried to talk with them as much as possible, so my English skills have improved and my relationship with people has also deepened. The memories in Australia were wonderful and I would like to use what I learned in my future life.

My First Experience Abroad - A Journey of Growth and Discovery

YAMADA Azusa (高校2年国際教養科)

Stepping onto foreign soil for the first time, my heart was caught between exhilaration and anxiety. It was an unfamiliar sensation—a mixture of eager anticipation for the unknown and a lingering fear of immersing myself in an entirely new world. My goal was clear: to embrace this new environment, to enjoy the experience, and most importantly, to speak English without hesitation or self-doubt. Yet, as I stood amidst a landscape so different from my own, I could not help but feel overwhelmed by the sheer unfamiliarity of it all. The sky above Australia stretched infinitely, its transparency and depth unlike anything I had ever seen. However, even beneath its breathtaking vastness, I felt a heavy weight in my chest. The thought of spending an entire month among strangers, in a foreign land, filled me with unease. But as the first week passed, the rigid tension within me began to soften. Slowly, I found myself adjusting to the rhythms of my new life. Like a pair of new leather shoes gradually molding to fit one's feet, the foreign air around me started to feel more natural, more like home. Classes in Australia were strikingly different from those in Japan. Group activities were abundant, and conversations played a crucial role in the learning process. Unlike in Japan, where passive listening often dominated the classroom, here I was expected to express my thoughts aloud. Speaking in front of an entire class was daunting; my pulse would quicken, and my words would falter. Yet, despite the discomfort, I sensed that this challenge was an opportunity—a

stepping stone toward a version of myself that I had yet to meet. As time passed, I began to enjoy learning English. The more I spoke with my host family and friends, the more rewarding it became. With my host family, I exchanged stories about school, and we shared insights about each other's cultures—Australia and Japan, two worlds interwoven by conversation. Weekends were filled with laughter and adventure: shopping, trips to the beach, and lively barbecues with my host family and friends. Communicating was not always easy. There were moments when I struggled to convey my thoughts, when words failed me, and silence took their place. Yet, through these struggles, I realized something invaluable—language is not just about vocabulary or grammar; it is about connection, about bridging the gaps between people, even when words alone are not enough. This journey was not just about language. It was an immersion into different ways of thinking, an exploration of values and customs that shaped my understanding of the world. Learning English slang from my friends was both amusing and educational; it allowed me to glimpse the culture beneath the language. In class, when I faced difficulties, my friends would help me, and I came to understand that seeking help is also a form of learning. The fear of asking questions faded, replaced by the realization that every conversation, every mistake, and every interaction was a step forward. Saying goodbye to my host family and friends was more painful than I had anticipated. The kindness they had shown me, their patience in helping me learn English despite my clumsy words, and the countless experiences they had shared with me—all of these made parting unbearably bittersweet. As I boarded my flight home, I carried with me not just memories but a newfound appreciation for the warmth of human connection that transcends language barriers.

Ultimately, what I gained from this experience was far more than just English skills. I gained a deeper understanding of culture, kindness, and friendship. This journey exceeded my expectations in every way, giving me the courage to speak with confidence, even when my English was imperfect. The world, once vast and intimidating, now felt within reach. I will continue to explore, to learn, and to embrace new experiences as I refine my English. With each step forward, I hope to cross more borders, both linguistic and cultural, and immerse myself in the endless possibilities that lie ahead.

（５）引率教員講評

経験のない環境に生徒たちを導くことへの不安や責任感を抱きつつ引率に臨みましたが、コースを終え、日本に帰国した際の彼らの晴れやかな表情を目にしたとき、その懸念がまったくの杞憂であったことを実感しました。彼らの顔には、異国の地で新たな挑戦に直面しながらも、目標に向かって自らを高めようと努力を重ねた充実感がはっきりと表れていました。その表情から、彼らが未知の状況に果敢に挑み、その経験を通じて大きな成長を遂げたことを確信することができました。この経験は、彼らが将来の夢を追い求めるうえでの貴重な一歩であり、困難を乗り越える力をさらに養う機会となったに違いありません。



ところで、今回訪れたオーストラリアのジロングと名古屋市の間には、意外にも深い自然的なつながりが存在することをご存じでしょうか。実は、毎年多くの渡り鳥がこの二つの地域を行き来しており、それぞれが彼らにとって不可欠な生息地となっている。ジロングと名古屋は、渡り鳥にとって餌の確保、休息、さらには繁殖のための重要な拠点であり、この壮大な自然の営みを通じて、地理的に離れた地域同士が結びついていることが分かります。このように、普段意識することのない視点から新たなつながりを発見できるのも、本研修がもたらす大きな意義の一つといえるでしょう。

教諭 大西康介

(6) 活動の様子



〔2〕カンボジア・ベトナム コース

（令和6年8月18日（日）～8月25日（日）1週間コース）

（1）研修の目的

カンボジアでは、矢場とんスクールへの訪問、コンポンブルック村でのフィールドワークを通じて異文化理解を主とした課題研究、マングローブ（名古屋国際の森）植樹やアンコール遺跡群の修復体験等も実施する。また、ベトナムでは、ベトナム戦争に関する平和学習や現地学生との交流や日系企業訪問等のプログラムを行い、多様な側面からさまざまな社会課題を視野に入れ、その課題解決の方法を考察することを目的とする。

（2）対象生徒

高校2年（普通科中高一貫クラス、普通科グローバル探究クラス、国際教養科）
29名

引率教員：2名

（3）活動内容について

【ベトナム】

- ①現地高校生との交流：グループごとに現地高校生1名と共にベトナム市街のフィールドワーク
- ②日系企業Plus訪問：（i）企業概要の説明（ii）工場見学（iii）質疑応答
- ③平和学習：統一会堂、戦争証跡博物館見学

【カンボジア】

- ①PBL学習：トンレサップ湖畔コンポンブルック村にてテーマ別グループフィールドワークの実施
- ②ユネスコ活動及び海外協力活動事業の理解：日本政府及びカンボジア作業員の方とバイヨン寺院遺跡修復活動
- ③現地市場見学：オールドマーケット及びマーケットの見学
- ④矢場とんスクール第4学校訪問：文化及びスポーツ交流等を行う。

(4) 行程表

日次	月日(曜)	地名	現地時間	交通機関	日程	食事
1	8/18 (日)	中部国際空港集合 中部国際空港発 タワンチャット国際空港着 タワンチャット国際空港発	06:45 09:00 12:45	VN0341 専用車	中部国際空港 出発ロビーにてご集合 ベトナム航空にて出発 ホーチミン到着、入国手続き。専用車にて市内へ移動 ホーチミン市内観光(タンディン教会・中央郵便局) 現地学生と一緒にB&Sプログラム 研修後、ビンコムセンターフードコートにて各自ご夕食 ＜ホテル泊＞	朝：－ 昼：機内 夕：－
2	8/19 (月)	ホーチミン	午前 午後	専用車	ホテルにてご朝食後、専用車にて出発 午前：日系企業訪問 (PLUS VITENAM) 昼食 (ベトナム料理) 午後：スディンパーク散策 研修後、高島屋フードコートにて各自ご夕食 ＜ホテル泊＞	朝：○ 昼：○ 夕：－
3	8/20 (火)	ホーチミン タワンチャット国際空港発 ブノンベン国際空港着 ブノンベン国際空港発	午前 16:00 16:55	専用車 VN0920 専用車	ホテルにてご朝食後、専用車にて出発 ホーチミン市内観光 (統一会堂・戦争証跡博物館) 昼食 (ベトナム料理) 昼食後、空港へ ベトナム航空にてカンボジアへ プノンペン到着、手続き 夕食 (カンボジア料理) ＜ホテル泊＞	朝：○ 昼：○ 夕：○
4	8/21 (水)	プノンペン	09:00～11:00 午後	専用車	ホテルにてご朝食後、専用車にて出発 矢場とんスクール第4学校にて学校交流 昼食：車内にておにぎりBOX 交流後、プノンペン市内へ移動 プノンペン市内にある倉田ベッパースHOP立ち寄り プノンペン市内観光 (王宮、シルバークロガ) 研修後、プノンペン市内 イオンフードコートにて各自ご夕食 ＜ホテル泊＞	朝：○ 昼：○ 夕：－
5	8/22 (木)	プノンペン シェムリアップ	終日	専用車 トゥクトゥク (往復)	ホテルにてご朝食後、専用車にて出発 (約6時間) 途中、世界遺産サンボレーレイクク遺跡観光 昼食：ローカルレストラン 立寄：アツ小中学校 シェムリアップ到着後、ホテルにてチェックイン ホテルから夕食会場までトゥクトゥクで移動 夕食：カンボジア料理とアプサラダンス鑑賞 夕食後、ナイトマーケット散策。散策後、ホテルへ ＜ホテル泊＞	朝：○ 昼：○ 夕：○
6	8/23 (金)	シェムリアップ	午前 午後	専用車	ホテルにてご朝食後、専用車にて出発 バイロン寺院遺跡修復活動と見学・体験 レストランにて昼食 (中華料理) アンコールワット観光、オールドマーケット散策 散策後、グリーンマーケットにて各自ご夕食 ＜ホテル泊＞	朝：○ 昼：○ 夕：－
7	8/24 (土)	シェムリアップ シェムリアップ国際空港着 シェムリアップ国際空港発 ノイバイ国際空港着	午前 午後 20:45 22:35	専用車 VN0842	ホテルにてご朝食後、専用車&ボートにて出発 コンボンプック村にてフィールドワーク フィールドワーク後、村にて記念植樹 昼食：トンレサップ湖水上レストラン ホテルへ戻り、休憩と帰国準備 空港到着後、出国手続き ベトナム航空にてハノイへ ハノイ到着 ＜機内泊＞	朝：○ 昼：○ 夕：－
8	8/25 (日)	ノイバイ国際空港発 中部国際空港着	00:15 06:55	VN0346	ベトナム航空にて日本へ 日本へ到着	朝：機内 昼：－ 夕：－

(5) 生徒報告書

Garbage problem and sustainable society

服部優奈（高校2年普通科）

私は部活動の活動に役立てるため、カンボジア・ベトナムの「ゴミ問題」の調査を研修の1つの目的とした。日本ではゴミ収集時の分別の杜撰さ、外国人とのゴミ出しトラブルが問題となっている。そこで、海外のゴミ出しのルールや意識について調査し、日本で起こっている問題との関連や問題解決に必要なことを考えた。

①ベトナム：ベトナムの街並みを見て、まず衝撃を受けたことは「ポイ捨て」の多さだ。ベトナムでは、道や川の至る所にゴミが落ちている。また、市民が当たり前のように、公共施設の門にゴミが入ったビニール袋を掛けたことが1番、衝撃的だった。

ベトナムでお世話になったガイドさんによると、ベトナムでは民間や個人がゴミの回収を行っており、ゴミ回収を仕事としてそれで生計を立てている人がいる。経済を発展させること、生活を豊かにすることと引き換えに、環境が犠牲になっていることがベトナムの現状だ。逆に言えば、国も人も発展し、豊かになることに精一杯で、それ以外のことに意識が向いていないのかもしれない。

私は、ベトナムの問題点はゴミの分別や捨てる場所などの環境問題教育や倫理教育の不十分さと国の生活インフラの整備と貧富の差にあると考える。

②カンボジア：ここで、意外だったのがカンボジアの方がベトナムの街並みより、川や道に落ちているゴミの量が少なかったことだ。しばしば、カンボジアは発展途上国の代表例として挙げられているが、ポイ捨てに関する倫理観念はカンボジアの方が進んでいる印象を受けた。また、コンボンプルック村では燃えるゴミと燃えないゴミの分別ができるようにゴミ箱が2つ設置されていた。漁業に使用する網を修繕しながら、何度も使用したり、穴が大きく使用できなくなったものは、ゴミ箱として再利用したりしていた。当人たちは限りある使える資源をなんとか使っているだけで、環境を守っているという意識は薄いかもしれないが、結果的に持続可能な生活となっているところに、本来の人間の社会活動の「こうあるべき姿」を見た。

③まとめ：ベトナムの街並みを見た時、日本や欧米の先進国が取り組んでいる環境問題に対する活動や運動に興味なんてないのではないかと思った。しかし、カンボジアのように限りある資源をできる限り利用する、教育によ



って倫理観を養うなどで、先進国、発展途上国関係なく、持続可能な社会を作ることができると希望を持てた。更に、コンポンブルック村のように、日本国民が見習うべき生活の仕方もあると発見もあった。

International Understanding Training in Vietnam and Cambodia

大野深礼（高校2年普通科）

私達はカンボジアとベトナムへ行き、日本との違いを学んできた。カンボジアではカンボジアと日本の応急処置の方法の違いから見る医療観念と民間医療の知識及び価値観の違いについて学んだ。

私はカンボジアに行く前は危険性の高い動物や危険な蚊などの虫がいるため、襲われ、病気にかかってしまう人が大勢いると予想をしていた。コンポンブルック村へ行き、現地の小学生に協力してもらうことにした。話していた言語は英語ではなく、クメール語だったため、ガイドさんがわかりやすく翻訳をし、私達に教えてくれた。そんな小学生たちが虫を見つけてくれて、日本では余り目にしない沢山の虫を目にした。その中に二種類のアリがいた。そのアリ達の違いは色にあり、赤色のアリと、黒色のアリがいる。赤色のアリは料理でも使えるため、毒を持っていない安心なアリだ。一方、黒色のアリは毒を持っているため、噛まれてしまうと熱がでたり、腫れたりする危険なアリだ。



他にもアリと同じように危険な虫がいる。それは蚊で、蚊は5月から10月の雨季に多く発生する。その蚊に刺されると、発疹、頭痛、骨関節痛、嘔気・嘔吐などの症状がみられ、1週間で治ると言われている。そんなアリや蚊に襲われてしまうと病院に行かないといけない。しかし、コンポンブルック村の病院はお金がかかってしまう。そこで、どのように対応をしているのか村長に尋ねてみた。

コンポンブルック村では、コンポンブルック村の住民限定で、年齢別のチケットがもらえ、そのチケットを見せることにより、値引きになるというサービスがある。こういった工夫のおかげで貧困の方でも安価で治療が可能になる。

ベトナムではベトナムと日本での交通機関の違いを学んだ。ベトナムでは、バイクに乗っている人が多く、車よりバイクの交通量の方が圧倒的に多かった。その中で日本ではありえない二人乗りや、三人乗りが多く、当たり前のように乗っていた。

ベトナムで、バイクが多い理由は車が非常に高く、バイクに乗る人が多くなったからだそうだ。ベトナムではバイクに乗る子供もいて、バイクを自転車のように運転できる子供がとて多かった。

バイクや車が通る道路は日本だと左側通行だが、ベトナムだと右側通行のため、バスに乗る時も右側から乗るため、とても違和感を感じていた。バスで通る町中を見ていると、道路沿いにコンビニや、お店が沢山並んでいて、車よりもバイクが駐車しているところが多く、中ではバイクの上で気持ちよく寝ている人もいた。バイクが非常に多いベトナムではいつ事故が起きてもおかしくないほどだったため、通るたびに驚いていた。

「My specialty trip in Vietnam and Cambodia」

米倉嘉啓（高校2年普通科）

自分は何回か家族旅行か習い事の研修などで海外に行ったことがあったが、全て英語圏（アメリカ、オーストラリア）のところにしか行ったことがなく、国際理解研修でベトナムやカンボジアのコースがあると聞いた時に、東南アジアの国は行ったことがなく、どんなところなんだろう、どんなことが出来るのだろう、食べ物はどうなのかなどと、その国についてたくさん興味が湧いてきていたのと、この先減多とない機会だと思うから、行けるなら行ったほうが良いという気持ちでこの研修に申し込んだ。

行ってみたら、道路の周りはゴミが散乱していたし、歩行者専用道路も舗装されておらず、違うところがたくさんあった。特に違うところがベトナムとカンボジアでは日本と違って車よりバイクの方が圧倒的に多い。車はこの2国にとっては高級すぎて、給料が割に合わないらしく多くの人を買えないらしい。このようなことが起きているのは、この国たちの経済情勢が関連していることを知った。

自分たちの研究テーマは特に2つあり、グループではコンポンルック村の水上建築のことや、個人的に音楽や楽器のことが好きなので、向こうの音楽や楽器に触れてこようと思った。グ



↑ バイヨン寺院の通路

ループで考えたものは、実際その町では釘を使わずに綱だけで固定する方法や、ホースを使って高さを測る方法があり、この村特有の高床式の建築方法を知ることができた。それにこの村は雨季の時にトンレサップ湖の上流にある中国のダムが原因と見た。中国のダムが一気に水を放出することで、水が上がってきて、普段は人が通れる道があるのだが、半ば水浸しになってしまうそう。下の階に何も置いてないのはこのためだったのだと思う。

個人で楽器に触れたいと思っていたのは、思いがけない形で実現した。カンボジアについてすぐに夕食を食べていたところ、木琴らしき音が流れていたの、先生を介して、その木琴を叩かせてもらうことになった。僕ら以外の外国人も僕の演奏する姿を見て動画を撮ってくれた。矢場とんスクールの先生の実家に行って友達がギターを弾いたことなど、こんないい機会は人生で初めてで、とても貴重だった。

僕はこの貴重な研修を経て、東南アジアの国に興味を持つことができ、昆虫食やこの2国の歴史や外交関係、クメール文明の歴史、独特な建築方法などたくさんを知ることができた。どんな研修になるのかなと思っていたが、楽しいこともあり苦労したり、慣れない環境に焦ったりしたとても充実した1週間だった。値段交渉も思うようにできなかったりして、昆虫食をもっと食べてみたかったのだが、それらも出来てもできなかったとしても100満点の研修だった。自分はこういった見知らぬ体験をするのが好きなので今回の研修はとても自分にとって刺激的であった。この研修は僕たちに探求する力と実際にそれをやってみる力をもたらし、実際にそれをやってみる実践力を与えてくれた。

(6) 研修時の様子



↑ 日系企業訪問



↑ KURATA PEPPER訪問
(ベトナム/ホーチミン)

↓ 地元大学生とのフィールドワーク



↓ 矢場とんスクールにて



↑ 矢場とんスクール第4学校訪問 (プノンペン/カンボジア)



↑ 矢場とんスクールにて



↑ 漁港・市場視察



↑ 植樹



↑ アンコール遺跡群の修復体験



↑ メコンボンブルック村プロジェクト活動（シェムリアップ/カンボジア）





↑ 矢場とんスクール

↓ コンボンブルック村





↑ 世界遺産サンボークレイック遺跡（プノンペン/カンボジア）

(7) 引率教員講評

本国際理解研修は、実体験による「自分だけの感情」を得ることが目的である。「カンボジアやベトナムの気候を調べてください」という学習があった場合、インターネット上で情報を収集し、まとめて発表する場面が多い。その「情報」は本当に正しいのか。その方法で調査したカンボジアの気候を「蒸し暑い」と発表しても、それは一般的な意見や他人の感覚ではないか。実際に現地に行ったら、自分の感覚は人それぞれではないか。インターネット上の情報は、一般的、専門的、そして他人の意見である。高校生の多感な時期に必要なのは、自分の意見・思いをいかに多く蓄積することである。本研修では、実体験を基とした自らの感情、喜怒哀楽を大いに揺さぶることを目的としている。そのために必要なことは、大きく以下の3点である。

(a) 生徒が主役であること

(b) チャレンジすること

(c) 教員が冒険のやり方を教えること

(a) を実施するためには、ある程度の自由度が必要である。ほったらかしではなく、教員側がしっかりと環境を与え、そこで自由に活動させることである。その環境は、(b) のチャレンジにつながるが、生徒の頭に「？」が浮かび、知りたいと思うような環境を作り、内発的な動機に繋がらなければならない。ただし、時には教員が背中を押し、自らも一緒にチャレンジすることも必要である。



(c) は、誰も体験したことがないような行程への冒険である。多少無茶な内容もありそうだが、温室では強い子供育たない。また、行程の内容自体が「冒険している」と生徒が感じるからこそが大切であり、また教員も行程中は冒険している背中を見せる必要がある。単純にいうと教員も一緒に学ぶことである。空気に触れ、土に触り、虫・魚・鶏に触り、人と話し、珍しいものを食べる。全ての五感を活用し、そこで得られる喜怒哀楽の感情を起伏させることに価値がある。科学技術が発展し、学校教育環境も大きく変わる中、生きる力を持ち得た人になるためには、じっくり、ゆっくり、そして「摩訶不思議なアドベンチャー」をさせることが遠回りかもしれないが、一番の近道だと感じる。それを忘れず、今後の研修も「冒険」していきたいと考える。

教諭 黒宮祥男

〔3〕大韓民国 コース

2024年10月28日（月）～10月31日（木）

（1）研修の目的

国際教養科の生徒はグローバル志向の高い生徒が多いことから、高校2年生で設定している国際理解研修（カナダ、オーストラリア、カンボジア・ベトナム）の他にも、日本と近い国である韓国研修を経験することで、さらなるイノベティブなグローバル人材としての意識を高めることを目的とする。

（2）対象生徒

高校1・2年（国際教養科）：38名

引率教員：2名

（3）活動内容について

	月日（曜）	活動内容
1	10月28日（月）	仁川空港到着 ソウル市内研修 （民族博物館～北村韓屋村・三清洞） 明洞地区散策
2	10月29日（火）	SDGs×B&Sプログラム（現地学生と交流） 通仁市場にてヨンギネチャレンジ（自由昼食） サムスンイノベーションミュージアムにて研修 江南地区（COEX MALL）散策
3	10月30日（水）	ソウル大学キャンパスツアー コース別研修（K-POP体験・韓国料理体験） HiKR Ground視察 参加者全員で夕食（サムギョブサル）
4	10月31日（木）	ソウル市内研修（景福宮など） 仁川空港出発

〔3〕生徒活動報告

「韓国人のおもてなし」

大村咲月（高校2年国際教養科）

私は名古屋国際高等学校として初めて行われた韓国研修に参加した。私は韓国文化がなぜこれほど世界的に注目を集めているのか、その理由を現地で直接体感したいと思い、この研修に参加した。実際、私自身も韓国の現代文化や食文化などに大きな魅力を感じている。最近では、近所のスーパーでK-POPが流れていたり、韓国食品や化粧品が身近に並んでいたり、日常生活の中で韓国文化に触れる機会が増えている。その影響力の大きさは、今年オーストラリアに留学した際にも実感した。オーストラリアでも韓国文化が深く浸透している様子に驚いたことを覚えている。

今回の研修では、韓国の伝統文化や現代文化に直接触れることで、こうした疑問に対する答えを見つけたいと考えた。また、現地の人々との交流を通じて異文化理解を深めることも研修の大きな目標の一つであった。異なる文化や背景を持つ人々と円滑にコミュニケーションを取るスキルは、将来海外で活躍したいという私の目標において必要不可欠だと感じている。

数多くのプログラムを体験した中で、特に印象深かったのがソウル大学キャンパスツアーだ。実は、私が韓国研修への参加を決めた理由の一つがこのプログラムで



ある。韓国で最も難関とされる大学を訪問する機会は人生に一度あるかないかの非常に貴重な体験だと感じる。キャンパス内では大学生だけでなく、現地の高校生も見かけた。日本の高校との制服の違いなどから、韓国の学校生活を垣間見ることができた。さらに、ソウル大学の学生たちとの交流は私にとって大きな学びとなった。案内役の韓国人大学生の皆さんは日本語を勉強していて、日本のアニメや文化に興味を持っている方が多かった。その様子を見て、私が韓国文化に魅了されているように、隣国である韓国と日本は互いの文化に影響を与え合う関係性を築いていることに気づいた。

今回の韓国研修では、さまざまな場面で多くの韓国の方々と交流する機会があった。それはプログラムの中の交流にとどまらず、空港やホテル、さらには街中でも広がっていた。そこで共通して感じたのは、韓国の方々の温かさだ。韓国人のバスガイドさんは非常に親切で丁寧に説明してくださったり、明洞では日本語で親しみやすく対応してくれた店員さんにも出会った。もちろん、これは人それぞれだと思われる。しかし普段インターネットで見聞きする韓国の方々の姿からも、人として親切であるという印象を強く受ける。私はこのような韓国の方々の温かさが、韓国文化が世界中に深く浸透し、多くの人に愛される背景の一つであると考えている。この研修を通じて、韓国文化の魅力だけではなく、現地の人々との交流で文化が広がる背景を理解するヒントを得ることができた。

国際理解研修【韓国】

クルス・キアラ（高校2年国際教養科）

10月28日から10月31日まで、韓国の国際理解研修に参加した。今回の研修では韓国の歴史や文化、そして現代社会の多様な姿を学ぶことを目的に、ソウル市にある10か所を訪れた。研修前の私は、韓国の歴史や文化についてある程度知識はあるものの、それはドラマやネット上の情報を通じた表面的なものだった。実際に現地に行き自分の目で見ることで、より深い理解を得たい、特に、伝統的な場所と現代的な場所を比較することで、韓国の文化的な多様性やその根底にある価値観を掴みたいと思った。

まず、韓国研修初日にいった韓国国立民俗博物館では、韓国の伝統的な生活や風習を詳しく学ぶことができた。展示されていた衣食住に関する資料は昔の韓国の人々の日常生活を想像させるもので、特に儒教文化がどのように人々の生活に影響を与えてきたのかを学び、日本との類似点と相違点を考えるきっかけになった。一方で、明洞通りは現代韓国のエネルギーを象徴する場所で、観光客で賑わうこの場所では、韓国の最新トレンドやグローバルな文化の影響を肌で感じた。伝統料理の

屋台が並ぶ一方で、最新の化粧品やファッションが販売されており伝統と現代が融合している場所だと感じた。

2日目の地元の人々が集まる通仁市場では、韓国の日常的な食文化を体験した。市場特有の活気や人々の温かさに触れ、韓国の家庭的な一面を垣間見ることができた。また「トシラクカフェ」というユニークなシステムを通じて、食文化と地域コミュニティのつながりを学んだ。

三星火災交通博物館では、韓国の自動車産業の発展について学んだ。特に経済成長の一端を担う技術革新がどのように社会に影響を与えているのかを知り、日本の産業との共通点を感じた。

3日目には若者文化の発信地であるハイカーグラウンドに行き、韓国のデザインやアートの最前線に触れることができた。現代の韓国が持つ創造性とグローバルな視点を感じ取ることができた。

清溪川では、自然と都市が共存する取り組みを目の当たりにし、ソウル市の中でこうした自然空間が市民の憩いの場として機能している点に感銘を受けた。

4日目の景福宮は、韓国の歴史と権力の象徴ともいえる壮大な宮殿で、建築や庭園の美しさに感動した。現代のソウルにこうした伝統的な空間が大切に保存されていることから、韓国がいかに自国の歴史を尊重しているかを感じた。

今回の研修で得た経験は私にとって非常に貴重なものだった。韓国の多面的な文化を知ることで、自分自身の視野が大きく広がったと感じた。この経験を今後の学びや将来の活動に活かしていきたいと思った。



(4) 引率教員講評



今回の韓国研修は、国際教養科の生徒たちが現地の文化や社会に直接触れ、グローバルな視野をさらに広げる貴重な機会となった。日本と地理的に近い韓国だが、言語、歴史、文化、産業など多くの点で異なる要素があり、それらを実際に体験することで、国際社会における日本の立ち位置や今後の学びについて深く考える契機となった。

ソウル大学での研修では、韓国の教育環境や学生の学習意欲の高さを目の当たりにし、多くの生徒が刺激を受けていた。現地大学生との交流から、進路を考える上で「進学後の学び方」が重要であることを知り、大学進学を控えた生徒にとっては、進学後の学びについて改めて考えるきっかけになった。

また、韓国料理実習とK-POP体験では、韓国の文化的背景やその発信力を実際に体験した。韓国料理実習では、さまざまな具材を混ぜることから「調和」や「共生」を象徴する料理とされるビビンバを調理・実食し、より広い視野で「食」と「文化」を考えることができた。一方、K-POP体験では、現地のダンススクールにて高度なダンスレッスンを受講した。短時間ではあったが、K-POPアイドル育成プログラムの厳しさを体験し、K-POPが持つ「文化の力」に触れ、韓国エンターテインメントが世界で成功している背景を探ることができた。それぞれのコースにおいて、韓国の強みを実感し、自国の文化を世界に発信する方法について理解を深めることができた。

さらに、サムスンミュージアムの見学では、技術革新やグローバル戦略についての説明を受けることで、韓国の大企業がどのように世界で成功しているのかを学び

ながら、企業の成長と国の経済発展の関係について学んだ。特に、日本企業との違いや共通点を比較することで、国際社会における競争力についての理解を深めることができた。

本研修を通じて、生徒たちは単に「韓国を訪れた」という経験にとどまらず、各分野における国際的な視点を養い、自分たちの今後の学びや進路に生かす意識を高めることができたのではないかと考える。日本の枠を超えて、世界で活躍するためには、こうした実体験を積み重ねていくことが重要であることを引率教員である私自身も痛感した。今後も、今回の研修で得た学びを活かし、さらに広い視野を持って成長していくことを期待している。

教諭 伊藤 恵



↑韓国の食文化について説明を受けている様子

(5) 活動の様子



↑ 現地学生の案内でソウル大学の雰囲気を体感



↑ 現地ダンススクールにてK-POPを体験



↑自分たちで調理した本場のビビンバ



←活気あふれる夜の明洞を散策

【7】国際理解講演会

- (1) 日 時：令和6年6月15日（土）10：00～11：00
- (2) 目 的：WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業の一環として、グローバルリーダーとしての知見を学び、国際的な視野に立って意思決定する力を養う。
- (3) 講演者：松浦 晃一郎氏（外交官、国連職員。公益財団法人日仏会館理事長、一般社団法人アフリカ協会会長、一般財団法人日本ウズベキスタン・シルクロード財団評議員、株式会社パソナグループ監査役、中国人民大学名誉教授、東邦音楽大学パフォーマンス総合芸術文化専攻客員教授。駐フランス共和国特命全権大使、ユネスコ（国際連合教育科学文化機関）第8代事務局長等）
- (4) 講演テーマ：「将来に向けて学生として今やるべきこと、やったほうが良いこと」
- (5) 対象学年：高校生・中学生



(6) インタビュー

講演後に松浦氏には、SDGs未来倶楽部Sus-Teen!が実施しているインタビューに応じていただいた。このインタビューは、過去豊田章男氏（トヨタ自動車株式会社）や宗次徳二氏（株式会社壺番屋）らに実施したものであり、多様な分野で活躍する方に質問をし、まとめているものである。令和7年2月にもホンダロジコム株式会社や山川出版株式会社へのインタビューも予定している。



【8】生徒の活動

令和6年度の本事業の活動として、教科教育や総合的な探究の時間、学校設定科目、特別活動、部活動など多様な活動を積極的に実施した。中でも、学校設定科目であるWWL特論での企業との交流や事業連携校とのイベントの実施、部活動のさまざまな活動などWWLに関係する特徴的な活動を紹介する。

詳細に関しては、次ページ以降に記載されている。

[A] 学校設定科目WWL特論

WWL Skills（高校1年生・選択科目1単位）：探究学習の基本

WWL特論Ⅰ（高校2年生・選択科目2単位）

：企業との交流や事業連携

WWL特論Ⅱ（高校3年生・選択科目2単位）：具体的な事案

[B] 全国高校生フォーラム

令和6年度全国高校生フォーラムへの参加（東京都）

（共催）文部科学省、国立大学法人筑波大学

[C] 連携校との活動（奈良県）

令和5年度高校生国際会議（奈良県）への参加

（主催）奈良県教育委員会、奈良県立国際高等学校、高校生国際会議生徒運営委員会

[D] SDGs未来倶楽部Sus-Teen!実践報告

[E] Business Design Club実践報告

[F] 国際コンテストクラブ実践報告

[G] 海外交流

〔A〕学校設定科目WWL特論

学校設定科目であるWWL特論は世界の社会課題や自身の興味のあるテーマを探求し、グローバルリーダーとして自己の行動につなげることを目的とし、高校課程の3年間で体系的に学習の深化を図っていく科目である。

○3年間で設定している科目

- (a) 高校1年生：WWL Skills（1単位）
- (b) 高校2年生：WWL特論Ⅰ（2単位）
- (c) 高校3年生：WWL特論Ⅱ（2単位）

(a) WWL Skills

- 1. 対象生徒：普通科中高一貫クラス4年生（56名）
- 2. 授業者：4年1組手塚晃司（社会科）、4年2組佐藤良明（社会科）
- 3. 主な授業内容：

①自己プロモーションムービーの作成

生徒が自分自身を自己分析し、それを端的に表現する映像を作成、全員で視聴した。

②世界各地の紛争について調査とポスター発表

専門家を講師として招き、紛争について事前学習を行い、実際に紛争により難民となった方の講話を聴く。またそれらを踏まえ、どのようにしたら紛争が起らないかを議論したり、世界各国で冷戦終結後に勃発した紛争を調査テーマとし、ポスターにまとめ、発表したりした。

③アンケートの作成と学級内での実施

学級内で調査したいことをテーマに、アンケートの作成と実施方法を学び、実際にアンケート結果を分析した。

④昆虫食をテーマとしたケーススタディ

昆虫食をテーマとし、実際にコオロギせんべいなどの試食を通して、SDGsと絡めながら、グループ内でディスカッションを行い、昆虫食への賛否とSDGsへの寄与を議論した。

⑤グループディスカッション・グループワーク

各回テーマとメンバーを変えながら、共同作業を行った。

4. 授業計画：本校HPのシラバスより

syllabus

普通科 中高一貫クラス

教科 Subject	WWL		科目 Course	WWL Skills		学年 Grade	4年	単位数 Credits	1			
担当教員 Teacher	手塚晃司 (TEZUKA Koshi)・佐藤 良明 (SATO Yoshiaki)				開講言語 Language	日本語						
教科書 Textbook					副教材・教員Additional Text /materials							
科目の目標 Course Objectives		主体的・協働的に学習するために必要な知識や技術を身に付け、社会問題に関する理解と解決に向けたアイデアを思考し、それらをアウトプットする。										
観点別評価の基準 (ABC評価)		知識・技能		授業への参加度合い (出席・発言・課題など) (50%) 学期ごとの最終課題 (50%)								
		思考・判断・表現		授業への参加度合い (出席・発言・課題など) (50%) 学期ごとの最終課題 (50%)								
Assessment Standards		主体的に学習に取り組む態度		授業への参加度合い (出席・発言・課題など) (100%)								
Term	Month	Week	学習内容&課題 Study Contents		グローバル人材像 Graduation Policy		社会とつながる学習内容 ConnectEd : Learning to Connect with Society					
1 学期	4	1	○オリエンテーション		科学的思考能力 情報活用能力 コミュニケーション能力 共生協働能力	・信頼できる情報とはどのようなものか？ ・スマートフォン以外で情報を得る方法とその メリットとデメリットは？ ・データを見やすく伝えるために適切な方法と はどのような形が適切か？ ・アンケートによって学級内の疑問を解消し よう (たけのこ派？きのこ派？家庭学習時間 は？)						
		2	・自分を映像で表現しよう									
		3	○世界の国調べ									
		4	・情報検索の手段と方法									
		5	・適切な情報の選択と信頼性									
		6	○グラフや図の作成									
	5	5	・適切な情報の抜き出し方									
		6	・各グラフの作成方法									
		7	○アンケート調査									
		8	・アンケートの方法と種類									
		9	○世界各国の教育課題									
		10	・ポスターの作成									
6	10	・プレゼンテーションの実施										
	11											
	12											
	2 学期	9	13	○グループワーク・グループディスカッ ション		科学的思考能力 情報活用能力 コミュニケーション能力 共生協働能力	・月面で必要なものを宇宙飛行士になって考え てみよう。 ・学級内の課題とその課題を解決するための方 法を考えよう。 ・あなたの人生を20字で表現するとしたら、なん と表す？ ・SDGsで1番最初に解決すべきゴールとその 理由は？					
			14	・NASAゲーム								
			15	・学級内の親睦が深まる企画づくり								
16		○自伝づくり										
17		・自己分析と他己分析										
18		・インタビュー										
10	19	・タイトルや構成の検討										
	20	○小論文作成										
	21	・小論文の書き方										
11	22	・実践問題										
	23											
	24											
	12	25										
		26										
		27										
3 学期	1	27	○レポートの作成		科学的思考能力 情報活用能力 自己管理能力					・どうして昭和区は人の出入りが多いの？ ・昭和区でイベントを実施するとしたら、どん なものが良いか？ ・2030年の日本や世界はどのように変化してい るの？またあなたはその時、どこで何をしてい ますか？		
		28	・レポートの書き方									
		29	・出展などの掲載方法									
	2	30	○未来について考える									
		31	・2030年の未来を予想									
		32	・キャリアの検討									
	3	33	・SDGsの達成状況の検討									
		34										
		35										

作成者： 佐藤 良明

NUCB International Junior & Senior High School

グローバルなテーマや身近なテーマを散りばめながら、探求学習に必要な様々なスキルの習得を目指して、授業を進めてきました。座学ではなく、参加型の授業なので、生徒も楽しそうに発言したり、発表したりしています。

(b) WWL特論 I

1. 対象生徒：普通科中高一貫クラス５年生（５８名）
2. 授業者：松田拓也（保健体育科）
3. 主な授業内容：

五東區

- ・ 區科所 高校生まで無料。
- ・ 公共交通機関 地区バスあり。
- ・ 公園 約10ヶ所あり(原町公園や朝陽緑地、川下公園など)。
→ 自然に親しみ合える、四季を感じることが出来る。
- ・ 石巻市の著し名葉繁実家、安永(江戸時代から続く)、源安が主。
- ・ 鳥山動物園 市内(中学生生徒無料、大人は500円)
- ・ 石巻市立総合児童センター 地域・人口により数あり
- ・ 学童 地区(小学生)や市立の学童校あり、入居可能)



～阿久比町～



阿久比米
れんげ
ちゃん
モチモチ!!

徳川家康
生母が
住んでいた!!



赤羽が舞うが

自然がいっぱい!!

いちのみや
朝活たび



モーニング、いろいろ!

一宮市はモーニングの発祥地。
オーブドトーストなどのから、ちよっと変わったものまで
たくさん食べやあ

主催：一宮市観光委員会
ウェブサイト: www.aikubitown.com
電話番号: 059-458-3500



一宮市公式サイト

その後、グループを形成し、各自が自身の『まちのPRポスター』をプレゼンし、グループでどのまちにターゲットを絞るかを話し合い、班によっては実地研修を含めて、まちの特徴を調べ、まちの魅力をまとめ校内で発表した。

(各班のタイトル)

- ①名古屋市北区ツアー・・・北区に絞り、スタンプラリー形式でプランを作成
- ②Trip to Inuyama・・・観光とSNSを組合わせ写真大会の実施
- ③常滑市 エコツーリズム・・・外国人向けの広報誌、看板の設置
- ④Good Morninng ツーリズム・・・繊維産業とモーニング文化融合の提案
- ⑤名古屋市サイクリング・・・有松絞りなど伝統文化と都市の魅力を味わう
- ⑥豊田市の隠れた魅力・・・三州足助屋敷、羽布ダムをEV車で観光
- ⑦阿久比町文化と自然ツアー・・・山車まつりとホテルの観察会、ブランド米
- ⑧南知多ビーチランド・・・地産地消と観光ツアー、ビーチコーミング
- ⑨Wellcome To MInami Chita・・・空き家、農漁業を生かしたまちおこし

校内発表では、各グループの創意工夫あふれる内容と、質疑応答での白熱した話し合いで充実した時間となる。

授業者の課題としては、各グループの内容を各市や企業に見ていただき意見や評価を生徒にフィードバックできる形が必要であったと考える。



(c) WWL特論Ⅱ

1. 対象生徒：普通科 39名（高校3年生：選択）
2. 授業者：河合航輝（理科）
3. 主な授業内容：

授業計画は下記のとおり

1	商標とは...①	2	商標とは...②
3	過去に発生した地震について	4	災害発生時にどうする...
5	多機能グッズとは...	6	企業ロゴに込められた思い
7	防災標識	8	BOSAIロゴ 構想
9	BOSAIロゴ 構想・清書	10	BOSAIロゴ 清書

商標については、日本弁理士会が公開している知的財産学習教材をもとに授業展開した。

防災ロゴをデザインするにあたり、Amazon、FedExを例に企業ロゴに込められた思いについても触れた。以下は、実際のワークシートを抜粋したものである。

・ Amazon



<会社概要>

2000年11月に開設された（ショッピングサイト）で、米国ワシントン州シアトルを本拠地とするAmazon.com, Inc.の関連会社が運営する（国際的なショッピングサイト）の1つです。

<ロゴマークの由来>

矢印が「a」から「z」に伸びており、Amazonには、「A」から「Z」、つまり（全ての商品が揃っている事）を意味していると同時に「顧客の満足を表す笑顔」が表現されている。

・ FedEx



<会社概要>

FedEx Expressは、（世界最大規模の総合航空貨物輸送会社）として、迅速かつ信頼性の高い輸送サービスを全米ならびに世界（220）以上の国と地域で提供している。日本では、成田国際空港（NRT）と関西国際空港（KIX）でサービス提供を行っている。

<ロゴマークの由来>

よく見ると、「E」と「x」の間に（白い矢印）が描かれている。矢印にはFedExの強みである（物流スピード）、そして（確実に荷物を届けるという正確さ）が込められている。

※矢印の秘密を宣伝効果（口コミ効果）と捉え、企業は上記のロゴ使用を決めたそうである。

まとめとして、防災ユニバーサルデザインが主催するBOSAIデザインコンペ2024に応募し、外部からの評価をいただくこととした。図5は実際に生徒が考案したロゴの一例である。また、表5は図5に記載されたロゴの説明である。

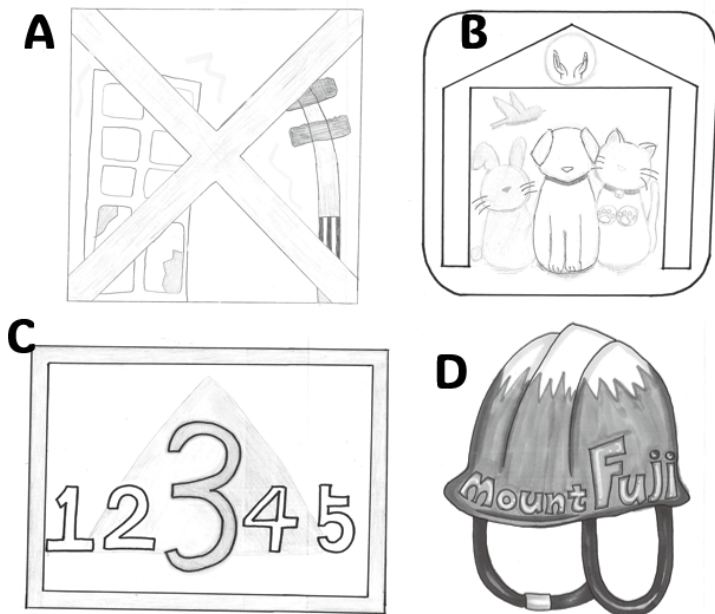


図5：生徒の考案したBOSAIロゴ（抜粋）

表：図5のタイトル名・コンセプト

	タイトル名	コンセプト（・説明）
A	Protecting People from earthquakes	周辺にビル建設が進む状況から、地震発生時には近寄ってはいけないという意味を込めている。
B	アニマルケア	ペットを飼っている人専用の避難所を示す。このロゴが広まることで、イヌ・ネコなどのアレルギーがある人やペットの健康リスクを軽減することができる。
C	危険レベルマーク 危険避難マーク (図はレベル3)	避難誘導標識の横などの場所に設置し、避難すべきレベル（5段階）を示す。 このロゴがあることで、周辺住民・近くを歩く歩行者の両者に危険性を示し避難誘導に繋げる。
D	VERY CAREFUL	いつ噴火するか分からない富士山をモチーフにし、いつ起こるか分からない自然災害に常に備えることを意味する。身を守るという観点からヘルメットにした。 また、黄色は危険、赤色は警戒という意味を示す。

Cの作品については、授業内で紹介した避難誘導標識に絡めていること、Dの作品については、企業ロゴに込められた思いを踏まえ考えられることができている。

授業内で企業ロゴの説明をした際、多くの生徒はFedExのロゴの秘密に驚くだけでなく、納得している様子が見られた。

[B] 全国高校生フォーラム

(1) 概要

12月15日(日)に国立オリンピック記念青少年総合センターにて実施された。参加校は113校で、各学校の生徒が課題研究の成果を英語で発表を行う。当日のプログラムは以下の通りである。

9:00～9:55	受付
10:00～10:10	開会式
10:25～12:50	生徒交流会/ポスターセッション予選
12:50～14:00	昼休み
14:10～15:00	ポスターセッション決勝
15:30～16:00	閉会式

(2) 本校の発表内容についての要約(生徒作成)

「カンボジア貧困地域における医療に関する意識調査と実状」

日本国民は風邪や怪我に関する一定の知識を持っており、学校では保健等の授業でその教育が行われている。そして、多くの日本国民が病院に行くことができる。一方、カンボジア貧困地域の人々は風邪や怪我の対処法についてどのような知識を持ち、病院にどの程度の人が行くことができるかについて疑問に思った。そこで、実際にカンボジア・シェムリアップにて意識調査を実施し、日本とカンボジアの医療に関する比較とその考察をした。

(3) 講評

本校の生徒は4名が選出されたため、発表に至るまでの過程を全員で分担し協力して進めていた。本番ギリギリまで原稿に目を通し、目線や表情などにも気を配る様子が見受けられ、本番も練習通りに堂々と発表できた。生徒たちは質疑応答にも英語と日本語を交えて発言をしており、審査員の方からも生徒の発表内容に対して多くの意見もいただくことができた。また、生徒交流会では他校の生徒と交流を深め、お互いのポスターを見に行き意見交換もしていた。英語での発表ということもあり普段の自分を出しきれなかったと悔しそうではあったが、今回の経験から学べたことは多く、是非今後活かしてほしい。

教諭 後藤彩可

Survey of Attitudes and Actual Conditions of Medical Care in Poor Areas of Cambodia

Research Motive

We can usually purchase over-the-counter medicines at the pharmacy, when we have symptoms such as abdominal pain and sore throat. In addition, Japan has a good system to get to hospitals or clinics, such as roads and legislative systems.

We wondered what the situation was like in the suburbs of Cambodia, which is considered a developing country, and whether there was any difference between suburban and urban.

Content of Villagers' Interview

① What is the health hazard factors in Kampong Phluk?

The health hazard factors most frequently cited by the villagers was the insects that carry infectious diseases, mainly mosquitoes. This year was the epidemic season for dengue fever, which comes in cycles of three or four years. The second factor is the water. The water is not purified and causes many symptoms when drunk. These symptoms appear mainly in children. Another person said that the dust from the road was painful. The fine sand gets into their eyes and throat, causing pneumonia and eye diseases.

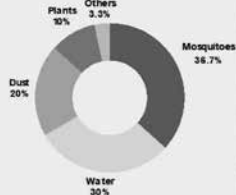
② How to treat diseases and injuries?

The ways of caring diseases and injuries in Kampong Phluk are hospitals, clinics and Chinese medicine. Urgent illnesses and infections should be treated with intravenous fluids and medicines. Minor symptoms such as abdominal pain are treated with Chinese herbal medicine. Until a few years ago, over-the-counter medicines were available at the village store, but they are no longer available due to legal restrictions on the sale of medicines.

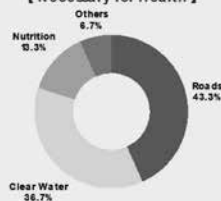
③ What do people in Kampong Phluk want for their health?

What villagers wanted for their health were often well-maintained roads and clean water. The emphasis is not on things that "cure disease," but on things that "prevent from disease". We need to pay for treatment. But if one does not get sick in the first place, there is no need to pay for treatment.

[The Health Hazard Factors]



[Necessary for Health]



Students' Interview

His friend had the flu, so he conducted an inspection in hospital. Having been clean, the hospital had no difference from Japan's. After presenting his insurance card, waiting for an hour, he conducted blood sampling and tests like those conducted in Japan.



Student.M

Having felt sick, she did an inspection and uncovered flu. I took about 30 minutes to wait. The doctor spoke English so well. They treated her very politely.



Student.S

His pickup was broken so he went to the hospital by car. He wrote all the insurance information of interview. After anesthesia, he had his finger pulled by the doctor. There were some bugs of two or three centimeters on the surgery floor. The education of doctors is neat.



Student.R



Conclusion

There was no difference in hospitals and doctors between the urban and suburban areas. However, the suburbs were more vulnerable to disease due to the transportation infrastructure to get there. The distance to hospitals, undeveloped roads, and polluted water were factors that were detrimental to health. The villagers are demanding the creation of a disease-free environment.

Prospect & Next Action

Through this research, we wanted to increase the number of "healthy environments". For this purpose, hospitals and doctors are necessary, but better road maintenance and improved sanitation are also required. However, the creation of an environment requires technical assistance from the outside and cooperation from the villagers. We would like to provide education and support for improving sanitation in the future.

(5) 現地での様子



〔C〕 連携校との活動—奈良県—

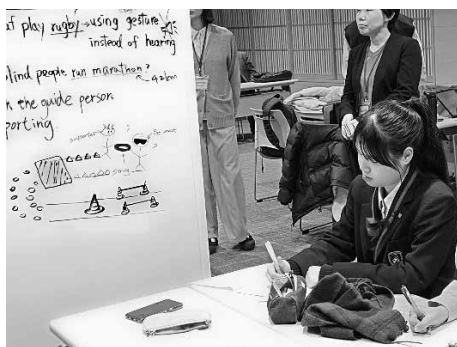
令和6年12月24日～26日に、高校生国際会議 in NARAに参加した。当会議は奈良公園内の奈良春日野国際フォーラム荳で行われ、近畿地方から奈良国際高校・高取国際高校・奈良女子大学附属高校など6校、東海地方から本校、台湾から嘉義高校が参加した。本校からは5名の高校生が参加した。参加生徒はそれぞれの問題意識に基づき「環境」、「社会」、「産業・経済」の3タイプに分かれ、計8グループを形成した。

会議の開催に先立ち、11月21日、12月13日にプレ会議がオンラインで行われた。プレ会議では、同じグループの生徒と自己紹介をしたり、事前課題に取り組んだりした。そのため、12月24日に初めて顔を合わせた際、「はじめまして」ではなく「やっと会えたね」という雰囲気であり、会議初日から会話が弾んでいた。

会議初日は学校紹介ワークと課題意識の共有を行った。まずは各校が学校紹介のプレゼンテーションを行った。その内容はありきたりのものではなく、生徒だから気付くような魅力や学校の面白いところに焦点を当てており、各校とも工夫を凝らした発表だった。

その後、グループ内で、「なぜこの会議に参加したのか」「何が問題だと思っているのか」など各々の問題意識を共有した。会議の最後には有志生徒が今日1日のなかで考えたことを全員の前で発表した。

会議2日目はタイプごとに異なるフィールドワークに参加するところから始まった。「環境」は奈良県宇陀市の森庄銘木産業株式会社に行き、伝統ある銘木の技術と森づくりの持続可能性を目指している方と出会った。「社会」は奈良国際高等学



校体育館に行き、日本聴覚障がい者ラグビーフットボール連盟監事の方と出会い、障がいをどう捉え、どのように向き合っていくべきなのか、体験し考える活動を行った。「産業・経済」は近鉄奈良駅近くの株式会社啓林堂書店に行き、滞在型ブックカフェ「書院SHOIN」をプロデュースした方と出会い、今後の日本や世界の変化に対応したり創り出したりしていく産業のあり方を学んだ。

引率教員も3つのフィールドワーク先に分かれ生徒とともに活動した。私は「環境」と行動を共にした。朝早く近鉄奈良駅に集合し、観光バスで一時間ほどかけ奈良県宇陀市に向かった。まずは森庄銘木産業株式会社（以下、森庄（株））の作業場を訪れ、磨き丸太を作る工程や保管庫を見学した。その後、森庄（株）が管理していない森と、管理している森を訪れ、森の環境がどのように違うのかを見学した。管理している森は、林床までしっかりと日光が入り、一本一本の木が太く生き生きと存在しているさまを見ることができた。その後、廃校となった旧宇太小学校を利用して作られた奈良カエデの郷ひらの会議室（旧教室）にて、森庄（株）の4代目の森本達郎氏と高校生がディスカッションした。日本の林業の現在地を知り、森を管理し、日本の林業を守るのがなぜ必要か、将来のためにどのようにすべきかを考えた。森本氏に積極的に質問し、交流している様子から、実際にフィールドに出て活動したからこそ様々な気づきが生まれるのではないかと考える。

午後からは奈良春日野国際フォーラム薨に戻り、当会議のメインの議題である、「私たちは何を学んだか、何を未来につなげるか。自分たちの地域が抱える問題や



課題に対して何ができるか」についてグループディスカッションを行い、発表準備を進めた。各グループはそれぞれホワイトボードが1つ準備され、そこにアイデアを書き出したり、構造化したりしてまとめ、密に文字が敷き詰められていた。

一方、引率教員同士も交流会を行い、「探究的な学び」について各校の事例を共有したり、悩みを話し合ったりした。引率教員も有意義なイベントとなった。

会議3日目は各グループの発表最終準備を行い、その後発表を行った。各グループ7分という時間設定だったが、思いがあふれ時間を大きく超える発表時間となった。

当会議は、主として英語が用いられた。英語を使用したからこそ台湾の高校生と意見を交流でき、多様なバックグラウンドをもつ高校生のもつ考えが混ざり合い、議論の質が数段階昇華したのではないかと考えている。英語使用を「目的」とするのではなく、「手段」とすることの大切さを実感した。

また、探究という学びを加速させるのは、「経験」だと考える。実際に見て、聞いて、感じたからこそ、社会課題を「自分事」としてとらえ、真の意味で「私たちにできることは何か」を考え始めることができると思う。学生のときに積極的に外部に飛び出し交流し、刺激をもらうことが大切である。私たち教員はその機会を創出することにも注力する必要がある。教員も学校を飛び出し積極的に社会と交わり、人とのつながりを増やしていく必要がある。私たちこそ「探究」し続ける必要性があるのだろう。



教諭 近藤佑思



[D] SDGs未来倶楽部Sus-Teen!の主な実践報告

(a) 八事里山づくりの会との協働活動

日時：各月1回1～2時間

場所：八事興正寺公園

主催：昭和区役所、八事里山づくりの会

内容：名古屋市昭和区役所と昨年度から継続している八事興正寺公園内の森の保全活動である。公園内での活動は、間伐作業のみならず、地域の方との交流をするイベント（4月29日春祭り）も行った。また、名古屋国際中学校・高等学校近くの川名公園での森林保全活動へも活動を広げている。

↓八事興正寺の広報誌に活動が紹介された。

(b) 日進市立北小学校

での学習出前授業

日時：令和6年7月12

日（金）10時50分～

12時25分

場所：日進市立北小学校

主催：日進市立北小学校

内容：小学5年生4クラス、総合的な学習の時間

2時限分において、職員

ロスや地域課題に関する

授業を実施。1組～4組

に、それぞれ2～3名の

本校生徒がアップサイク

ルを理解してもらうため

に、自ら取り組んだ活動

を紹介しながら授業を行

った。休み時間、開発し

たSDGs啓発玩具「Sus-

ガチャ」を児童たちは体

験した。

Info&Community
すえひろ
だまり

「生き物がきく川のゴミ拾いなどにも興味があったのですが、(SDGs)の取り組みをしてみたいという意欲と知り、参加しました」(西生)

「私は小学生の頃から政治家になんたたくて、社会で活躍したいと夢中になって、(SDGs)を学ぶ学校がある」と知り、参加しました(組長)

八事の森に親しみ、未来を育む。

名古屋国際中学校・高等学校 SDGs未来倶楽部Sus-Teen!
(写真右より)西井義雄さん／服部隆志さん／高井順太さん／安部一輝さん(全員高校2年生)
顧問:星吉祥男先生

八事山興正寺内に広がる豊かな里山と森、その保全活動を行う市民団体「八事山づくりの会」(昭和区)と連携し、部活動の場として森づくりに携わる「Sus-Teen!」の皆さん。「SDGs」では、2015年に定めた17の目標に、部活動、現在15名ほどが活動しています。

持続可能な社会を目指し、取り組みの中でも、興正寺の森では木々の整備をはじめ「八事の森の春まつり」の案内やアツや遊具作り、たわわレクリエーション、植樹に運営にも参加。自然とふれあいつつ、地域住民との交流を深めています。

活動のきっかけは、

「生き物がきく川のゴミ拾いなどにも興味があったのですが、(SDGs)の取り組みをしてみたいという意欲と知り、参加しました」(西生)

「私は小学生の頃から政治家になんたたくて、社会で活躍したいと夢中になって、(SDGs)を学ぶ学校がある」と知り、参加しました(組長)






「一学年は活動スタートの高校生もあり、次年度のバトンが渡りそうです」

「僕では知らない人に声かけないけれど、森の中ではみな自然に挨拶をしあう。イベントでは、高幹の方が子ども達まで幅広い世代と交流できるのも新鮮です」(組長)

「人とのコミュニケーションが得意ではなかったですが、得意な出会うの機会が増え、抵抗なく話せるようになったのが嬉しいです」(西生)

「名前の由来がなんにもない自然豊かな里山があることに驚きました。足元にはいろいろな虫を見つけてきたので、木立の中を歩いているだけでも楽しい、リフレッシュできると思います」(西生)

「去年までは見かけなかったアツコが、秋ではぐさぐさに大発生しているのを見たり、気候変動の影響を実感したり、古くからの森が土の中から発芽されたりと、普段なら見えない自然の動きやアツコがありました」(高井)

「僕では知らない人に声かけないけれど、森の中ではみな自然に挨拶をしあう。イベントでは、高幹の方が子ども達まで幅広い世代と交流できるのも新鮮です」(組長)

〈八事の森の春まつり〉
毎年4月29日の昭和の日、「環境と人、森と自然」をテーマに市民・学生・商店街・行政が一丸となって「興正寺」と「興正寺公園」にて開催します。

お問い合わせ
昭和区役所行政部地域力推進課
TEL:052-735-3822



SDGs未来倶楽部Sus-Teen!
(@susteennn)



↑ グループでゲーム形式の授業を実施



↑ 休み時間には、廊下に設置した「Sus-ガチャ」を体験



(c) ホンダロジコム株式会社訪問

日時：令和6年12月6日（金）14時00分～17時00分

場所：ホンダロジコム株式会社、春日井ファーム

内容：愛知県春日井市にあるホンダロジコム株式会社に訪問し、会社の概要やサステナビリティに関する実践活動聞き、質疑応答を行う。また、地域の活性化を目的に考え出された春日井ファームでは、キクラゲの栽培やその活用法聞き、収穫体験もした。2月にはホンダロジコムのラジオ番組への出演も決まり、生徒たちのこれまでの実践活動の紹介や今後の思いを語った。



↑ 企業説明と社内見学を実施



↑ キクラゲの収穫体験



↑ 春日井ファームの説明



↑ 本多社長と記念撮影

(d) SDGs AICHI EXPO出展及び活動報告

日時：令和6年10月10日（木）11日（金）12日（土）10時00分～17時00分

場所：愛知県国際展示場

主催：SDGs AICHI EXPO実行委員会

内容：SDGsの啓発活動及び実践活動発表

(e) 国立環境研究所訪問

日時：令和6年4月14日（日）

場所：国立環境研究所

内容：五箇公一氏研究室を訪問し、生物多様性や外来生物の研究に関する講話と国立環境研究所の見学を実施



↑ 国立環境研究所



↑ 五箇氏の外来生物の説明



↑ 研究施設の見学

(f) なごや環境大学・名古屋市との協働プロジェクト
 日時：令和6年4月～、令和7年2月25日(火)
 場所：名古屋国際中学校・高等学校、愛知工科大学外国語学校

主催：「なごや環境大学」実行委員会

内容：名古屋市内の海外の方々へのゴミ出しのマナー



アップを目指し、その調査と解決策を考えた。愛知工科大学外国語学校への出前授業を行い、海外のごみ事情や名古屋市のマナーについてゲーム形式で学んだ。

(g) その他の活動

○サステナブル・ブランド国際会議（東海ブロック大会）：名城大学



サステナブル・ブランド・ジャパンが主催（株式会社日本旅行共催）する第5回SB Student Ambassador東海大会に出場。企業や他校の生徒とともに社会課題について議論をした。

○「Let's エコアクション in AICHI」出展：名古屋市昭和区鶴舞公園



愛知県環境局が主催する環境配慮行動を学ぶことができる県民参加型の環境イベントに参加。八事の森の間伐でえた木材を利用したワークショップを行った。当日は、愛知県知事や地元アイドルの方もブースに来てくださった。

○名古屋商科大学でのワークショップ：名古屋商科大学日進キャンパス



名古屋商科大学の学園祭「三ヶ峯祭」にて間伐材やアクセサリーのアップサイクル素材を使用したワークショップを開いた。

○SDGs AICHI EXPO 出展：愛知国際展示場



令和5年10月10日から3日間、愛知県の主催によるSDGsイベントがあり、1年間の活動の紹介や新しいSus-ガチャの体験などを行った。また、他の企業や自治体の方ともブースを通じた交流を行った。

○環境でーなごや2024出展：久屋大通公園



名古屋市環境局が運営する「環境首都なごや」をテーマとしたイベントに本年度も本校はブース出展し、日頃の実践活動の紹介等を行った。

○鶴舞公園緑化センターとの交流イベントの企画・実践



鶴舞公園内の緑化センターとの企画で、来園する外国人向けのイベントについて協議をした。鶴舞公園内の施設や魅力を考えながら、企画を進めていた。

[E] Business Design Club実践報告

活動：高校生模擬起業グランプリ

主催：金融知力普及協会

日時：令和6年6月～令和6年12月

概要：高校生が自分達で商品を考案し、実際に製作・販売・会計報告まで行う。本校の生徒5人で構成された模擬企業「フラッシュ英語」は、学生向けのフラッシュ式英単語帳と問題集を開発し、約30万円の売上をあげた。審査会では、販売成績や会計の正確性、商品開発の過程が総合的に評価される。「フラッシュ英語」は金賞を受賞し、生徒たちは長期的な活動の中で、大きく成長することができた。



〈活動報告書〉

今回の活動を通して、私は「人との関わりの大切さ」「段取りの重要性」、そして「生活との両立の難しさ」を学びました。商品制作の過程では、多くの協力者の支えが不可欠でした。友人たちのボランティアやSNSでの拡散、先生やメンターのアドバイスとサポートが大きな力となり、最後までやり遂げることができました。また、計画不足が原因で作業が滞ることもあり、チーム内での事前の話し合いや役割分担の重要性を実感しました。さらに、自社製造による作業の負担増で生活との両立が難しく、体調不良者も出ましたが、この経験を通じて効率的な作業方法やプロセスの明確化の大切さを学びました。この活動を通じて得た知識や経験を、今後のグループディスカッションや実践に活用していきたいと考えています。

山地隆世（高校2年普通科）

（模擬企業役職：社長）

私は、模擬企業で経理部として6ヶ月間活動しました。初めての経理業務に挑戦し、数字の管理やエクセル操作に慣れない状況からのスタートでしたが、仲間と協力しながら、経理の基本やその重要性を学び、自分自身の成長を実感しました。経理部の主な役割は収支記録や財務管理で、小さなミスが全体に影響を及ぼす責任を

痛感しました。各部署との連携も不可欠で、プロモーションの成果や仕入れコストが財務状況に直結する中、コミュニケーションの大切さを学びました。活動を通じて責任感や問題解決能力が磨かれ、失敗を乗り越える達成感を味わいました。この経験は、社会に出る準備としての貴重な学びとなり、今後の挑戦に活かしていきたいと思います。支えてくれた全ての人々に感謝します。

渥美 夏（高校2年普通科）
（役職：経理部）

本活動を通じて、約半年間充実した日々を過ごしました。友人に誘われたのがきっかけでしたが、活動が進むにつれて忙しさが増し、仲間と支え合いながら取り組む大切さを学びました。製品の自社製造による作業の大変さや予想を超える売上、クレーム対応に苦労しましたが、お客様から感謝の言葉をいただけたことは大きな成長につながりました。仕入れ部として資材管理や宣伝活動にも携わり、経営や広報の楽しさを実感できました。仲間と役割分担し、得意分野を活かして協力できたことも貴重な経験です。支えてくれたメンターや関係者に感謝し、将来は社会貢献や起業を通じて今回の学びを活かしたいと考えています。

坂田俊空（高校2年普通科）
（役職：仕入部）

模擬起業グランプリに参加した6ヶ月間は、挑戦と学びの連続でした。社長の熱意に動かされ広報を担当した私は、SNS発信やプレスリリースに注力し、新聞取材が売上に大きく貢献しました。対面販売や公文教室でのプレゼンを通じ、商品の価値を共有し、200セット近くを販売できたことは大きな喜びです。一方で、手作業の製造は負担が大きく、多忙な日々を過ごしましたが、チームの協力や物づくりの苦労を実感しました。最後まで諦めず取り組むことの重要性を学び、この経験を未来の挑戦に活かしていきたいです。

ブラッシュ和馬（高校2年普通科）
（役職：広報・マーケティング）

本活動を通じて、貴重な経験と多くの学びを得ました。広報担当として活動する中、時間の大切さを実感し、6ヶ月間を全力で駆け抜けました。一次審査通過時の感動や販売開始前の不安を乗り越え、最終的に190セットを販売、売上30万円を達成しました。製造は全て手作業で、カード制作の過酷さをチーム全員やボランティアの協力で乗り越えることができました。この経験を通じて、商品の裏にある製作者の努力や想いを知り、物への感謝の心が芽生えました。模擬企業で得た教訓

と成長は、これからの人生に活かせる大切な財産です。この特別な体験に感謝しています。

櫻井健太郎（高校2年普通科）
（役職：広報・マーケティング）



本活動を通じて、生徒達は大きく2つの面で成長したと感じます。1つ目は、自分達が生み出した商品やサービスに対価を得る経験が、価値観に大きな影響を与えたことです。単なるアルバイトとは異なり、社会のニーズに応えることで循環する経済を実感し、アントレプレナーシップの本質を体験できました。2つ目は、英語を学ぶ立場から教える立場に変わり、自分の経験や学びを他人のために活用する機会を得たことです。異なる背景を持つメンバーが、同じ目的に向かって協力する中で、英語がどれほど重要なツールであるかを再認識しました。フラッシュ英語が、今後英語を学ぶ子ども達に役立てたなら、生徒達にとって何よりの財産となるでしょう。

Business Design Club顧問・フラッシュ英語監査人 神山清光

[F] 国際コンテストクラブ

国際コンテスト部が立ち上がってから7年目になる。その数学部門では、毎年横浜サイエンスフロンティア高等学校（SFH）にて開催される「マスフォーラム（数学生徒研究交流会）」に参加しており、そこでの発表に向けて研究活動をしている。

このマスフォーラムというのは、数学研究を通して興味・関心をさらに高め次世代の数学研究者のネットワークを広げ将来の数学研究に寄与することを目的とし、多くの学校から数学に興味の深い生徒達が参加している。他の参加校は、横浜SFH（会場校）、海城、東京学芸大附属、都立小石川、市川などが常連で、平成30年度に本校が初めて参加した時を皮切りに最近では関東近辺に限らず、東北、大阪、九州など遠方からの参加校も急激に増えてきている。

タイムスケジュールとしては、ステージ上でのホール発表（全体発表）とブースに分かれてのポスター発表があり、著名な先生による基調講演もある。参加生徒による発表内容は、整数論的なものや幾何学的なものも多いが、社会に繋がる様々な題材もあり、大変興味深い発想や発見ばかりである。

本校でも以下のように様々なテーマでの参加歴がある。平成30年度に卒業生の太田彩香（当時高2）が「相性度」というテーマでホール発表をしており、その他ポスター発表は、小出彰信（卒業生）、賈俊賢（卒業生）、松村桜子（卒業生）、増田有咲（現高3）、山崎夏実（現高3）、三河太郎（現高2）などによる。

平成30年度 「相性度」

令和元年度 「正三角形の方程式」

「底 a が $0 < a < 1$ の場合の指数曲線と対数曲線の共有点について」

令和2年度 「一見正弦曲線に見える2次曲線」

令和3年度 「故障したデジタルでの計算」

令和4年度 「最も普通な三角形」

令和5年度 「解法式から問題を創る」、「多項式の乗算の高速化」、「 $\tan 90^\circ$ は存在する?～球面上の三角形で～」、「安打になる確率が最も高い打球の落下地点」、「正接定理」、「故障したデジタルでの計算」（続編）、「小数進法や無理数進法」

さて、今年度は令和7年1月25日（土）に開催され、10件のホール発表と111件のポスター発表があり、そのうち本校の生徒からはホール発表1件（5年2組 服部優奈）とポスター発表5件である。また、お二人の講師の先生が招かれ、午前中に統計物理学、ネットワークやモデリングなどについて大変興味深い基調講演があった。

本校の生徒による発表のテーマとアブストラクトは以下の通りである。

○「1次関数の合成関数列」

5年2組 服部優奈：ホール発表

数学Bの授業で数列を学んだことから、数字ではなく「式」や「関数」を列にするとどのような性質になるのかに興味を持ったことが研究動機。“ x を決めると y が決まる”のが関数であるが、そこから“1次関数を決めると1次関数が決まる”という発想をし、さらに次々に決まっていく合成関数列（数列の関数版?）というものを考案した。そしてその合成関数列に対応する直線の全てが、ある定点を通ることを発見した。

○「コラッツ予想に関する中学生の妄言」

3年1組 渡部理人

“小学生でも理解できる”と称されるにも関わらず、数々の著名な数学者が取り組んでもなお80年間未解決であり、また小学生でも理解できる“コラッツ予想”。本研究ではただの中学生が位取り記数法や一般化などを用いた中学生らしい視点から、問題解決の糸口を探し、その難解さと魅力を探究した。

○「放物線の方程式から派生する直線」

4年1組 石川すみれ、4年2組 加藤瑞稀

放物線の方程式 $y = ax^2 + bx + c$ に対して ax^2 の部分を取り除いた $y = bx + c$ はどんな直線になるのかを調べた。その結果、 $y = ax^2 + bx + c$ を平方完成（という面倒な作業）をしなくても瞬時に放物線のイメージを捉える方法を得た。

○「最も経済的な漏斗」

2年B組 緒方秀成

容量が一定の直円錐形の漏斗を作るのに材料になる扇形の母線の長さと漏斗の口の半径の比をどのように定めたら最も経済的（扇形の面積最小）かを微分法を用いて調べた。

○「2次方程式が実数解を持つ確率」

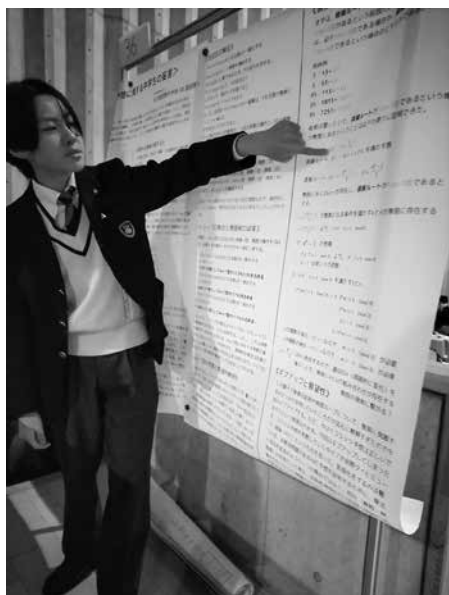
2年B組 野寄恋歌、田谷千佳

“2次方程式を任意に作ったとき実数解を持つ確率”というものを、条件や制限を明確にしつつ“ビュッフォンの針”の問題と同様に領域面積を用いて考えた。

○「正弦定理の3次元版」

2年B組 近藤絵恋、瀬瀬椎菜、ファリアモルシェド

昨年度三河君が“正弦定理・余弦定理があるなら正接定理というものも考え出したい”という思いで発表したが、そこから派生して、正弦定理の3次元版というものを考え、一つの興味深い関係を発見した。



ホール発表は今回10件もあり、服部優奈は4番手。服部らしいメリハリのある爽快なプレゼンであった。閉会式では講師の先生からの講評があり、服部の発表については、社会に繋がる可能性や高次関数への発展研究の期待などの激励あり、また基調講演での話題にあったネットワークの視点から「種から種を作り出していくことを連想する」というお言葉が印象的であった。

また、渡部の発表した「コラッツ予想」とは、「偶数ならば2で割り奇数ならば3倍して1を足すという操作を繰り返すとどんな自然数もいつかは1に帰着する(ことがまだ証明されていない)」というもの。正しいか否かが解決されないままになっているという意味で有名な話題も多く、このようなテーマも興味を持たれます。今後も名古屋国際が次世代の数学研究に寄与する貢献を継続し、益々発展させることを期待する。

数学科 伊藤亘央

〔G〕海外交流

国際交流の取り組み①【フランス ランス市代表団来校】

日時：令和6年2月15日（木） 16：00～17：30

実施場所：名古屋国際中学校・高等学校

（１）取り組み

昨年10月、本校国際教養科の生徒が短期留学プログラムの一環としてランス市役所を訪問した。その感謝の意を込めて、ランス市公式代表団が本校を表敬訪問する運びとなった。名古屋市とランス市は姉妹都市であり、これまでに多くの文化的国際交流が行われてきた。本訪問は、両市の友好関係を一層深化させることを目的とした。

（２）来名者リスト

アルノー・ロビネ氏（ランス市長）、ヴェロニク・マルシェ氏（ランス副市長）、ディミトリ・ウガン氏（ランス副市長）、マチュー・ラガッセ氏（市長・郡長補佐官）、エリサ・ソンバート氏（国際交流担当）、コレット・パデ氏（ランス国際交流協会会長）、小林 美那子氏（通訳）、ヴァンサン・マンサンカル（ランス市商店街復興会長）、フィリップ・ヴェルジェ（ランス市観光局長）、ヴァレリー・ジサット（ランスイベント社常務）

（３）タイムスケジュール

16：00 来校

16：00～16：15 アトリウムで開会式

1. 吹奏楽部がフランス国歌を演奏
2. 校長挨拶
3. 代表生徒による挨拶

16：15～ 校内案内

16：30～ 108教室で交流会

（４）活動の様子



国際交流の取り組み②【Surasak Montree School 来校】

(1) 取り組み

Surasak Montree Schoolはタイのバンコクにある公立学校である。令和元年4月に訪問があって以来、Covid-19によって交流が一時停止していた。令和6年4月に再開し、交流することになった。当日は生徒24名、引率教職員10名が参加した。

(2) タイムスケジュール

- 10:00 来校
- 10:15 スクールツアー
- 11:15 パフォーマンス交流
- 11:55 昼食
- 12:30 学校出発

(3) 活動の様子



【9】WWL高校生国際会議

本校の文部科学省WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業の一環として、本校の構想名「ニューノーマル時代の地域創生を加速する高校生グレーター・ナゴヤ・プロジェクト」に基づき、多様な学びとヒトとの出会いの場・新しいアイデアと実践の共有の場・先進的な教育実践の情報発信の場として、WWL高校生国際会議を開催した。昨年度までの反省と知見を活かし、仮想空間（メタバース）を事前学習で活用し、当日は対面とオンラインを併用してのハイブリッド型で実施した。また、昨年度との大きな違いは、令和6年10月に愛知県名古屋市の鶴舞公園にオープンしたばかりのSTATION Aiのイベントホールをお借りし、本会議に相応しい新しい学びの空間で会議を行った。以下がその詳細である。

〔1〕開催要項

（1）趣旨

地域課題解決へ向けた若者のアイデアや思考の共有を目指し、事業拠点校・事業連携校などの生徒が自らの地域の社会課題解決に向けた実践を語り合う。その結果、地域差による課題のあり方や国内外の多様な考え方を知るきっかけとなる。

（2）主催

学校法人栗本学園 名古屋国際中学校・高等学校

（3）期日

令和6年12月23日（月）：（対面）STATION Aiイベントホール

（4）開催方法・場所

ハイブリッド型（対面およびオンラインを併用して実施）

対面：STATION Aiイベントホール

オンライン：オンライン会議システムZoom/NTT XR Space WEB（DOOR）

仮想空間：NTT XR Space WEB（DOOR）仮想空間

（5）日程

【事前学習】未来と繋がる時間～未来人へインタビュー～（任意）

12月16日～18日に、メタバース上で170年後のカンボジアの未来人と交流を行うという設定です。

【WWL高校生国際会議】

12:00～	受付（ログイン）
13:00～13:05	開会
13:05～13:35	基調講演
13:35～13:50	アイスブレイク—社会人と高校生との交流—
13:50～14:00	休憩
14:00～15:00	インタビューセッション
15:00～16:00	代表者発表 (ファシリテーター) 名古屋商科大学 教授 伊藤 博 氏
16:00～16:10	休憩
16:10～16:20	まとめ・提言
16:20～16:30	閉会

(6) 参加手続

下記URLに接続し、リンク先の「参加申し込み」(Googleフォーム)により、代表の先生が、お申し込みをお願いいたします。

申し込み期限：令和6年12月2日（月）

申込先はこちら <https://forms.gle/wtVpPp5fp3XeRqy77>

(7) その他

- ・高等学校等に在籍する生徒および教員を参加（視聴）申込対象とします。
 - ・許可なく録画および撮影することを禁止します。
 - ・内容は一部変更する場合があります。
 - ・オンラインでの参加のURLは参加確定後にご連絡いたします。
-

NUCB International Junior & Senior High School



高校生国際会議 2024

名古屋国際中学校・高等学校は『高校生国際会議』を開催し、高校生が企業や国際機関の方々の助言を受けながら、グローバルな視点での課題解決や異文化理解を深める場を提供します。

会議には全国のWWLカリキュラム開発連携校やその他の国際教育推進校の学生が参加し、共通のテーマに基づいて討論や発表を行います。

文科科学者は、Society5.0におけるリーディング・プロジェクトとして、グローバル人材を育成するため、高校生に高度な学びを提供する拠点校を全国に配置し、WWL(ワールド・ワイド・ラーニング)コンソーシアム創設を目指しています。

名古屋国際中学校・高等学校は2022年にWWLカリキュラム開発拠点校に選ばれ、国等教育機関と連携し、『Society5.0における未来の中等教育機関』を探究・実践・実践しています。






2024. **12.23** MON

テーマ New Borderless Education

時間 13:00-16:30 **定員** 100名
12:30 開場 (申込先着)

場所

**STATION Ai
イベントスペース**

名古屋市昭和区鶴舞
1丁目2番32号
(JR鶴舞駅から徒歩6分)



観覧を
ご希望の
方は

右記QRコードから
お申込みください



SCHEDULE

13:00	開会
13:05	基調講演 『STATION Ai を通して考える人生の可能性』 片岡 裕貴 氏 STATION Ai株式会社インフォベーション事業推進部長 スタートアップ支援推進課 ことばコミュニケーションリーダー
13:35	アイスブレイク ～社会人と高校生との交流～
14:00	ケーススタディ発表・グループディスカッション 『カンボジア・ボランティアツアー』 伊藤 博 氏 名古屋商科大学ビジネススクール教授
15:00	各グループによる発表・質疑応答
15:40	講評
16:10	各校代表生徒による提言
16:20	閉会

当日は上記のスケジュールに沿って、WWL拠点校および事業連携校の生徒・教職員が活動を行います。観覧予約いただいた皆様は、会場でオブザーバーとしてご参加いただけます。

名古屋商科大学
名古屋国際 中学校 高等学校



CIS MEMBER

お問い合わせはこちらから >>

(WWLカリキュラム開発拠点校)



〔3〕 内容

①コンセプト

下記の提言の通り、昨年度までのWWL高校生国際会議提言「New Borderless Education」の体現として、学校間の境、高校・大学の境、教育機関と社会の境、世代・職の境、学び方の境がない学びを本会議で体現する。

↓昨年度のWWL高校生国際会議提言

～New Borderless Education～”

（1）Tangible initiatives

ICT allows students to learn anytime, anywhere, in any situation, and under any circumstance, regardless of location, time, opportunity, and various disparities.

（2）Intangible initiatives

Learning should not be too confined to textbooks or schools.

Learning a variety of things from a variety of people expands a student's potential.

By figuring out what we like to do, we can become an expert in that field. Instead of the state or school deciding how students learn and what kind of students they will be, the new education is one in which each student decides what kind of learning they want to do and who they want to be, and they can make that happen for themselves.

提言：『New Borderless Education』

（1）ハード面

ICT技術を駆使することで、場所や時間、機会、様々な格差に関係なく、いつでも、どこでも、どんな状況でも、どんな境遇でも、学ぶことができます。

（2）ソフト面

学びの内容も、教科書や学校ということにとらわれすぎず、様々な人から様々なことを学ぶことで、生徒の可能性が広がります。好きなことを突き詰めることでその分野の専門家になることもできます。国や学校がこういう学びをしてほしい、こういう生徒になってほしいと決めるのではなく、生徒一人一人がこういう学びをしたい、こういう人になりたいと願い、それが実現できる教育です。

②事前課題

今回は事前課題として、名古屋商科大学教授の伊藤博先生に大学での学びに触れるという意味合いも込めて、カンボジアのボランティアツアーに関するケーススタディを用意していただいた。会議の参加者には事前に「カンボジア孤児院ボランティアツアー」のケースを提示し、「あなたが鈴木 の立場であったなら、このツアーに参加すべきだと思いますか。その理由とともに説明してください。」という問いを投げ、個人単位でケースの回答を準備してもらった。



NUCB | Publishing

24-0001
November 1, 2024

HIROSHI ITO

カンボジア孤児院ボランティアツアー

- 10 大学生の鈴木は、高校の時から海外でのボランティア活動に関心を抱いていたが、なかなか実行に移す行動が起らなかった。しかし、目的も定まらず学生生活を送る中で「自分を養育する機会が少なすぎたのではないか」と自問自答するうちに、ついに行動に起す決心をした。夏休みを利用してことしための、アルバイトなど多岐にわたる形で利用できる時間は一週間に限られていた。そのため、彼は旅行会社が提供する「カンボジア孤児院ボランティアツアー」に申し込むことにした。このツアーは五泊六日の日程であり、彼のスケジュールにマッチしていたからだ。このツアーでは、初日は最終日が移動日となり、滞在中の四日目はアンコールトムやアンコールワットの世界遺産を観光し、五日目には自由時間が設けられている。そして、二日目と三日日は孤児院でのボランティア活動に費やされる予定であった。

[illegible]

カンボジア・ボランティア・ツアー
二日目と三日目の日程(図2)

- 20 出発が迫るにつれて、「孤児院の子供たちとはどのようにコミュニケーションを取れば良いのだろうか」、といった疑問と共に、鈴木は期待と不安に胸を高鳴らせていた。だが「国際ボランティア論」を教える薬師寺先生が授業で語った内容は、鈴木が予想していたものとは大きく異なっていた。

このケースは名古屋商科大学の伊藤博がクラス内での討論を行うことを目的として作成したものである。記載された内容、名簿数値等は入手された資料に基づいているが、必要に応じて改変もしくは偽装されており、当該企業/組織の経営の巧拙を問うものではない。© 2024 NUCB Publishing

③事前学習—未来と繋がる時間～未来人へインタビュー～

目的：(i) 未来の視点を知ることにより、ケースの回答が未来想定されているか知る。

(ii) 「フューチャーデザイン」の考えを学ぶ。

方法：メタバース空間に入り、170年後のカンボジアの未来人に対して、3つの設定の異なる世界の状況を聞きながら、ケースに関する質問を行い、ケースの再考を行う。

期間：12月16日（月）～18日（水）の3日間でいずれも16時～17時の1時間で開催

内容：下記の通り、3つのパラレルワールド（発展・停滞・衰退）を想定した。また、どの回でも立場の異なる3人の未来人（労働者・政治家・子ども）を用意し、それぞれの立場から未来のカンボジアの様子や参加者の質問に回答した。

○3つのパラレルワールド

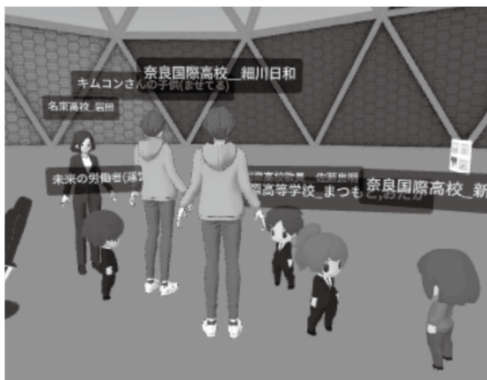
(i) 12月16日は今より発展した未来に生きる未来人と交流

(ii) 12月17日は今とあまり変わらない停滞した未来に生きる未来人と交流

(iii) 12月18日は今より衰退した未来に生きる未来人と交流



←[子ども役]の生徒が操作中



↑アバターに近づくと声が大きくなります。聞きたい人の近くに集まります。

↑本校生徒が未来のカンボジアの子どもに扮し、参加者の質問に答えている様子。

↑参加者が質問をしたい人に近付きケースに関する質問をした他、参加者同士の関係性構築にも一役買った。

④基調講演

講演者：STATION Ai株式会社インキュベーション事業推進部

スタートアップ支援課 課長コミュニティマネージャー

片岡裕貴 氏

演題：STATION Aiを通して考える人生の可能性

内容：STATION Aiの概要や今後の展望についての説明、片岡氏がSTATION Aiで働くことになった経緯などをお話いただいた。特に片岡さんの人生経験をもとに、高校生に「起業」という選択肢があるということとチャレンジの重要性を熱く語ってくださった。



⑤アイスブレイクー社会人と高校生との交流ー

生徒会が企画し、参加高校生と社会人アドバイザーが交流を行う機会を設けた。参加者には受付でランダムに10種類のシールが貼られたプリントを配布し、そのプリントに自身の名前のあいうえお作文を書いてもらった。シールごとに10グループに分かれ、プリントをもとに自己紹介を行い、参加者同士の壁を取り払った。

⑥インタビューセッションと代表者発表

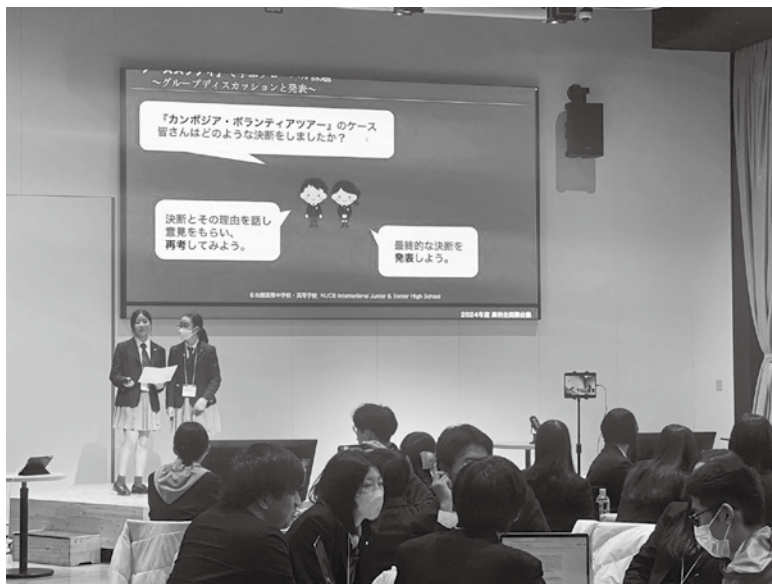
グループごとに社会人アドバイザーと事前課題のケース（カンボジア孤児院ボランティアツアー）に関する議論を行い、様々な角度からアドバイスをいただいた。社会人の方は20分で別のグループに移動していただいたので、高校生は複数の社会人の意見を聞くことができた。後述の通り、社会人アドバイザーの方々も異なる背景を持った方々なので、議論に厚みと深みが出ました。インタビューセッションの最後には、グループごとに孤児院ツアーに参加すべきか、参加すべきではないかの意思表示を行い、名古屋商科大学の伊藤氏にファシリテーターをお願いし、なぜそう考えるのかなどの質疑応答を行った。ツアーに行くべきというグループから挙がった意見としては、「現地に行ったほうが問題はよく見える」、「帰国後に目標を立てた方が良い」などが、参加すべきではないというグループからは「一時

的な支援は良くない」、「子どもたちにトラウマを与えてしまうかもしれない」などの意見が出た。最後には、グループごとに2分程度で議論した内容と結論を英語と日本で発表した。



⑦まとめ・提言

各グループの発表を聞いたうえで、各校の代表者が集まり、本会議に関する提言をまとめ、発表した。今回の提言はWWLにちなみWin² Learning(Win Win Learning)となった。学ぶもの、教えるもの、学生、企業、行政など関わる人達が前向きにお互いにメリットがある学習をしていこうという意味合いが込められている。



Win² Learning
(WWL)

〔4〕参加者

○参加校（対面5校、オンライン1校、合計70名）

名古屋国際高等学校、名古屋市立名東高等学校、奈良県立国際高等学校
暁高等学校、浜松開誠館高等学校、東京都立三田高等学校（オンライン）

○社会人アドバイザー（敬称略）

- ・伊藤雅康氏（studio veco・一般社団法人教育AI活用協会）
- ・勅使河原由佳子氏（東海テレビ放送株式会社）
- ・内藤壽久氏（株式会社デンソー）
- ・水野敬亮氏
（一般社団法人未来創造ナゴヤイノベーションズガレッジ株式会社アイシン）
- ・荒井滋規氏（国連地域開発センター）
- ・多賀史文氏（APEX Cambodia Travel Service Co., Ltd.）
- ・田口朋子氏（味の素AGF株式会社）
- ・あっぱれコイズミ氏（吉本興業株式会社）

○講評・総括氏（敬称略）

- ・伊藤 博氏（名古屋商科大学教授）

○観覧者

本校保護者・関係者、一般参加者などが計21名



〔5〕総括

私が深くかかわったフューチャーデザイン（以下、FD）を活用した事前学習のデザインに焦点を当て、高校生国際会議を総括する。

FDとは、京都先端科学大学特任教授の西條辰義氏らが提唱し、その後高知工科大学に「フューチャーデザイン研究所」が設立されたり、令和5年には財務省が複数の財政制度等審議会の議論を経てFDの手法を用いたワークショップを開催するまでに至ったりしている、注目されはじめている考え方である。FDの概要を簡単に述べると、何か行動を起こす際、この行動が未来にどんな影響を与え得るのか、未来を想像し、未来視点から現在の行動を見つめなおす手法である。この手法を使うことにより、持続可能で、より人類の発展に役立つ行動は何か意識することができるのではないかと考えられている。昨今の世界事情を見るに、「今さえよければ」「自分（の国）さえよければ」という考えに覆われ始めており、私たちの行動はより長期的な展望をもって行動を選択する必要に迫られていると考えている。

今回の高校生国際会議ではカンボジアボランティアツアーへの参加の是非を問うケース課題が事前に提示された。思考をより深めるためにFDを活用した事前学習を取り入れることにした。ボランティアツアーの参加により、未来はどう変化していくのか、そもそも変化しないのか、考えることをねらいとした。黒宮教諭から「何もしなければ伝承が残るのは約170年後まで」という話を聞いたため、今回は170年後のカンボジアを舞台とすることにした。また、未来には様々な分岐があり、その影響によって未来が大きく変化することから、現在より「発展」・「停滞」・「衰退」した3つのパラレルワールドを構想することにした。私は未来のカンボジアの社会を想像するため、現在のカンボジア社会の様態、また世界全体の未来予想をインターネット・論文等を読み、なるべく根拠に基づいた未来予想を展開することを心がけた¹。また参加者は「労働者」・「政治家」・「子ども」の3つの立場の人物を用意することで、社会の中でも立場によってさまざまな考えがあることを参加者に理解してもらうことを目指した。これらは教員、生徒が演じた。

事前学習は、12月16日～18日の日程で行った。会場はメタバース²を活用した。16日は発展の未来、17日は停滞の未来、18日は衰退の未来に生きる3人の立場の人たちと交流する機会を設けた。参加者はこの日程のすべて、もしくは一部に参加し、自身の決断が未来にどう影響するのか、そのヒントを得たと考えている。

またこのメタバースでは、参加者同士の交流も図られた。これは望外の結果だった。メタバース空間では参加者はアバターで参加し、顔を知ることはできない。だからこそ、話し合いが盛んになったり、「会議当日に自分のことを探してみてよ」といったかわわりが生まれたりしていた。

会議当日は、各グループに社会人アドバイザーが入り、活発な議論が行われた。この議論にどれほどFDの事前学習が活きたのか判断することができなかったが、参加者同士の雰囲気はよりやわらかなものになったのではないと思う。また、それぞれがケースについて深く考えたからこそ、議論が活発となったのではないだろうか。もちろんFDの事前学習だけではなく、個性豊かなアドバイザーの方のおかげでもある。総じて、一人だけの考えではなく、様々な視点から刺激をもらい考えることで思考が深まっていったのではないかと考察している。

この高校生国際会議全体を通して、「様々な人とかわる」ということの大切さをより実感したのではないかと考える。これこそがWWLで重要な要素の一つだと再認識した。高校生国際会議の最後に、参加者の提言をまとめた。それは、「Win² Learning (WWL)」である。「World Wide Learning」を再定義し、多くの人とかわり、皆がWin Winになる世界を創造することの大切さを提言としてまとめた。

最後に、本会議のアンケートから一部を紹介する。

(1)「ボランティアというのは論理的だけでなく、相手の立場も考えなければならないと思いました。(略) ボランティアも全てがいいものではなく、中には悪い大人がいて、お金をとられてしまうという事を初めて知りました。ボランティアは良いイメージがついていましたが、他の視点から考えると悪い人がやってる場合もあるので、…ボランティアを見極めなければならないと知りました。皆さんとカンボジア現地でボランティアをするか、しないかを話し合った時に、現地に行ってみる事があったりするから、カンボジアに行った方が良いという意見もあれば、逆に孤児院の子達を思って、カンボジアに行かずに、日本からお金を寄付するという間接的に支援をするといった、色んな意見がある事ができました。話し合いの時、皆さん自分の意見をしっかり持ち、それを言語化して、相手に伝えていて、話し合いのメリットが感じられました。中学校でも話し合いの場がありますが、高校生国際会議のように、大人も一緒に話し合うという機会がないので、新たな視点を知る事ができました。」

(2)「アイスブレイク、ケーススタディ、グループディスカッションの様子をみていて、社会人の方と意見の交流をする場所があるというのは、とてもいい刺激と学びがあるなと感じました。生徒の皆さんが、個々それぞれにしっかりとした意見を持ってきて、良いところを認め他の意見も受け入れディスカッションしてみえる姿に、頼もしさを感じました。(略)」

(1)(2)の意見からも、様々な視点から物事を見つめ考えることの必要性を実感した。

私たち教員は、こうした場や機会を創出し、その効果を最大化するべく準備、運営する必要性を実感した。FDといった新たなチャレンジを行い、生徒の学びや体

験の質を最大にすることが求められると考えている。チャレンジすることをやめたとたん、私たち学校は前例踏襲、過去の成功体験に縋りつくかもしれない。急激に変動する世界の中において、私たち教職員もその変化を受け入れ、ただ大切な根幹だけは変えない「不易流行」の精神を持ち続けていきたい。

国際教育推進部
教諭 近藤佑思

[参考]

¹ 未来想定のはじめはこちらの拙稿の資料を参考にさせていただきたい。この資料は政治家などの役割を演じた教員・生徒に共有されたものである。

[3] 未来の想定未来

(想定 A) 中国経済への依存による変化。今後、中国経済は衰退することはほぼ確実。国とどのような関係を築くのが大切な要素になるか。

(想定 B) 地球温暖化が進行し、いわゆる「気候極端化」、沿岸部の水没による住める地域の減少、熱帯の拡大。

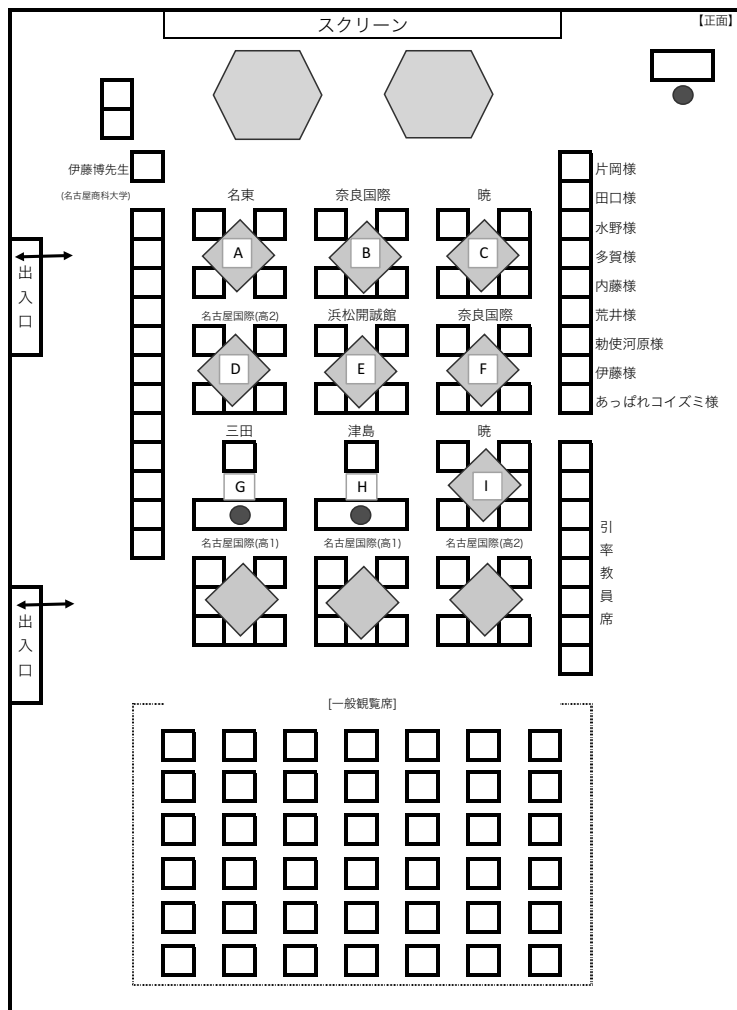
(想定 C) ゆるやかに結束した都市国家群が形成される。＝中央政府が全土を支配するというより、住めるエリアの縮小とスマートシティ化により、内陸部に小さな都市国家の成立とそれらの連帯で国ができるイメージ。国防は中央政府の役割でそれ以外は各都市に権力がある。小さな政府のようなイメージ。中小都市が重要インフラを整備しようすると莫大な費用が掛かり維持不能。集約しなければならなくなり、人口の

移動が発生、大都市が拡張していく。※京都大学の都市・空間経済学の森知也の日本の都市の未来予測のデータを援用

² このメタバース「DOOR」は、NTTコノキューが提供する仮想空間プラットフォームを利用している。本校は、学校の校舎（アトリウム）と会議室を仮想空間上に構築している。今回は会議室を利用した。

[6] 会場図

【1F イベントホール 会場図】



※お手洗いは、出入口を出て正面にございます。

※緊急の場合は、館内放送の指示に従い、出入口からの避難になります。

【10】ConnectEd 2025

【1】要項

【ConnectEd2025】会場:多目的教室

12:00 開会

校長挨拶[名古屋国際中学校・高等学校 校長 小林 格]

12:00 基調講演

講演者:studio veco (代表) 一般社団法人教育AI活用協会(副代表 伊藤雅康 氏)

テーマ:「生成AIと新教育観」

12:35 休憩

12:50 名古屋国際中学校・高等学校におけるWWLコンソーシアム構築支援事業の概要説明

〔国際教育推進部主任 黒宮祥男〕

13:00 活動報告 ※報告時間:各10グループ(発表者報告8分+報告者の交代2分)

各活動報告には「問い」が設定されています。報告後、Googleフォームに皆さんの考えを投稿していただきます。

①海外研修を通じた探究学習(4ヶ国の研修事例から)(3グループ登壇)

〔発表者〕 服部優奈 (普通科中高一貫5年)
三宅 快 (普通科中高一貫5年)
西井真優 (普通科中高一貫5年)
西村侑留 (普通科中高一貫5年)
田中秀斗 (普通科中高一貫5年)
大村咲月 (国際教養科2年)
土井 漣太郎(国際教養科2年)
徐 采千 (国際教養科2年)
尾崎緑古 (国際教養科2年)

【問い】高校生が将来活躍するためには、高校生のときにどんな面白い海外経験や修学旅行を行うべきでしょうか。(右上のQRコードをご利用ください)

②企業・NPO法人・自治体とのパートナーシップ(2グループ登壇)

〔発表者〕 坂田俊空 (普通科国際バカロレアクラス2年)
高井項太 (普通科中高一貫5年)
飯田桃羅(普通科中高一貫3年)

【問い】高校生が将来活躍するためには、どんな部活動や特別活動を通して社会とつながるべきでしょうか。(もしくは、高校生のうちから社会とつながることどんなことが学べるでしょうか)(右上のQRコードをご利用ください)

③高大接続によるシームレスな学び(1グループ登壇)

〔発表者〕 高坂 優苺(普通科中高一貫4年)
野嵜 恋歌(普通科グローバル探究クラス2年)

【問い】大学の学び方を体験したり、他の学校、社会人と話し合う機会は、将来にどうつながるでしょうか。(右上のQRコードをご利用ください)

14:40 休憩

14:55 パネルディスカッションおよび質疑応答

15:25 講評 伊藤雅康 氏

15:40 閉会



名古屋商科大学系列校
名古屋国際 中学校
高等学校
NUCB INTERNATIONAL JUNIOR & SENIOR HIGH SCHOOL

〔2〕 活動内容

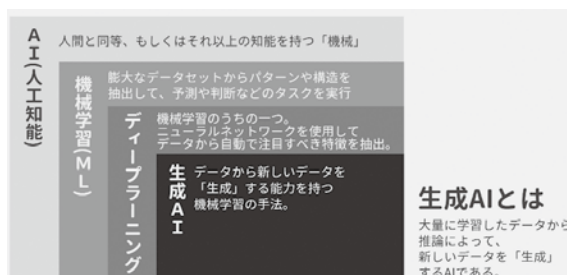
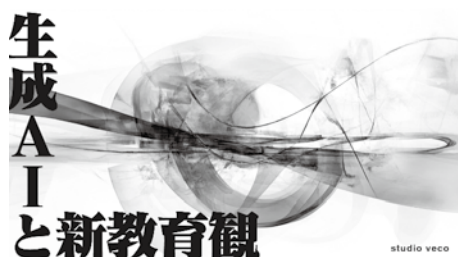
ConnectEd 2 0 2 5 のテーマは「共創拠点—共創から始まる未来を生き抜くための学びの在り方—」ある。昨年度のテーマである「連携深化—社会との連携による学びの拡充でSociety 5.0 を生き抜く—」を踏まえ、連携の先にある、学びを共に創る「共創」をテーマとした。

今年度は昨年度と異なり、分科会形式ではなく全体発表形式で行った。また、「ただ報告をする会」にはせず、参加型の報告会を目指した。高校生の報告を3セクションに分け、それぞれにテーマと問いを設けた。そして各セクション終了後、問いに対する参加者の考えをGoogleフォームで回答してもらい、テキストマイニングを行い、構造化をねらった。

(1) 基調講演

今年度の基調講演はstudio veco代表・一般社団法人教育AI活用協会副代表である伊藤雅康氏にお願いした。伊藤氏は令和6年12月にSTATION Aiで行われた高校生国際会議に社会人アドバイザーとして参加していただいた方だ。ぜひAIと教育に関してご講演いただきたいと考え、依頼をしたところ快諾していただいた。

基調講演のテーマは「生成AIと新教育観」である。伊藤氏は、生成AIが目される理由を「民主化（簡単）」・「UI（使いやすい）」・「高性能（よい回答）」の3点にまとめていた。次に生成AIの令和7年のトレンドを語った。それはエージェントとマルチモーダルである。エージェントとは一度指示しただけで複数のタスクをこなしてくれる機能である。いちいち〇〇しなさいとコマンドプロンプトを入力せずとも、どのタスクが必要なのか学習し処理してくれるようになった。マルチモーダルとは言葉だけでなく画像や動画、音声を認識できる機能である。この結果、自動文字起こしができるようになり、より言語を処理できるようになった。また、生成AIが生成した動画を数種類ご紹介してくださり、生成AIの技術が急速に進歩していることを語った。そしてこの変化も日々進出し続け、トレンドが移り変わる社会であることを、データを用い解説していただいた。



生成AIのできることが増大し、私たちの生活に存在して当たり前のものになりつつある。こうした社会では、どのような学びが求められてくるのかについて語った。私たちの知識量はAIに比べると非常に劣っているため、ただ知識を覚えるのではなく、知識をどう活用するのが大切だと強調した。加えて活用のための補助をすることが生成AIの真価が発揮されるのであり、そのために3つの力が求められる。



1つ目は「問いを立てる力」である。生成AIから回答を引き出すためには、生成AIに問わなければいけない。生成AIを使いこなすためには自らで問いを作り、コマンドプロンプトを入力する必要がある。ほんやりとした質問ではなく、的を絞った質問をすることで生成AIから有意な情報を出力させることができる。2つ目は「異なる視点をもつ力」である。日本は島国であるため、どうしても国内だけの視点にこだわるきらいがあるように思う。また日本と海外のような二項対立的な視点に陥りがちであるように思う。インターネット上には世界中の「知」が集積されている。(もちろんフェイクも含むが。) これらを生成AIから引き出させ、異なる視点を理解し、目の前の問題にどう立ち向かっていくのか、考えていくことが必要だと考える。そして最後の3つ目は「想像する力」である。問いを立て、異なる視点をもったうえで、創造的なアイデアをつくっていくことが求められる。

最後に私の感想を述べる。私たちは生成AIを使いこなさねばならない。なぜならば、使いこなすことでより創造的なアイデアを生み出すことができるからだ。使いこなすことを忘れたら私たちは生成AIの奴隷となってしまう。生成AIが出てきた答えをうのみにすることが使いこなすことではない。その情報の真偽を確かめ、適切にコマンドプロンプトを入力し、出力されたデータを用い思考していく。こうしたことで、より創造的で面白いアイデアを作ることができると思う。伊藤氏は、生成AIには感情がないと最後に語った。ただ入力されたコマンドプロンプトに従って、無機質的に実行しているだけだ。私たち人間には「心理」と「感情」がある。論理的で実証され得る「心理」だけでなく、正しくないとわかっていても行動が促される「感情」がある。このバランスを認識し、生成AIの考えをい

2025 生成AIの時代

1 「問いを立てる力」

→ 生成AIが答えを出すからこそ、「どんな問いを投げかけるか」が重要。

2 「異なる視点を持つ力」

→ 生成AIは大量のデータを処理できるが、「どの視点から見るか」は人間の役割。

3 「創造する力」

→ AIを使って、新しいアイデアや価値を生み出すことが、これからの社会で求められる

かに人間社会に適用させていくのか、ここを考えることが人間の創造性だと思う。基調講演を聞き、参加した高校生、教員ともに学びを得ることができるものになったと考える。

教諭 近藤佑思

(2) 高校生の活動報告

[ConnectEd 2025の概要説明]

高校生の活動報告に先立ち、国際教育推進部主任 黒宮教諭より概要説明が行われた。ConnectEd 2023からのテーマの変遷と、「共創」にこめた思いなどを語った。共創は産学官民と学びを伴うことであり、そのため報告を通じて、どのように産学官民が結びつき活動したのか、そしてConnectEd 2026に向け、どのような学びをするべきなのか、ともに考えていきたいと語った。

①海外研修を通じた探究学習〈4ヶ国の研修事例から〉

テーマ：「世界とのConnectEd」

問い：「高校生が将来活躍するためには、高校生のときにどんな面白い海外経験や修学旅行を行うべきでしょうか」

(i) 国際理解研修（カンボジア・ベトナムコース）および全国高校生フォーラム

カンボジア・ベトナムコースに参加した生徒および全国高校生フォーラムに出場した生徒が報告した。このグループはコンブンブルック村のインフラ設備の状況を、「水」・「電気」・「交通」・「通信インフラ」の4つを実際のフィールドワークの結果をもとに報告した。「水」は飲料水、トイレなどの上下水道の整備状況が追いついておらず、住民の健康に直結するのではないかと懸念を伝えた。「電気」は日本とカンボ



ジアの電気料金を比較し、日本よりも高い電気料金のため家電製品を動かさない状態にあることを伝えた。「交通」は地方にいくほど道路が未舗装であることを伝えた。「交通インフラ」は携帯電話の普及率は日本よりも高いものの、地方にいくほどインターネットがうまくつながらない、通信速度が遅いという問題があることを伝えた。そしてこうした現状を全国高校生フォーラムで発表した。全国高校生フォーラムはすべて英語でディスカッションを行い、大学の研究者からコメントをもらえるものである。この経験から海外に積極的に出て、そして国内外において英語で議論する経験を増やすことが大切になってくるのではないかと結んだ。



(ii) 国際理解研修（大韓民国コース）

大韓民国コースに参加した国際教養科の生徒が報告した。この大韓民国コースは初めての試みであった。ただ観光にいくわけではなく、学校が主催する国際理解研修だからこそ、体験型のプログラムが組まれた。例えば、ソウル大学キャンパスツアーおよび大学生との交流、K-POP体験、韓国料理体験など自身の興味関心に基づいて行動した。こうした経験を通して、表面的ではなく、五感を用いて異文化に浸ることができたのではないかと考える。韓国文化への興味関心が高まっているからこそ、この研修を通じてスモールステップで異文化理解を深め、高校2年生の国際理解研修につなげることができるのではないかと考える。

(iii) 国際理解研修（オーストラリアコース）

現地校への短期留学とホームステイを経験した生徒が報告した。このコースは3週間、現地校に留学し、ホームステイするため英語を必然的に使う必要があり、実践的な語学力を身に着けることができる。専属のコーディネーターがつくため慣れな



い生活の中でも安心して留学をすることができたことを語った。また大学のオープンキャンパスにも参加し、日豪の学校生活の違いを実感するだけでなく、異文化に深くまで身を浸していた。そして現地で生活しなければわからないこと、出会えないハプニングを語った。例えばある生徒は、アカシアの花粉に悩まされた。オーストラリアでは8月にアカシアの花粉が飛び、日本のスギ花粉のように辛かったと語った。またほかの生徒は大学のオープンキャンパスに行く途中、コーディネーターの車で移動中に交通事故に遭い、その相手はオーストラリアンフットボールの名門チーム「ジーロング・キャッツ」の選手だったことも語ってくれた。こうした経験は現地でしか体験できないものであり、一生記憶に残るものだと考える。

②企業・NPO法人・自治体とのパートナーシップ

テーマ：「社会とのConnectEd」

問い：「高校生が将来活躍するためには、どんな部活動や特別活動を通して社会とつながるべきでしょうか。（もしくは、高校生の中から社会とつながることによってどんなことが学べるでしょうか）」

（i）Business Design Club

Business Design Clubに所属する生徒が、リアビズ高校生模擬起業グランプリに参加し金賞をもらったことを報告した。彼らは「フラタン！」という、「ふらっといつでも！フラッシュカード式英単語帳」を開発した。このグランプリは30万円を資金に、資材の仕入れ、製品の作成・販売、広報、経理など、1から全てを高校生のみで行うプログラムである。自分たちの強みで



リアビズ 高校生模擬起業グランプリ

（主催）認定NPO法人 金融知力普及協会

30万円を資金に、資材の仕入れ、製品の作成・販売、
広報、経理など、
1から全てを高校生のみで行うプログラム

準備期間：約3ヶ月（7～9月）
販売：約1ヶ月（10月）

12月に成果発表会（プレゼン）を東京で行い、
金賞を受賞

ある英語力をヒントに、商標使用申請から新聞取材などの広報活動、公文や各種マルシェ、文化祭などでの対面販売などを行った。最後に経理の処理まで丁寧に行った。彼らは高校生ではあるものの、企業人であるかのようにふるまい行動したことで学校生活では得られないより実践的な学びを得た。この行動は、学校の学びとは無関係ではなく、例えば商標登録は情報科の領域であり、経理処理には数学力、広報活動のためには適切な日本語力が問われる。また現在の社会に求められているニーズを掘り起こす作業は広範な意味での社会科の領域となる。私は、学校の学びと接続させながら行動することの大切さを痛感した。昨今の教育業界では「学ぶ意味」を問われて久しいが、「レリバンス」³という観点からもこの活動は高く評価されたのではないかと考える。

(ii) SDGs未来倶楽部 Sus-Teen!

SDGs未来倶楽部 Sus-Teen!は企業訪問やイベント出展、イベント運営、出前授業など学外で精力的に活動していた。彼らはどうしたらこの社会がよりよくなるのか考え、自主的に行動し、その成果をイベント等で発表し、社会とつながり続けている。彼らがかかわる企業や団体は多岐にわたる。もちろん通年でかかわり続けているところも



**Sus-Teen!は、
自分を更新する旅。**

あるが、だんだんその活動の輪は拡張していると考えている。報告者の生徒は、「Sus-Teen!は、自分を更新する旅」だと結論づけた。活動が続けるうちに自身の強みや弱みが見え、さらに自身の視野が広がっていく。また、これは企業などの外部団体にもポジティブな面があると考える。企業の社会貢献活動、広報活動になるだけでなく、中高生の考えを取り入れたマーケティングにつながると考える。社会とつながる際、どちらも気づきや学びの多い活動となるようにしていかなければならないと考える。生徒の「やりたい」と社会の要請ががっちりかみ合い、今後も様々な活動が展開されていくことを期待している。

③ 高大接続によるシームレスな学び

テーマ：「学校とのConnectEd」

問い：「大学の学び方を体験したり、他の学校、社会人と話し合う機会は、将来にどうつながるでしょうか」

2024年度高校生国際会議—ケーススタディ（名商大）と高校生が考えた提言—

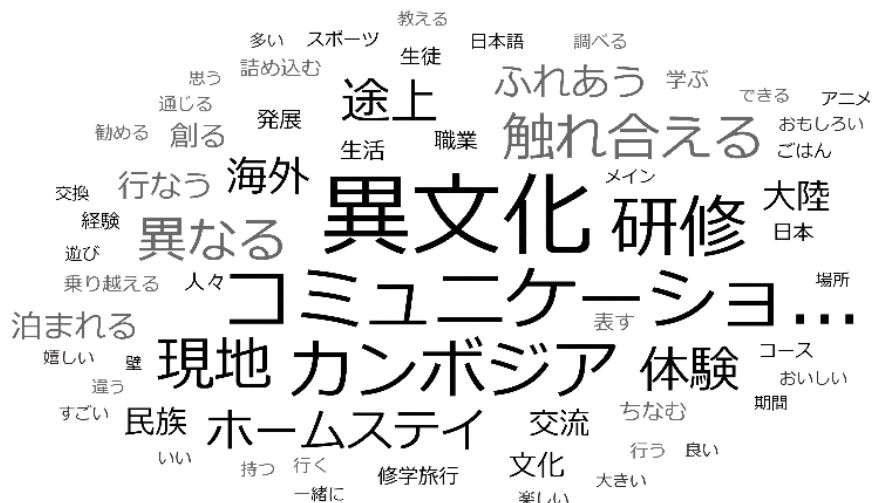
高校生国際会議に司会としてかかわった生徒会役員の2名の生徒が報告した。まず、参加者に事前に提示されたケース課題を読み込む時間を設けた。これは、名古

屋商科大学のすべての授業で用いられているケーススタディを取り入れたものである。その後、フューチャーデザインを活用した事前学習を報告した。このフューチャーデザインや事前学習の実際は高校生国際会議のページを参考にしていきたい。事前学習や当日の社会人アドバイザー、他校の生徒とのかかわりを踏まえ、多角的な視点で物事をとらえることができ、議論が盛り上がりを見せたことを報告した。様々な立場の人が集まり答えのない問いを共に考えることで創造的なアイデアが生まれてくるのではないかと考える。

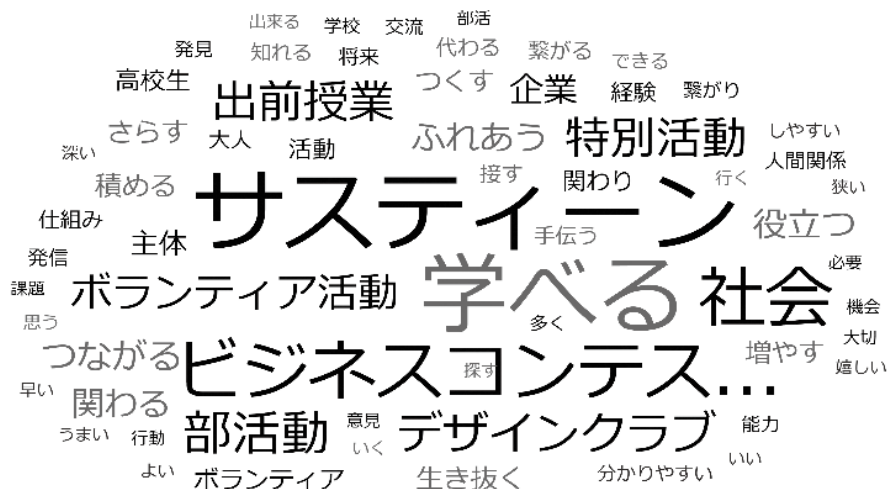
(3) 投稿から生成したテキストマイニングの結果

各セクション終了後、Googleフォームを用い問いに対する自身の考えを投稿してもらった。その投稿結果を、テキストマイニングを用い、分析した。以下がその結果である。

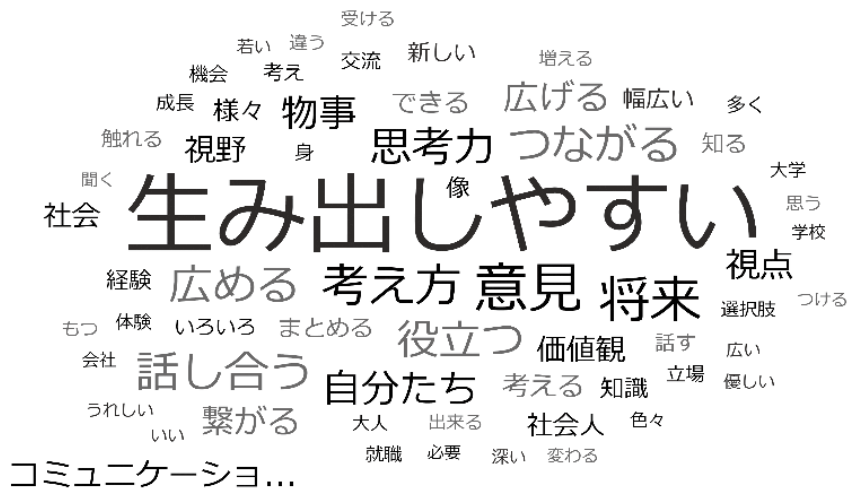
「①海外研修を通じた探究学習〈4ヶ国の研修事例から〉」分析結果



「②企業・NPO法人・自治体とのパートナーシップ」分析結果



「③高大接続によるシームレスな学び」分析結果



3つの結果から、参加者から様々な気づきがあった。投稿された回数が多い単語が必ずしも大きくなるわけではない。そのため、なぜこのような形になるのか共に考えた。この結果から皆さんはどのような気づきを得るだろうか。基調講演とつなげて考えると、こちらからもたくさんの「問い」が生まれ、多角的な視点と創造的な思考を促すことができると考えている。

(4) アンケート結果と総括

最後にアンケート結果を紹介する。

①基調講演の満足度の平均値（５段階）：４.７５

理由（抜粋）：AIがそこまで進化してるとは思っていなかったので、とても驚きました。なかなか生で聞く機会はないと思うので、貴重な体験でしたし、とても興味深いお話だったので、今日聞いた話で何か関係のある仕事をしてみたいと思いました。

②活動報告の満足度の平均値（５段階）：４.７５

理由（抜粋）：

・海外研修をしたことで学んだことも現状も知れて、より興味深くなりました。私が特に魅力を感じたのはカンボジアで、発表も素晴らしかったです。

・Business Design Clubの活動、結果、成果などを順序良く、丁寧に発表しているものすごく分かりやすかったです。売れたフラタン数と利益をグラフで表していてより成果が見やすかったです。また、最後に人としてどのように成長できたのかを言ってくれていて良かったです。実際に商品を作って、それを印刷して、Kumonやネット上で売るという過程がこれから社会に出る上で役に立つ経験だと思います。これだけ社会に貢献しているのをみると“自分も何かをやらないと”と振り返りました。私も高校２年生になってから色々なボランティア活動をするつもりですがSus-teen!の活動内容も聞いていい参考になったと思います。

③全体の満足度の平均値（５段階）：４.７５

このイベントを総括すると、ある程度の満足度を得ることができたと考える。私は、このイベントの統括は２年連続であるが、昨年度を超えるために何かチャレンジしたいと考えていた。ただ普通の報告会では終わりたくなかった。せっかくやるならば「簡単より大胆なほうへ」そして「簡単より大変なほうへ」を目指した。今年は参加者も参加する報告会で、みなと考えるという点ではまさにこのイベントも「共創」の場になったのではないかと考える。こうしたチャレンジに付き合ってくださった先生方、そして期待を超えてくれた報告生徒にこの場をお借りして感謝申し上げる。

このイベントを機に、明日から何かやってもみようかなと思ってもらえただろうか。令和７年２月２日からConnectEd 2026の始まりであるという点において、このイベントはConnectEd 2026のキックオフイベントであるとも言え換えられる。私たちはこの共創の輪を広げていきたい。最後にアンケートに寄せられた意見を取り上げたい。

「柔軟に新しい事に取り組んでいったり、今、世間で進められているキャリア教育の最先端をいっていて、素晴らしいと思います。この良さを地域の公立の

小学校、中学校にも伝わるとよいと思いました。このような取り組みを推進していらっしゃる先生方と、日常で教科を担当していらっしゃる古いタイプの先生方とのギャップがありすぎる。たとえ、講師の先生でも、学校として同じ温度感で、教育を進めていただけると、学校として、もっと生徒の力を伸ばしていただけるとと思います。」

手厳しいご意見であるが、的を射ていると思う。私たちは3年間をかけてゆっくりではあるが共創の輪を広げつつあったが、まだ一枚岩になりきれていない。だからこそ、私たちは教員同士のConnectEdを推し進め共創の輪を広げることで、さらに良い実践を行う余地が残されている。一人一人の教員の強みを生かした様々な実践を積み重ね続けていきたい。私たちはチャレンジし続ける学校でありたい。チャレンジし続けることで、必ず生徒の将来につながると信じる。私のような経験もなく力もない若手には微々たることしかできないが、自分にできる最大限のちょっとプラス α の力を出し続けていきたい。ConnectEd 2026ではどのようなチャレンジをしていくのか、来年もぜひ参加し確かめていただきたいと切に願う。

教諭 近藤佑思

³ レリバンスとは、関連性という意味を持つ。教育がどのような意義をもち得るかを表わす概念である。レリバンスが高ければ、学ぶ意義を見出しやすく内発的な動機付けにつながると考えられている。

【1 1】 リンガスキルを用いたWWL対象生徒の英語力効果測定

本校のネイティブインストラクターが授業者を務める学校設定科目『English Skills II』の履修者高校2年生の中から、国際理解研修やWWL特論Ⅰを履修している生徒を中心に選拔し、ケンブリッジ大学英語検定機構が開発した、国際基準CEFRレベルを迅速に判定できるオンライン型の英語4技能テスト「リンガスキル」を用いて英語コミュニケーション能力の測定と検証を行った。

生徒の選拔には層化抽出法を用い、WWL事業参加度、所属学科・クラス、実用英語技能検定の取得級、英語コミュニケーションⅡ及びEnglish Skillsの評定、大学入学共通テストで平均点を見込める英語力などのバランスを考慮した。選拔方法は昨年度と同様である。

(1) アセスメント手法

ケンブリッジ英語検定4技能CBTリンガスキル

実施日：2024年12月26日（木）に本校にて実施

受検者：高校2年生18名

(2) 英語力検証のための比較水準の設定

大学入学共通テスト平均点を水準と仮定。分析機関であるTEFL PLANNINGによる実証研究を踏まえ、リンガスキルスコア130＝大学入学共通テスト平均点として検証・分析した。

(3) 測定・検証結果

[1] 平均スコア（CEFR）と4技能別平均スコア

図1：Average＋CEFR

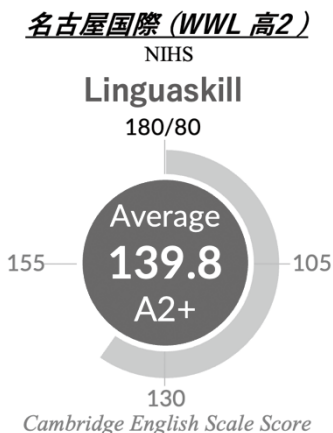
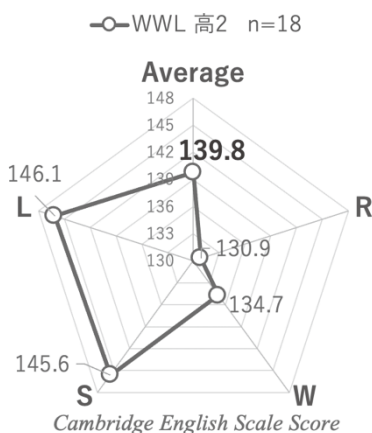


図2：Average＋4技能



[2] 経年平均スコア技能別 (表 1)

年度	学年	Cambridge English	試験日	CEFR	Cambridge English Scale スコア(平均)※					受検者
					Average	L	R	S	W	
2023	高2	Linguaskill	2023.12	A2+	136.7	134.4	127.7	145.0	134.0	22人
2024	高2	Linguaskill	2024.12	A2+	139.8	146.1	130.9	145.6	134.7	18人

[3] Averageスコア分布と条件付き予測分布図

図 3 : Averageスコア分布図

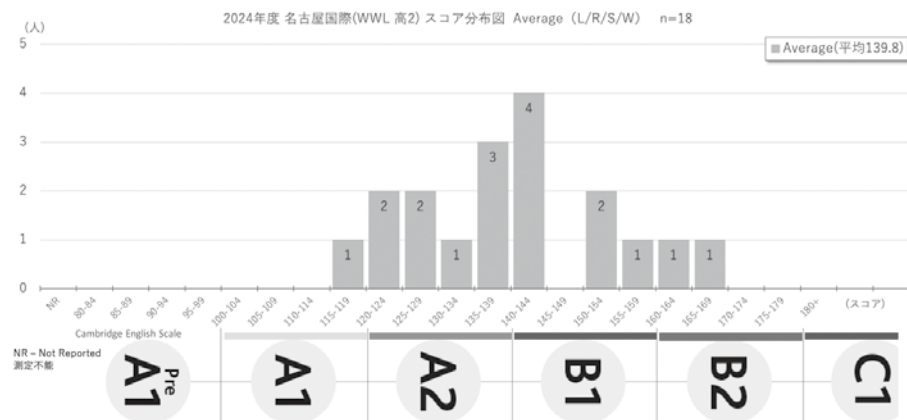
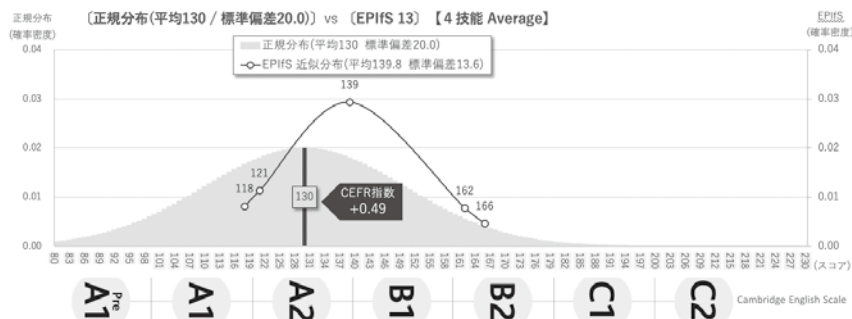


図 4 : 条件付き予測分布図 (4 技能)



(EPI for School 13個の数値から近似のスコア分布を作成 ※EPI=English Proficiency Indicator 【4 技能 Average】)

0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	(A)	(B)
人数	Min	2%	5%	10%	15%	25%	50%	25%	15%	10%	5%	2%	Max	Mean	Standard Deviation	Skewness	Kurtosis
n=18	118	118	118	118	121	129.25	139	148.5	162	166	166	166	166	139.8	13.6	0.3	-0.7

図5：条件付き予測分布図（Listening）

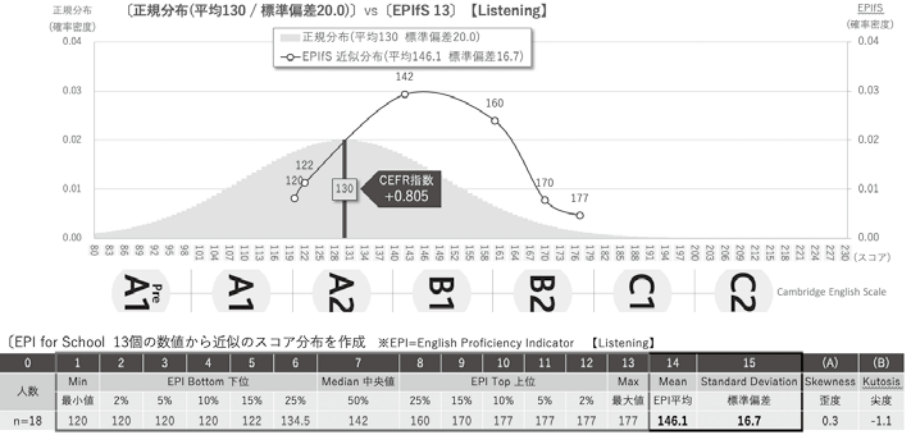


図6：条件付き予測分布図（Reading）

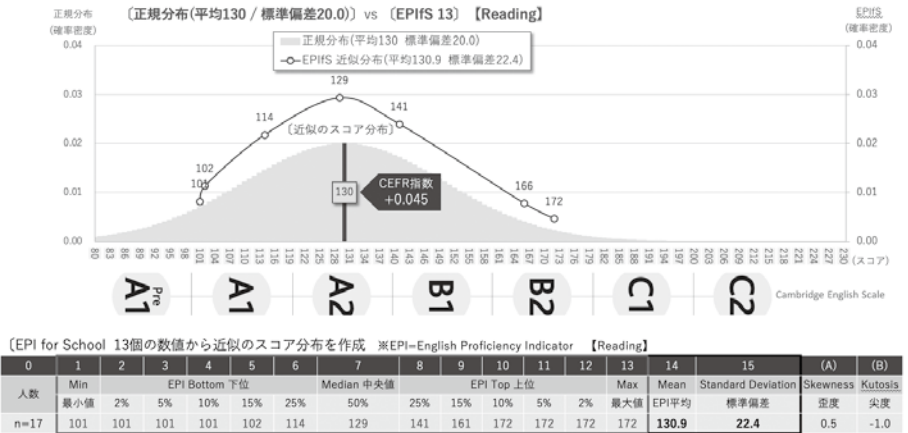


図7：条件付き予測分布図（Speaking）

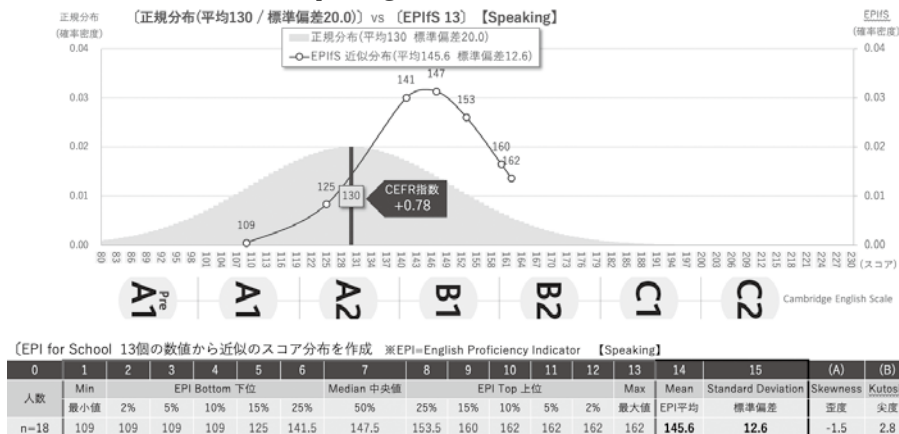
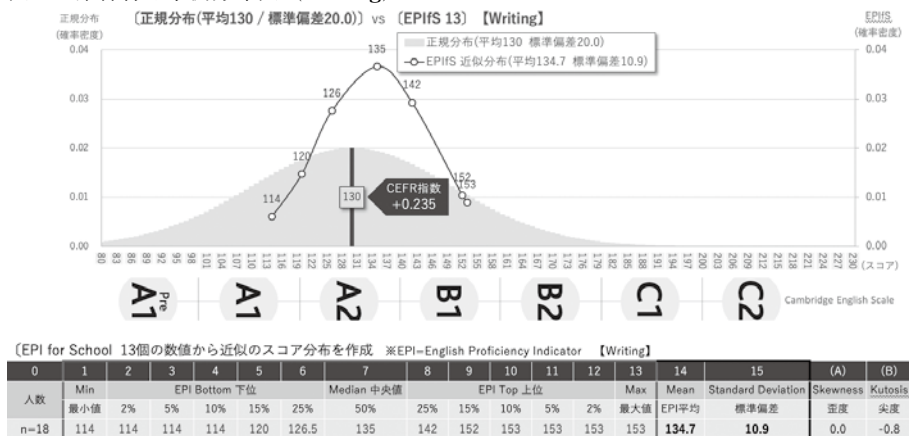


図8：条件付き予測分布図（Writing）



[4] 英語授業の評定別リングスキル平均スコア（表2）

英語Com II	人数	Linguaskill 4技能Average平均スコア	B2	B1	A2	A1	計
5	10	145.2	2	4	3	1	10
4	5	129.0		1	4		5
3	3	139.7		2	1		3
2	-	-					-
計	18	139.8	2	7	8	1	18

English Skills II	人数	Linguaskill 4技能Average平均スコア	B2	B1	A2	A1	計
5	10	147.9	2	6	2		10
4	5	133.6		1	4		5
3	3	123.0			2	1	3
2	-	-					-
計	18	139.8					18

2024年度高校2年生の平均レベルはCEFR A2+であり、4技能間ではSpeakingとListeningが高い傾向にある。(図1・2)これは昨年度の傾向と同様であり(表1)、本校生徒の特徴が色濃く出た結果となった。また、条件付き予測分布(図4～図8)において、特にReadingの標準偏差が他技能よりも大きく、個人差が大きいことが読み取れる。昨年度の検証においても、Readingは英文法や語彙力など地道に努力を重ねる要素が欠かせない技能であり、コミュニケーションな活動を好む本校生徒に対して、効果的な授業方法を導くこと検討課題として挙げた。結果としてわずかにReadingの平均スコアは上昇したものの、依然として本校における課題として改善が必要である。

最後に、英語の授業における評定(2024年度2学期)とリングスキルおよびCEFR換算を分析した(表2)。『英語コミュニケーションⅡ(英語ComⅡ)』は日本人英語科、『English SkillsⅡ』はネイティブインストラクターによる授業である。2つの授業を比較すると、English SkillsⅡは授業者が評価した評定とリングスキル及びCEFR換算が正しく相関しているのに対して、英語コミュニケーションⅡでは、評定4と評定3の生徒のリングスキル平均に逆転が見られ、中には評定5の生徒でCEFR A1レベルであるケースも生じた。この原因は、各授業における評価素材とその割合にあると考えられる。

[英語コミュニケーションⅡ]

知識・技能：定期試験100%

思考・判断・表現：定期試験50%、パフォーマンステスト50%

主体的に学習に取り組む態度：平常点70%、パフォーマンステスト30%

[English SkillsⅡ]

Students will be assessed on written tests (50%), assessment projects (30%), participation in class activities (10%), assessed work (10%).

英語コミュニケーションⅡでは、定期試験の比重が高いが、試験で測る技能はReadingとWritingの2技能である。English SkillsⅡにおいても定期試験(written tests)の割合は高いものの、本科目の試験では必ず10分を超えるリスニング問題が出題されるなど、同じ試験でも測る技能に差が生じている。また、両授業とも、評定5～3を取得した各人数は同じであったが、リングスキル平均スコアの差を取ると、English SkillsⅡでは評定5と評定3の生徒間で24.9ポイント差があるのに対し、英語コミュニケーションⅡでは5.5ポイントしか差が生じておらず、生徒の4技能を測るにつけては、English SkillsⅡの評価の方がより精度が高い結果であると分かる。以上の点を踏まえ、英語科における評価方法の検討と、その精度の向上について改善を図りたい。

【12】運営指導委員会・検証委員会

第5回ALネットワーク運営委員会議事録

日時：令和6年7月1日（月）11時25分～12時10分

方法：オンライン・対面同時会議

場所：オンライン（オンラインシステム：Zoom）

対面 名古屋国際中学校・高等学校 3階 理事室

出席者：＜管理機関＞

亀倉正彦 教授（名古屋商科大学商学部）

＜運営委員＞

北村友人 教授（東京大学大学院教育学研究科）

伊藤 博 教授（名古屋商科大学大学院マネジメント研究科）

＜名古屋国際中学校・高等学校＞

小林 格（校長）、栗本貴行（中高担当部長）、鈴木 悟（教頭）

片山寿弘（参与）、木本健太郎 様（カリキュラムアドバイザー）

黒宮祥男（国際教育推進部主任）、内藤圭祐（国際教育推進部）

佐藤良明（国際教育推進部）、奥村仁崇（国際教育推進部）

神山清光（国際教育推進部）、河合航輝（国際教育推進部）

宮尾国之（事務局）

議事の経過及び結果

鈴木悟教頭が議長となり、11時25分に開会する旨を宣言した。

管理機関である亀倉正彦教授の挨拶及び小林格校長の挨拶に続いて議事に入った。議事内容は次のとおりである。

議事内容：

1 令和6年度事業計画

（1）WWL/SGHN連絡協議会の報告

黒宮国際教育推進部主任から、6月28日に出席したWWL/SGHN連絡協議会について、次のような報告や意見があった。

- ・科学技術が急拡大してSociety 5.0という言葉の存在が薄くなってきているが、本事業の方向性は変えずに進める、との文部科学省担当者の挨拶があった。
- ・大阪教育大学は、一つのプラットフォームに関西ブロックの学校を置いてそれらをつなげる活動をしている。本校でもこの仕組みを取り入れていきたい。
- ・福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校は、探究学習が成熟している学校であるが、探究学習の発表方法を生徒自身が決めているところは参考としたい。
- ・山梨県立甲府第一高等学校も探究学習が成熟している学校であるが、連携の大学に探究の相談ができるシステムがあり興味深い。

・企画評価会議委員である久野弘幸教授（中京大学）から、「探究学習における自己決定が重要である」「卒業生の追跡インタビューが必要である」「探究学習や社会課題についてもう少し先の未来を見据えてもよいのではないか」とのコメントがあった。

（２）令和６年度WWL事業実施計画

黒宮主任より令和６年度のWWL事業実施計画について、以下の項目について報告があった。

①自走に向けた変革

- ・WWLの新しい人材育成を普通科アドバンスクラスで行う。
- ・国際教養とデータサイエンス・AI、高大一貫教育による新しい科目を国際教養科に設ける。

②カリキュラム

- ・国際教養科の学校設定科目にデジタルイノベーション概論・特論を設け、デジタル化に向けた新たな考え方や先進技術を取り入れる。
- ・普通科１年に、少し先の未来の道筋を考えられるような科目としてシナリオプランニングを設け、２・３年にはフューチャーデザイン概論・特論を設置する。

③高大連携

- ・高大一貫のクラスでは、先取り履修という形で大学の授業を受けて８単位を修得できる。
- ・今年度２学期からは、より高度な経営管理課程を受講できるようになり、さらには短期留学も可能となる。

④行事等

- ・昨年と同様に高校生国際会議を１２月に、ConnectEd 2025を２月に開催する。
- ・１０月に開業するSTATION Aiを高校生の学びの拠点として活用していく。

２ 質疑応答・助言等

黒宮主任からの報告に対し次のような発言があった。

[北村友人教授]

- ・答えのないものの答えを探すことや、新しいツールを活用することに対しても、記憶や知識の応用が必要となるので、基礎的な学力が大事である。
- ・一方では、よりアカデミックなスキルや考え方の追求も大事であるので、シナリオプランやフューチャーデザインを充実させていく上で大学の学びの先取りが大事になってくる。
- ・デジタルトランスフォーメーション（DX）は、デジタルを効果的に使って学び方や教え方を変えろということなので、探究を次のステージにつなげるためにも大胆なことに挑んでもよいと考える。

〔伊藤博教授〕

発表方法を生徒が決められるということについて、どこまで生徒が裁量を持っているのか。

〔黒宮主任〕

発表の方法自体は重要視していない印象で、自由度は高そうであった。

〔伊藤教授〕

- ・評価手段を含め全部を生徒が決めるのがアクティブラーニングであるが、枠組みもなく生徒が全部を決めるのは現実的ではない。しかしその自由の程度は難しい。
- ・卒業生への追跡インタビューについては、重点を置きたいスキルなど具体的な目的をプロジェクトに取り組む際にはっきりさせておくと、追跡調査に役立つと考える。

〔木本健太郎様〕

グローバル系とデジタル系のプロジェクトの両方を国から指定を受けた学校はほばないので、全国的に注目されていると思う。グローバルとサイエンスをうまく融合させて、コースごとに違いを出せていければ、面白い取り組みになる。

3 講評

亀倉教授より次のような講評がなされた。

- ・確固たるスキルと思想を持って社会の変容と変革に立ち入ることのできるクリエイティブな人材育成のために、国際教養とデータAiの融合をどのように実現していくかの方法論を具体的に詰めていく段階である。
- ・高大連携において「答えのない事態に耐える力を育むために」とのテーマが掲げられていたが、具体的にどういう力が必要で、それをどのように育むのか、どのように社会の中で発揮するのか、どのように記録をとって形を残すのか、が今後の自走のための資金取りに関して重要になってくる。

以上をもって本日の議事を終了した旨を議長が述べ、12時10分に閉会を宣言した。

第6回ALネットワーク運営委員会／第3回検証委員会議事録

日時：令和7年2月7日（金）9時35分～10時20分

方法：オンライン・対面同時会議

場所：オンライン（オンラインシステム：Zoom）

対面 名古屋国際中学校・高等学校 3階 理事長

出席者：＜管理機関＞

亀倉正彦 教授（名古屋商科大学商学部）

＜運営委員＞

北村友人 教授（東京大学大学院教育学研究科）

伊藤 博 教授（名古屋商科大学大学院マネジメント研究科）

<検証委員>

鵜飼宏成 教授（名古屋市立大学大学院経済学研究科）

光永悠彦 准教授（名古屋大学大学院教育発達科学研究科・教育学部）

小野裕二 教授（名古屋商科大学商学部長）

<名古屋国際中学校・高等学校>

小林 格（校長）、Steven McLellan（副校長）、栗本貴行（中高担当部長）

鈴木 悟（教頭）、杉尾志帆（教頭）、片山寿弘（参与）

木本健太郎様（カリキュラムアドバイザー）

黒宮祥男（国際教育推進部主任）、内藤圭祐（国際教育推）

佐藤良明（国際教育推進部）、奥村仁崇（国際教育推進部）

渡邊えみ（国際教育推進部）、後藤彩可（国際教育推進部）

近藤佑思（国際教育推進部）、河合航輝（国際教育推進部）

宮尾国之（事務局）

議事の経過及び結果

鈴木悟教頭が議長となり、9時35分に開会する旨を宣言した。

小林格校長の挨拶及び管理機関である亀倉正彦教授の挨拶に続いて議事に入った。議事内容は次のとおりである。

議事内容：

1 2024年度事業報告

黒宮国際教育推進部主任より2024年度事業について、昨年度から大きな変化があった取り組みについて次のことについて説明があった。

・国際理解研修のシンガポール・マレーシアコースがなくなり韓国コースが追加された。

・学校設定科目が、次年度から順次シナリオプランニング、フューチャーデザインに変更となる。

・高大一貫クラスにおいて名古屋商科大学経営管理課程が受講可能となった。

・STATION Aiにおいて高校生初となるイベントとして高校生国際会議を開催した。

・愛知県内外からの視察が増えた。

続いて黒宮主任から、今後の活動の展開について「グローバル教育の基盤をしっかりとしたものにしたい」「広がりすぎたプロジェクトを整理したい」「本校の強みである、参加の場を作ることができるネットワークを活かしたい」「各取り組みを校内外へオープンにしていきたい」旨の発言があった。

2 検証委員による評価・助言

検証委員より事業報告に対して次のような評価及び助言があった。

鶴飼宏成 教授：

- ・フューチャーデザインという方法論を採用した背景や期待するところを、コンピテンシーの変化と連動していければさらに説得力が増すと考える。

光永悠彦 准教授：

- ・国際的なコラボレーションは、将来につながる活動を持続可能な範囲で行うことが大切である。

- ・普段の授業のコンピテンシーの変化とプロジェクトへの効果がわかるような評価方法が必要である。

- ・生徒の内にある問題意識のベースが整っていることがコラボレーションの前提となるので、そこは改善の余地がある。

小野裕二 教授：

- ・新しい成果が見られ、自走に向けても展開しているとわかるものとなっている。

- ・高校生がビジネスプランニングに参加するというのは大事なポイントとなってくる。

3 カリキュラムアドバイザーによる評価・助言

カリキュラムアドバイザーである木本健太郎様より次のような評価及び助言があった。

- ・高校生国際会議について、STATION Aiという環境での対面による議論は、アイデアが出やすかったと思われる。

- ・国際理解研修について、生徒の興味関心ごとにグループに分かれての探究活動をライブ中継するまでの取り組みをしているところは、あまりないのではないと思う。

- ・文理という枠にとらわれることなく、新しい日本版のグローバルカリキュラム開発を進められるとよいと考える。

4 運営委員による評価・助言

運営委員より事業報告に対して次のような評価及び助言があった。

北村友人 教授：

- ・充実した取り組みを長く続け積み上げてきていることは素晴らしい。

- ・フューチャーデザインの議論はまだ答えが見えていないが、だからこそ刺激的な議論を重ねられると言える。

- ・生成AIを正しく使って技術を活用できるようになることを期待する。

- ・SDGsのあとのWell-beingの大切さが議論されており、生徒自身がどのように社会に貢献していくのかを、生徒との対話を深めていけるとよい。

- ・地元の行政や産業界とともに、どのような国際的人材を育てていくかの議論をリードして行ってほしい。

伊藤博 教授：

- ・高校生国際会議について、ケースの議論では参加者が多様であった分答えも多様なものとなっていた。

- ・常に新しいチャレンジをしているので、今後も唯一無二の学校として存在感を見せつけて行ってほしい。

5 管理機関による評価・助言

管理機関である亀倉教授より次のような評価及び助言があった。

- ・外部からの視察は社会から注目されている証拠であり、グレーター・ナゴヤの取り組みの深まりにつなげることが重要となってくる。

- ・各プロジェクトへの参加者の増加がネットワークを広げるきっかけとなる点からも、告知は重要である。

- ・ケースメソッドの活用をきっかけに、関係者みんなが自分事として考えていけるような教育ができると、生徒だけでなく地域社会に影響を与えられるような取り組みになると考える。

以上をもって本日の議事を終了した旨を議長が述べ、10時20分に閉会を宣言した。

- 【1】開会の挨拶
- 【2】校長挨拶
- 【3】管理機関挨拶
- 【4】令和5年度事業報告
- 【5】検証及び質疑応答
- 【6】カリキュラムアドバイザー助言
- 【7】運営指導委員 指導及び助言



名古屋国際中学校・高等学校 NUCB International Junior & Senior High School

	第一回検証委員会助言	2023年度 実践
1	英語の能力など、定量的に検証可能なものを適宜取り入れていくとよい。	英語4技能テスト「リンガスキル」を用いた英語力効果測定 →2024年度も実施予定
2	構想に「ナゴヤ」とあるので、名古屋地区の特性を明示化できるものにできるとよい。	・GNIC(グレーター・ナゴヤ・イニシアティブ評議会)との連携 →WWL高校生国際会議に参画 →ConnectEd2024：一般社団法人中部経済連合会国際部長 野村一樹氏による基調講演 ・STATION Ai(2024年度)への入居申込
3	まずは計画通りに実施されているかが重要であるが、さらに計画を超えた成果があれば、それを盛り込んだ報告ができるとよい	・British School of Ulaanbaatar（モンゴル）・東京都立三田高等学校と連携 ・東海テレビのメタバース企画において、本校メタバースを使用 ・スタートアップ企業Polimillとの連携-社会の課題に発言できる SNS Surfvoteの活用-
4	取り組みの自立化を見据えておくべきである。	経済的な視点→三菱未来財団への申請などをから補助等を検討
5	メタバースの業界自体が過渡期であるが、メタバースの持つポジティブな面は活用すべきである。	・Polimillのシステムでメタバースに関する意見を集積 ・WWL高校生国際会議にてメタバースに関する議論を実施 ・メタバース推進協議会(東京)との意見交換
6	カリキュラムマップなどの学校側からの視点だけでなく、生徒側の学びの自覚を促す視点が必要となると考える。	ユニットごとのリフレクションの積み重ねから、生徒の自覚をコツコツ積み重ねていくような取り組みを検討中
7	5つの能力の育成の成果を外部に対して明確にできる方法が必要である。	カリキュラム開発会議にて本取り組みに関する独自アンケートの実施を検討→2月-3月に実施予定。

	2023年度 実施計画	達成度
1	国際バカロレアにおいて用いられる「コミュニケーションスキル」「社会性スキル」「自己管理スキル」「リサーチスキル」「思考スキル」を活用し、生徒自己評価、担当教員評価、連携機関による評価を踏まえた評価方法の開発 国際バカロレア ATL に基づく生徒自己評価とアンケートの実施	カリキュラム開発会議にて議論中 →WWL対象生徒へのATLも未導入
2	国際理解研修や学校設定科目、総合的な探究の時間などの実践活動の検証	・国際理解研修：カンボジア・ベトナムコース、シンガポール・マレーシアコース、オーストラリアコース実施 ・学校設定科目・総合：Olive(スタートアップ企業)、アサヒ飲料、矢場とん等の企業連携 →検証：2/3月アンケート実施予定
3	大学、留学生、外部組織とカリキュラムとの関わりの検証	大学…高大クラスの設置、WWL特論（高大）実施 留学生・外部組織…デロイトトーマツ・NUCBの特別講座未実施 →検証：検証：2/3月アンケート実施予定
4	高校生国際会議/WWL 対話セッションの計画・実施運営、学校設定科目WWL特論、国際理解研修、国際理解講演会、高大連携講座の実施	左記、持続可能は計画通り実施 高大連携：データサイエンス、アカデミックリテラシーに関する実践は未実施
5	事務局/事業連携校・事業協働機関との調整・連絡等の事務活動及び情報の共有や配信	随時、学校ホームページにて活動内容等を周知

	2023年度 実施計画	達成度
6	関係機関の情報共有体制の整備：Google ドライブによる情報集積のシステムを整備、Instagram/Facebook/YouTube 等のソーシャルメディアの効果的な活用による情報の配信・デジタルブックの配信	情報集積に関する整備は未達成 YouTubeでの情報配信は検討中 SNSはInstagramのみ稼働 デジタルブック未達成
7	Meta-School インフラ開発	2022年度に達成。2023年度は、本校独自にアバターを製作し、WWL高校生国際会議にて披露
8	修了生の国内外のトップ大学への進学や海外留学等の促進に向けた実践	国際理解講演会・WWL高校生国際会議・ConnectEdでの基調講演における講演者やテーマ設定(海外留学経験者や海外展開をしている活動等) トビタテ留学JAPAN・せかい部(文部科学省)からの情報共有
9	情報収集・提供等、その他の取り組みに関する計画	WWL高校生国際会議における「提言」をポスターにして学校HPで発信済

WWL (ワールド・ワイド・ラーニング) コンソーシアム構築支援事業
第6回ALネットワーク運営指導委員会(第3回検証委員会)

管理機関：学校法人東本学園

令和7年2月7日(金) 9:35 ~ 10:20

- 【1】開会の挨拶
- 【2】校長挨拶
- 【3】管理機関挨拶
- 【4】令和6年度事業報告
- 【5】検証及び質疑応答
- 【6】カリキュラムアドバイザー助言
- 【7】運営指導委員 指導及び助言



名古屋国際中学校・高等学校 NUCB International Junior & Senior High School

	検証委員会助言	令和7年以降
1	英語能力などの検証を実施している点はWWLの意義に合致するが、英語能力のスコアなど量的指標と生徒の態度など質的指標を、カリキュラムの評価につなげることが重要	令和6年度ケンブリッジ英語検定4技能CBT リンガスキルによる成績データ分析(2月)を実施・授業評価アンケートの実施(3月)→2025年
2	高大接続への対応は今後重要になってくる。データサイエンスやアカデミックリテラシーに関しては実践すべきである。DX整備を進めるにあたり、メタバースなどの特定項目に対する補助金については調べる価値はある。	DXハイスクールの指定(令和6年度～) 2025年度の体制 [グローバル教育(特に外国語教育)の基盤] =高校生国際会議参加率向上 + [IB: 国際バカロレア=高度な英語力と探究力] + [普通科: WWL=社会課題探究と教養、外部連携] + [国際教養科: DX=データサイエンス、第二外国語] 高大一貫クラス(高校3年) →経営管理課程(名古屋商科大学)受講可能・短期留学
3	取り組んでいるプロジェクトが多く、少し広がりすぎており、優先順位をつけて取り組むことを勧める。取り組みを減らすことを検討する時期にきているかもしれない。他校でもやれることを削っていけば、名古屋国際高校でやるべきことが見えてくる。それをやり続ければ学校の特色として定着すると考える。自治化のためにも優先順位をつけるとうい。	[名古屋国際高校がやるべきこと] ○他校・企業・自治体・国際機関等も参加できる場が作ることができる。(ネットワークの力) ・交流の拠点づくり: 高校生国際会議、STATION Ai ・発表の場づくり: ConnectEd ・海外交流づくり: 国際理解研修
4	WWL指定後に各校が自走した運営を目指すことについて、助成金に頼ることは自走とは呼べない。	助成金がなくても運用できる体制作り →部活動・生徒会の推進や魅力度を高め、研修等に負担感をなくす。
5	事業を通じて生徒・教員・学校に「変化があった」ことを明確化すれば、より成果がわかりやすくなる。	ConnectEd2025アンケート結果 →ConnectEdや国際理解研修を全生徒・保護者が視聴できるオープンな体制→アンケートの実施・検証

	2024年度 実施計画	達成度
1	国際バカロレアにおいて用いられる「コミュニケーションスキル」「社会性スキル」「自己管理スキル」「リサーチスキル」「思考スキル」を活用し、生徒自己評価、担当教員評価、連携機関による評価を踏まえた評価方法の開発 国際バカロレア ATL に基づく生徒自己評価とアンケートの実施	[例年通り]ケンブリッジ英語検定4技能CBT リンガスキルによる成績データ分析(2月)を実施・授業評価アンケートの実施(3月)
2	国際理解研修や学校設定科目、総合的な探究の時間などの実践活動の検証	①国際理解研修：カンボジア・ベトナムコース、オーストラリアコース実施+韓国コース追加 ②学校設定科目→WWLSkill/WWL特論Ⅰ・Ⅱ・高大連携へ実施(→令和7年度よりシナリオプランニング・フューチャーデザイン概論・特論・高大連携へ)
3	大学、留学生、外部組織とカリキュラムとの関わり の検証	大学…高大クラスにて名古屋商科大学経営管理課程が受講可能。短期留学認可。 外部組織との関わり・・・例年通り
4	高校生国際会議/WWL 対話セッションの計画・実施運営、学校設定科目WWL特論、国際理解研修、国際理解講演会、高大連携講座の実施	左記、計画通り実施 高校生国際会議：STATION Aiにて実施(高校生イベントでは初、「グレーターナゴヤ」の拠点作り)、フューチャーデザイン、ケーススタディ、メタバース、多様なアドバイザーの参画。
5	事務局:事業連携校・事業協働機関との調整・連絡等の事務活動及び情報の共有や配信	随時、学校ホームページにて活動内容等を周知 →外部視察数の増加：7回(2月1回予定)

【13】カリキュラム委員会

1 議事録

第1回WWLカリキュラム開発会議議事録

日時：令和6年5月30日（木）11時25分～12時10分

場所・方法：オンライン（ビデオ会議システム（Zoom））

出席者：木本健太郎 様（カリキュラムアドバイザー）

〈ISA グローバル探究チーム〉

村野廣太 様

〈ISA 東海支社 国際教育アドバイザー〉

伊藤春香 様

〈名古屋国際中学校・高等学校〉

小林 格（校長）、栗本貴行（中高担当部長）、片山寿弘（参与）

杉尾志帆（教頭）、黒宮祥男（国際教育推進部主任）、宮尾国之（事務局）

議事の経過及び結果

小林校長が議長となり、11時25分、開会する旨を宣言した。議事内容は次の通りである。

議事内容：

1 2024年度カリキュラム開発計画

（1）教育課程の改編

黒宮国際教育推進部主任から「WWL事業が最終年度であることや、DXハイスクール事業の採択を受けたことから教育課程の改編がある」旨の報告があり、小林校長から「来年度から学校設定科目にDXに関する特論を加え、理系も選択できるようにした。WWLの特論も名称が変わる」との説明があった。

木本様から「理系の要素が入っても、これまでのカリキュラムの議論の継続に問題はない」との意見があった。

（2）高大接続について

黒宮主任から高大接続について、現在行われている本校での高大の交流や高大一貫クラスの紹介があり、「大学の先生への負担が大きいように思われるので、高と大がwin-winとなるシステムにしたい」と意見を述べた。

木本様から「大学は研究機関であり、研究につながる教育活動として主体的な学びである探究学習が有効と考える」との意見があった。

（3）国際理解に関する実践活動

黒宮主任から、国際理解に関する活動計画の中で、今年度は国際理解研修に韓国コースが新設されたことの報告があったことに関して、海外研修について次のような発言があった。

[木本様]

- ・非英語圏での研修でも、英語学習とは違うところに目的をおけば有効となる。
- ・事前学習が大切である。それをもとに準備、実践、振り返りを行う。
- ・「100人のデータより1人の生の声」を聞いて理解することが大切である。

[伊藤様]

ISAではカナダやニュージーランドにおける環境やジェンダーの問題などへの取り組みを学ぶ機会をプログラムに取り込んでおり、参考となるのではないか。

2 学習スタイル（やり方）について

黒宮主任から探究学習の学習スタイルについて次のような提案が出された。

- ・名古屋商科大学で行われている「ケーススタディ」を取り入れ、「探究学習」から「意思決定学習」へシフトしてはどうか。
- ・モジュール課題をデジタル化して蓄積し、他校でも利用できるようALネットワークで共有してはどうか。

これらに対し木本様が「ケーススタディは生徒が主体的になりやすくなるのですが、あくまで手段として捉えるべきである。「何を」「なぜ」学ばせたいか、という点をカリキュラムデザインしていくとよい」との意見を述べた。

以上をもって本日の議事を終了した旨を議長が述べ、12時10分、閉会を宣言した。

第2回WWLカリキュラム開発会議議事録

日時：令和6年7月8日（月）11時25分～12時10分

場所・方法：オンライン（ビデオ会議システム（Zoom））

出席者：木本健太郎 様（カリキュラムアドバイザー）

〈ISA グローバル探究チーム〉

村野廣太 様、郷地 順 様

〈ISA 東海支社 国際教育アドバイザー〉

伊藤春香 様

〈名古屋国際中学校・高等学校〉

小林 格（校長）、栗本貴行（中高担当部長）、片山寿弘（参与）

鈴木 悟（教頭）、黒宮祥男（国際教育推進部主任）

議事の経過及び結果

鈴木教頭が議長となり、11時25分、開会する旨を宣言した。議事内容は次の通りである。

議事内容：

黒宮国際教育推進部主任からの現在行われている高大連携の取り組みの説明に続

き、高大連携に関して次のような意見があった。

〔木本様〕

- ・大学が求める資質のある人材を取るのが大学入試、高大接続である。
- ・大学の入試形態から、大学が求める人材が見えてくる。
- ・選択式や記述式だけでは測れない資質を、AO入試などパフォーマンス課題で測るようになってきている。
- ・入試設計をシェアした上で、求められる力をつけるプログラムを作るとよい。
- ・課題研究において面接や小論文を取り入れていくことも高大連携と言えるのではないか。

〔村野様〕

- ・探究学習の評価のため生徒に論文を作成させていたことがあったが、論文の評価作業が大変であった。大学生（４年生等）がメンターとなって評価を支援できるようなシステムができると、高大連携の観点からもよいと思う。
- ・ループリックなど客観性をもたせた評価基準をあらかじめ伝えておくと、生徒が評価を受け入れやすくなる。
- ・やっていることを認められることで自己肯定感が上がり、学力が低い生徒でも置いていかれずに、自分で動いていけるようになることが期待できる。
- ・大学の高度な研究を知り、そのノウハウを自分のやりたいことに落とす。その後徐々に大学から離れて自分で動いていければキャリアに直結するのではないか。

〔木本様〕

- ・学術重視型（アカデミックな教育）の大学以外に職業重視型（実践的な教育）の専門職大学等もあり、大学の定義が広がっているので、高大接続のターゲットの整理が必要である。
- ・学術重視型の大学との高度な研究を視野に入れた高大連携では、高校生に高いレベルの学力を求めることとなる。

〔黒宮主任〕

- ・学力の低い生徒を置き去りにしないために、やりたいことのスキルを上げるなど職業重視型の高大連携も必要となるのではないか。
- ・それぞれの型に合った２つの探究学習の形があってもよい。

〔小林校長〕

これまでの会議等で基礎学力の重要性が話されてきたが、それに関しては本校では宿題が少ないことが課題となっている。あらためてそのことを教務に伝えるように。

以上をもって本日の議事を終了した旨を議長が述べ、１２時１０分、閉会を宣言した。

第3回WWLカリキュラム開発会議議事録

日時：令和6年9月30日（月）11時25分～12時10分

場所・方法：オンライン（ビデオ会議システム（Zoom））

出席者：木本健太郎 様（カリキュラムアドバイザー）

〈ISA グローバル探究チーム〉

村野廣太 様、郷地 順 様

〈ISA 東海支社 国際教育アドバイザー〉

伊藤春香 様

〈名古屋国際中学校・高等学校〉

小林 格（校長）、栗本貴行（中高担当部長）、片山寿弘（参与）

鈴木 悟（教頭）、黒宮祥男（国際教育推進部主任）、宮尾国之（事務局）

議事の経過及び結果

鈴木教頭が議長となり、11時25分、開会する旨を宣言した。議事内容は次の通りである。

議事内容：

1 グローバル教育について

黒宮国際教育推進部主任が名古屋国際としての特色あるグローバル教育の取り組みについて意見を求めたのに対して、次のような意見が交わされた。

[木本様]

・海外研修について、観光や異文化交流だけとなりがちであるが、フィールドワークの内容も充実しており、ライブ中継を行うなどより進んだ取り組みとなっているところなどは強みと言える。

・他校を見ても「社会課題の解決」を内容としたプログラムが増えているように思う。現地でやれることは限られるので、事前学習などプログラムの内容の高度化を図っていくとよい。

・DXの導入に伴う文理融合の展開を期待したい。

[黒宮主任]

・事情により海外に行けない生徒もいる。何らかの形で参加させたい。

・金銭的な事情と思われるが、学校によっては海外研修の実施をやめているところもある。

[木本様]

・ライブ中継は情報量も多く、報告会等で報告を聞くだけよりも印象が強く残りやすい。これも特色を持てる方法の一つである。

・中継を介して双方向でやりとりをすれば、さらに参加してる感が強まると思う。

[伊藤様]

・インバウンド事業として、キャンプなど学校の行事に来日外国人に参加してもらうケースがあるのだが、より深い異文化交流となっているようである。

[村野様]

・ライブ中継を見る限り、現地の方と絡んでいる場面が少なくもったいないと感じた。

・日本にないものを学びの対象に選びがちであるが、両国にあるものの比較の方が、知識や経験として身になりやすいと考える。日本を含めての「グローバル」を考えるとよい。

[伊藤様]

・交流にとどまるケースが多いが、オーストラリアコースの現地学校の授業に3週間に渡って参加する、というのは海外研修として珍しい。

・費用の都合があるとは思うが、ゆかりのあるカナダがないのは残念に思う。時期によっては費用を多少抑えられる。

[小林校長]

・ライブ中継の視聴者に連携校や本校生徒が少ないのが残念であった。保護者は入っていたようである。

・事後をしっかりとってほしい。

[木本様]

・他校の例として次のようなケースがある。海外での研修に行く生徒も行かない生徒も一緒に事前学習をする。渡航する生徒はグループの代表としてフィールドワークを行い、帰国後に行かなかった生徒と事後のまとめをして発表する。

・事後の振り返りまでを充実させるカリキュラム設計が重要となる。

2 STATION Aiの活用について

続いて、STATION Aiとの関わりについて黒宮主任が「スタートアップに関する情報獲得や入居者との交流をSTATION Aiの活用に期待している。そこでの高校生国際会議の実施を検討しており、今後その可能性を探りたい」旨を述べたのに対し、木本様から「アントレプレナーシップ教育の要素を入れないと、STATION Aiの目的との相性が悪く活用は難しいのではないかと」の意見があった。

以上をもって本日の議事を終了した旨を議長が述べ、12時10分、閉会を宣言した。

第4回WWLカリキュラム開発会議議事録

日時：令和6年11月11日（月）11時25分～12時10分

場所・方法：オンライン（ビデオ会議システム（Zoom））

出席者：木本健太郎 様（カリキュラムアドバイザー）

〈ISA グローバル探究チーム〉

村野廣太 様

〈名古屋国際中学校・高等学校〉

栗本貴行（中高担当部長）、片山寿弘（参与）、鈴木 悟（教頭）

杉尾志帆（教頭）、黒宮祥男（国際教育推進部主任）

議事の経過及び結果

黒宮国際教育推進部主任が議長となり、11時30分、開会する旨を宣言した。
議事内容は次の通りである。

議事内容：

黒宮主任が12月に開催する高校生国際会議の内容の説明をし、それに関して「名古屋国際高校らしさ」や「人数を集めて課題を議論して発表する、という典型から脱却」など特色付けについて意見を求めたのに対し、次のような意見が出された。

〔木本様〕

・STATION Aiでの開催とのことなので、木本の地元岡山にあるスタートアップ支援拠点「ももたろう・スタートアップカフェ（ももスタ）」との連携をしてみてもどうか。

・「越境」というキーワードが教育分野でよく見られるようになっているが、new borderlessの5つのコンセプトはどれも「越境」による学びの獲得が期待できる。

・ケースの活用については、基礎となる知識や情報が少ないとケースに対応できないので、事前学習が必要となる。

・ケースを配布するときに、「アントレプレナーシップ教育」「リーダー教育」の一貫として、など説明があると入りやすい。

〔村野様〕

・「ボーダレスが実現できる」というところは名古屋国際らしさを出せる部分である。

・概して生徒は自分から学びを創出することが苦手であるが、この会議での経験でそれを払拭できる可能性がある。

・生徒の提案や発表を大人が受け止めてくれる、ということを認識できることは、生徒自身との関わりの対象が学校の外に向かうきっかけになる。

・イベントで得た学びをその後につなげるために、生徒に起こった変化をどう追いかけていくかが大切になる。

続いて、黒宮主任から生徒の主体性について「生徒に主体的に取り組ませると内容が浅くなりがちであるが、いかがすべきか」との質問があり、木本様からは「ファシリテーターは経験のある大人にすべきである」と、村野様からは「イベント自体が生徒の発案なのかどうかによるが、大人の側で用意されたイベントであるなら、

ある程度は大人の介入が必要となる。その中でもリーダーシップはとらせたい」との意見があった。

以上をもって本日の議事を終了した旨を議長が述べ、１２時１０分、閉会を宣言した。

２ カリキュラムアドバイザーの報告

２０２４年度のWWLカリキュラム開発会議の活動に関して、以下の通りご報告する。

内容としては、２０２３年度までの議論を踏まえて、２０２４年度カリキュラム計画として、主に「教育課程の改編」「高大接続の方法」「国際理解に関する実践活動」について議論を行い、コメントフィードバック及びアドバイスを実施した。

まず「教育課程の改編」では、WWLに加えDXハイスクールの認定を受けたことを踏まえて、国際教養科の１年生についてDXハイスクールの要件を満たすようカリキュラム変更を行った。データサイエンスを前提とした探究学習である「課題研究授業」を企画実施、先生や生徒に対するアドバイスを実施した。今後は、これまでのWWLの実績やノウハウに、新しくDXハイスクールの要素が加わり、文理融合した革新的カリキュラムへ発展していくことが望まれる。

次に、「高大接続の方法」では、大学の存在意義を改めて捉えなおし、従来より実施している単位認定や大学教員による出前授業などの取り組みだけでなく、高校では何をやるべきなのかを議論した。大学は「研究機関」であることを踏まえ、高校では大学の研究に繋がるアカデミックな探究学習を実施すべきであるとアドバイスを行った。今後は名古屋国際らしい高大接続の仕方を作っていくことが必要だと思われる。

最後に、「国際理解に関する実践活動」では、国際理解研修や高校生国際会議について議論を行った。PBL学習を取り入れ、真に生徒主体の活動ができるようにそれぞれの具体的施策についてアドバイスを行った。高校生国際会議は、オープンイノベーション拠点であるSTATION Aiにて初めて実施し、素晴らしいハードがそろえる環境ということもあり、他校や企業・大学等も含めた新しい交流の拠点づくりができたように感じている。

今後、名古屋国際はこれまでの国際という強みを生かしながら、DXハイスクール含めて文理融合した日本発のグローバルカリキュラム作りにチャレンジしてほしい。

名古屋国際中学校・高等学校カリキュラムアドバイザー
木本健太郎

【14】講評

WWL事業の取り組みに対する講評

WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアムの取り組みは、国際的な視点を取り入れた教育の発展を目指す重要な取り組みである。特に2024年12月23日に開催された高校生国際会議は、その理念を体現する場として大きな意義を持つ。本会議は、「対話による学びの深化」「多様なアクターとの協働」「技術革新の活用」を核とし、WWLの目指す「グローバルな学び」の方向性を強く打ち出したイベントである。

グローバルな課題に対してケーススタディを活用した対話が展開された。特に、カンボジアの孤児院ビジネスを題材としたケース討議では、ボランティアツアーが貧困ビジネスに加担する可能性について議論が交わされた。このテーマは、社会的課題の本質を探るとともに、参加者に批判的思考を促す契機となった。本会議には、吉本興業、国連地域開発センター、NPO、企業など多様なアクターが参画した。名古屋のみならず、高知や奈良の高校も加わり、議論の多様性が高まり、学びの広がりや深淵化が生まれた点は特筆すべきである。国際会議以外にも、国際バカロレアのATLを活用した評価の実施、名古屋商科大学との連携強化、短期留学や高大接続の取り組みが進められたことも重要な成果である。

一方で、WWLが掲げる多岐にわたる事業の継続性を確保するためには、優先順位の明確化が求められる。特に、「名古屋国際高校だからこそできること」に焦点を絞ることで、持続可能な運営モデルの構築が可能となる。助成金への依存を減らし、部活動や学外活動を通じた自主的な取り組みを促進することが、プログラムの自走化に向けた鍵となるだろう。

メタパースの活用は新たな学びの可能性を示したが、DX・データサイエンスとの連携強化が今後の課題として挙げられる。加えて、学習成果の可視化に向けて、定量的な評価のみならず、質的な変化も捉える指標の導入が求められる。教育評価の観点からは、WWLの成果を客観的に測定し、継続的な改善を図ることが不可欠だが、同時に評価に過度な労力を割きすぎることによって前進が阻害されるリスクも考慮すべきである。

高校生が自ら考え、世界とつながる機会を提供するWWL国際会議の意義は極めて大きい。今後も、唯一無二の存在としての名古屋国際中学・高等学校の取り組みが、さらに発展することを期待したい。

名古屋商科大学大学院マネジメント研究科
伊藤 博 教授

「高校生グレーター・ナゴヤ・プロジェクト」に見る探究的な学びの可能性

名古屋国際高校が実施してきた「ニューノーマル時代の地域創生を加速する高校生グレーター・ナゴヤ・プロジェクト」を見てきて、これからの時代の学びのあり方について改めて多くのことを考えさせられている。先を見通すことが難しい今日の社会において、次世代の子どもたちが身に着けるべき資質・能力とは何なのか。私たち教育に関わる多くの人間が、その答えを探して日々模索している。そうしたなか、生徒たちが主体的に学びと向き合い、それを学校が全力でサポートし、地域のリソースを最大限に活用しながら、国境を越えたり、テクノロジーを駆使したりして、この「高校生グレーター・ナゴヤ・プロジェクト」は発展してきたと強く感じている。

「自らの地域課題の発見と解決に向けたアイディアの創出と実践」を研究テーマに掲げている同プロジェクトは、いわゆる探究的な学びの新たな可能性を切り拓く挑戦であると、私は捉えている。そもそも、探究的な学びは、①身近な疑問を自分の課題として捉え、②解決に必要な情報を集め、③整理・分析し、④結果をまとめて発表する、というプロセスを通して実現するものである。その過程で、解決策を見つけると同時に、新しい課題にも気づく力を養うことを目指している。さらに、探究を進めることで、複雑で多様な問題に対応できる力も育てることが可能になる。このような学びは、VUCA（変動性、不確実性、複雑性、曖昧性）の時代に必要な力を身につけるために役立つと考えられている。

私たちが生きる時代は予測困難であり、これからの子どもたちが生きていくなかでさまざまな挑戦が待ち受けている。たとえば、国連が2015年に採択した「持続可能な開発目標（SDGs）」でも、世界が直面する多くの課題が示されている。探究的な学びを通して、それらの課題を理解し、解決策を考える力を身に着けることは、次世代の子どもたちが身に着けるべき重要な資質・能力である。そのため、探究的な学びは、現在の学校教育において重要な役割を果たしている。しかしながら、実際に探究的な学びを実践するにあたり、多くの学校で、多くの先生方が、難しさを感じているのが現状であろう。教科書で学ぶ授業とは異なり、必ずしも「正解」があるわけではないため、面白さを感じる一方で、これで良いのだろうかという思いが常につきまとうことになる。そのため、多くの先生が試行錯誤を繰り返しながら、探究的な学びに取り組んでいると考えられる。

そうした状況のなか、学校が明確な目標を掲げ、先生方がそれぞれの役割を意識し、地域の関係者・関係機関と連携し、さらには他の高校や大学といったパートナーと協働することで、優れた教育実践を積み重ねてきた「高校生グレーター・ナゴヤ・プロジェクト」から、私たちは多くのことを学べるはずである。また、テクノ

ロジーを活用して仮想空間を整備するなど、新たな工夫がいくつも積み重ねられている。今後の名古屋国際高校にお願いしたいことは、このプロジェクトで得た知見・経験を言語化し、日本のさまざまな学校や先生方が参考にできるようなモデルとして提示することである。そうした試みはすでに同校によって行われてはいるが、より汎用性の高いモデルが提示されていくことを心から期待している。

東京大学大学院教育学研究科
北村友人 教授

【15】次年度に向けて

名古屋国際中学校・高等学校は、令和4年4月からWWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業（以下、WWL）の指定を受け、令和6年度は最終年度となる。昨年度の活動報告書では、「1年目を創成期とするならば、2年目は創成期の実践活動を精査する時期」と書いた。そして、「カンブリア紀における大爆発のごとく生まれたさまざまな実践活動の中から何が残り、何が減ぶかというイメージだ」とも書いた。令和6年度は、「完成期」となるはずであったが、愛知県にインキュベーションセンターであるSTATION Aiが開業し、本校もDXハイスクールの指定を受けるなど時代の流れが計画当初よりもハイスピードに進んでいることにより、「完成期」でなく、「さらなる挑戦期」という印象になった。3年前に完成した構想調書は、すでに過去のものとなり、その実現は重要であるが、時代はそれよりもより良い環境作りに動いている。その葛藤の中で本校は、調書と時代の誤差を調整しながら、さらなる挑戦に舵を切った1年であった。

1つ目の挑戦としては、STATION Aiへの登録である。本校は、現在までユネスコスクール（ASPネット）、SGHネットワーク、愛知県SDGs登録、名古屋市SDGsネットワークなど学外との連携や情報共有を目的としたネットワークを構築してきた。本年度は、名古屋市昭和区に新しくできたSTATION Aiに登録することにより産学官民が集う



場に参画をした。STATION Aiへの登録の大きなメリットは2つある。まずは、出会いである。STATION Aiには、登録者同士のコミュニティがある。そこでは、企業検索や直接のメール交換、イベントの周知や公募などが可能である。このコミュニティを利用し、多くの方と連携を取ることができ、高校生国際会議への企業の参画や今まで繋がりが持てなかった分野の方の参画も可能になった。なぜ、これができるかと考えたが、おそらくSTATION Aiや愛知県というバックボーンがあるからと考える。その信頼の場に所属することにより、出会いの壁が低くなり、よりスムーズで多様な交流が生み出されている。これはSTATION Aiの本来の目的が体现されていることである。もう一点が、先進的なイベントの多さである。STATION Aiの1階のイベントホールや2階会議室等では常に色々な趣向を凝らしたイベントが開催されている。その開催情報は、コミュニティで常に配信されており、参加も比較的しやすい。また、カフェのような感覚で実施されているものもあり、その柔らかな環境が多くの連携や交流を創出している。本校が実施した令和6年度高校

生国際会議もそのイベントの一つである。会場はガラス張りになっているため、参加登録をしていない人もそこから覗くことが可能であり、コミュニティにおいても応援のメッセージももらっている。STATION Aiのような空間は、学校間においても必要な空間であると考え。もし、STATION Aiの学校版があったならば、勤務先の職員室以外に他の先生と交流ができる自由な職員室があり、そこでは新しい議論やイベントが創出され、授業後に色々な学校の生徒が集い、交流をする。その運営に関しては、色々な課題はあるが実験的にそうした新しい学校へのチャレンジも面白いと感じる。そうした考えは、STATION Aiでの取り組みがなければ生まれないものである。

2つ目の挑戦は、ケーススタディの実践である。本校の系列大学である名古屋商科大学では、全授業でケーススタディを導入している。その手法でグローバル課題に関するケースをALネットワーク内の連携校や他校、そして外部の企業や公的機関の方とともに学ぶという取り組みへの挑戦である。同一のケースに対して世代や地域を超え



た議論や答えの共有は、WWLのALネットワークがあれば可能である。また、ケースを使用することによって、リアリティと決断の要素が加わり、グローバルリーダーの素養の獲得にも大きな役割を持つと考える。高校生国際会議では、「カンボジアボランティアツアー」に関するケースを使用した。そのケースを会議開催以前に参加校の生徒に提示し、自分なりの答えを考え、会議に参加する。そして、会議では社会人アドバイザーの意見や他校生との意見を交え、ケースに関する回答を昇華させることを目的とした。このケースを使用するという点には、参加する生徒に多様な考察をしてほしい、そして、決断をしなければいけない場面が人生にあるということを考えさせる狙いもある。さらに、このケーススタディとは、大人の世界でのスキルアップにも使用されているので、参加してくださる社会人アドバイザーの方や参加教員、一般参加の方も同じような考察を始め、自分なりの決断を考え始める。つまり、高校生だけでなく、全ての参加者がその空間をフラットに共有することが令和6年度高校生国際会議の本当の狙いである。高校生のイベントの内容に関して、高校生レベルの内容になりがちな場面が多くある中で、社会人の方も参加したくなるような空間の創出を今後していきたいと考えている。

最後は、フューチャーデザインである。WWL指定最終年度を迎え、学校設定科目WWL特論を令和7年度以降どのように改変していくかという議論の中で、フュ

ーチャーデザインというキーワードに
行き着いた。SNS、生成AI、DX、さ
らにコスバ・タイパという言葉から現
代社会においてより効率化が求められ
ている。「より早くゴールに行きつく
こと」「ゴールが明確であること」が
求められている。しかし、物事には対
局があり、「なかなかゴールにいけない、
ゴールまで到達しない、ゴールが



複数ある」という点も学ぶ必要があると考える。本校の国際理解研修カンボジア・ベトナムコースの実践の中にカンボジアのコンブンブルック村でのマングローブの植林がある。今年で5年目になる。初年度植えたところを見ても、まだ小さな木だった。しかし、いずれ木は成長し、森を形成するだろう。それは、植えた生徒らが大人になってからかもしくは次の世代になる。植えた木は、自分のためでなく、もっと先の未来世代のためにある。未来世代について考え、その状況がある程度予想し、現代世代で何ができるのかを考えることも必要ではないかと考える。未来を想定することは、絵空事に感じることもあるが、自分が生きている時代さえ良ければ良いという考えは薄れるのではないだろうか。そうした点も踏まえ、高校生国際会議のケーススタディにおいて、メタバース内に未来空間を作り、高校生に未来人との対話をしてもらった。未来設定は、教員で議論し、日毎に違うパラレルワールドを作った。そこを体験した高校生は、状況の違う未来（カンボジアの未来）を知り、自らのケースの答えが、その未来に適しているかを考察することになった。フューチャーデザインは、我々教員も試行錯誤であり、フューチャーデザインの研究も現代において進化し続けている。そうした点も踏まえて、挑戦を目標とした年において必要なことであつたと考えた。

こうした挑戦への考え方は、SGHアソシエイトから地域との協働による高等学校教育改革推進事業、そしてWWLへの指定まで長い年月を経て、常に挑戦をしていたことが影響している。本校の校訓は「Frontier Spirit」である。「失敗するかもしれない」「前例がない」「効果はあるのか」そうした足を踏み出すタイミングに発せられそうな躊躇するワードでなく、「失敗しても良い」「前例がないことをやろう」「効果がなくても、それを知ることが効果」という考えを持ち、活動が続けてきた。その実践活動をALネットワークやWWL/SGHネットワーク、地域や企業の方の参考になれば良いと思う。成功・失敗という実績を報告することに加え、挑戦に至った経緯や志を大切にしてきた。その結果、名古屋国際中学校・高等学校のあり方が見えてきた。

令和6年度は、本校を視察する他校が多い年でもあった。事業担当者として、目に見える大きな実績やデータ分析が丁寧に行えたかという正直うまくいっていないと反省している。反省はしている反面、さまざまな実践活動をして、取捨選択をし続けたことにより目指すべきものが明確になったことは確かである。少なくとも教員が新しいことを提供し続けることで、少しずつだが、自分で考え、色々な活動に挑戦する生徒が生まれてきていると感じる。



来年度からの活動は、持続的に活動が続けることが最大の目標になる。大きな枠組みはこの3年間で構築できたと感じる。反面、まだまだ挑戦をし続けていくのが名古屋国際中学校・高等学校らしさでもある。今後の挑戦は、次世代の教員にかかっている。道を切り拓く一人になるのは、大きなリスクと勇気を伴うが、誰かがやらなければ道はできない。誰かが作った道を歩きながら誰かの成功と失敗を拾うのではなく、挑戦することで道を作り成功と失敗を生み出す開拓的な学校であり続けていきたいと考える。

名古屋国際中学校・高等学校
国際教育推進主任
黒宮祥男

謝辞

本研究開発は、文部科学省のWWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業の助成を受けたものです。ここに深く感謝申し上げます。

文部科学省 WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業

名古屋国際中学校・高等学校

2024年度 研究開発実施報告書

2025年3月発行

発行 学校法人栗本学園 名古屋国際中学校・高等学校

〒466-0841 愛知県名古屋市昭和区広路本町1-16

TEL：052-853-5151

印刷 株式会社 NPCコーポレーション

〒530-0043 大阪府大阪市北区天満1丁目9番19号

TEL：06-6351-7271

FAX：06-6352-7479



名古屋商科大学系列校

名古屋国際 中学校
高等学校

NUCB INTERNATIONAL JUNIOR & SENIOR HIGH SCHOOL